

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）

青年期のボランティア活動への参加行動・
不参加行動を規定する要因
Factors Affecting Youth Participation
and Non-participation in Volunteer Activities

2017年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科
荒井 俊行
ARAI, Toshiyuki

研究指導教員： 西村 昭治 教授

第1部 序 論

第1章 本論文の背景	1
第1節 ボランティア活動の現代的役割・意義	1
第2節 我が国のボランティア活動の状況	5
第3節 若い世代のボランティア活動の現状	7
第2章 先行研究の概要	9
第1節 ボランティア行動に関する研究	9
第2節 ボランティア行動の心理学的研究	11
1. 心理学的研究の概観	11
2. 参加動機に関する研究	11
3. イメージに関する研究	13
4. 参加成果に関する研究	15
5. 先行研究の課題	17
第3章 本論文の目的と構成	19
第1節 本論文の目的と用語の整理	19
1. 本論文の目的	19
2. 本論文の用語整理	20
第2節 本論文の構成	23

第2部 本 論

第4章 ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する内的要因の検討	26
第1節 参加志向動機・不参加志向動機の構成要因 [研究1]	26
第2節 ボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究2]	40
第3節 参加成果が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究3]	53

第4節	参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究4]	59
第5章	ボランティア活動への参加行動・不参加行動に及ぼす環境要因・相互要因の検討	73
第1節	身近な参加経験者の有無が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究5]	73
第2節	援助・被援助行動の経験が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究6]	77
第6章	心理的欲求・参加経験の質がボランティア行動に及ぼす影響の検討	81
第1節	心理的欲求と参加志向動機・不参加志向動機・参加成果志向との関係 [研究7]	81
第2節	参加経験の主観的な質が今後の参加行動に及ぼす影響 [研究8]	90
第3部	総括	
第7章	本論文のまとめ	97
第1節	本論文の結果のまとめ	97
第2節	ボランティア行動への生起・促進モデルの提案	101
第3節	本論文の意義	106
第4節	今後の課題と展望	108
謝辞		110
引用文献		111

第1部 序 論

第1章 本論文の背景

第1節 ボランティア活動の現代的役割・意義

阪神・淡路大震災の被災地に多くのボランティアが駆けつけ（田中 2011）、「ボランティア元年」といわれた 1995 年の阪神・淡路大震災から早くも 20 年以上が経過し、この間、ボランティア活動は日本の社会に広く浸透し、地域コミュニティや環境、福祉、国際協力などさまざまな領域で不可欠な存在と認識されるようになり、2011 年 3 月に発生した東日本大震災が、そうした社会認識に拍車をかけた（田中・廣瀬 2013）。現在、ボランティア活動は単に「奉仕」や「社会貢献」ということのみならず、新しい社会を創る先駆的な役割やボランティア自身の自己実現の手段など、多様な意味を含むものとして理解されるようになった（田中 2011）。そこで、「ボランティア」というテーマは、いまや、日本社会の将来を構想していくうえで、キーストーン的位置を占めている（小澤 2001）ことから、本論文の背景として、まず、ボランティア活動の現代的役割・意義について、社会的役割と教育的意義から以下のとおり整理した。

ボランティア活動の社会的役割

佐藤（1988）は、「21 世紀は、ボランティアタリーに共通目的のために結集する非営利・非政府セクターが活躍する時代にならざるを得なくなるだろう」と述べたが、今日のボランティアの活躍と多くのボランティアが支える NPO の発展をみると「ボランティアの時代」（田中 1998）になったとも言える。それは、現在ボランティア活動が果たす社会的役割がある（新崎 2005）ことの証左に他ならない。例えば、阿部（2008）は、ボランティア意識の成熟が、制度の発展と表裏一体になっている社会を「福祉社会」と呼び、ボランティアを基底として「福祉社会」の理念から、ボランティアに期待される社会的役割を要約して、（1）地域社会の福祉ニーズに積極的に応えようとする先駆的役割（2）公的制度の不備を補う補完的役割（3）制度や行政施設に対して建設的批判をする批判的役割（4）行政施設と住民との間で理解・協力者として活動する架橋的役割（5）地域の福祉を守り育てる相互扶助的精神を普及する啓

発的役割の5つをあげている。

この背景には、環境、福祉、青少年育成、コミュニティ形成など多くの公共的な領域において、行政だけでは担いきれない課題が肥大化したことがあり（田中 2011）、既存の社会システムだけでは、社会で起きているあらゆる課題に対応しきれなくなっているという時代への危機感がある（三谷 2016）。日本では少子高齢化が進行しており、今後、他者への依存を必要とする人が増えていくと予想される（三谷 2016）。そこで、公助・自助を第一としつつも、国家や企業、家族に頼り切ることが難しい社会情勢のもとで（三谷 2016）、地域住民の主体的な活動やNPOなど非営利の民間組織の活躍が期待され（田中 2011）、他者や組織のために自らの時間や労力を提供する、多くのボランティアが必要とされる（三谷 2016）のである。

ボランティア活動の教育的意義

ボランティア活動には、社会的役割に加え、近年の我が国の文教施策に見られるとおり教育的意義がある。学習成果を活かしたボランティア活動の重要性は、文部科学省の答申などで繰り返し強調されてきた（田中 2011）。例えば、生涯学習審議会（1992）の答申「今後の社会活動の動向に対応した生涯学習の振興方策について」では、①「ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという視点」②「ボランティア活動を行うために必要な知識・技術を習得するための学習として生涯学習があり、学習の成果を生かし、深める実践としてボランティア活動があるという視点」③「人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって、生涯学習の振興が一層図られるという視点」が示され、ボランティア活動に内在する教育的意義やボランティア自身の自己実現に向けた学習という側面が注目された（原田 2010）。

そして、ボランティア活動の教育的効果や意義が注目され、学校教育にボランティア活動を取り入れようという動きは、近年日本において顕著になっている（池田 2006）。我が国における青少年のボランティアに関する授業時間内での教育活動の動きとしては、まず中央教育審議会（1996）の答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、「生きる力」が強調されると同時に、ボランティア活動への言及がなされた（原田 2010）。その結果を受け、授業時間内におけるボランティア活動は、「総合的な学習の時間」の創設によって積極的に取り扱われるようになった（新垣 2009）。小学校・中学

校・高等学校へ告示された新しい学習指導要領（文部科学省 1998a, 文部科学省 1998b, 文部科学省 1999）には、（１）総合的な学習の時間においてボランティア活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に導入すること、（２）特別活動においてボランティア活動などの体験的な活動の機会をできるだけ取り入れるようにすることなどが盛り込まれ、「ボランティア活動」や「奉仕」等の体験学習の導入が図られ、学校でのボランティア学習もいっそうの広がりを見せている（内海 2014）。

また、最近の議論で言えば、アクティブ・ラーニングの視点から、現行の学習指導要領の設立に向けて、中央教育審議会では、体験活動の重要性が謳われ、前学習指導要領からキーワードとなっていた「生きる力」はもとより、その後使われた人間力、キーコンピテンシー（OECD）などの影響から、社会における実生活と関連付けた体験活動がとりわけ重視されている（市川 2016）。具体的な体験学習としては、例えば、職業体験、市民体験のほかに、ボランティア活動の企画や実施の体験（市川 2016）などが挙げられている。

そして、大学教育に関しては、中央教育審議会（2012）の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換について」では、学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できることから、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められている。そのために学生の学修への動機付けを強め、社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つインターンシップ、サービス・ラーニング、社会体験活動や留学経験等といった教室外学修プログラム等を提供する必要性が提起された。そこで、ボランティア活動を正課教育に取り込むことや学生ボランティアセンターを設置するなどの支援が行われるようになった（奥山ほか 2010）。例えば、日本学生支援機構（2009）の調査では、ボランティア関係科目の開設校は 35.4%となり、相談窓口設置も 82.4%になるなど、大学のボランティア活動に対する取り組み体制は整備されてきた。また、日本学生支援機構（2009）の調査では、「ボランティア活動を行う学生を積極的に評価」する大学は 44.6%と大学の重点施策にもなっている。

さらに、教育過程でのアクティブ・ラーニングの取り組みの急速な増加に伴い、大学教育のキーワードとして「アクティブ・ラーニング」が挙げられるようになった（岩田 2016）ことから、大学においてもアクティブ・ラーニングのひとつの実践として、ボランティア活動の体験を具体的に位置づけている大

学（例えば，中央大学，敬和学園大学，金城学院大学，名古屋商科大学，東京福祉大学，立命館大学など）も多くなっている。しかしながら，大学では2000年代から体験的な学習機会を用いた教授法・学習法が注目を浴び，試行錯誤が続けられている（石野 2015）のが現状である。

第2節 我が国のボランティア活動の状況

統計データから、我が国のボランティアの現状を観てみると、例えば、全国社会福祉協議会が把握しているボランティアの人数（ボランティア団体に所属するボランティアの人数と、個人で活動するボランティアの人数を合計）では、1985年には280万人であったが、阪神・淡路大震災が起きた1995年には500万人、2005年には730万人、2011年には860万人となっている（全国社会福祉協議会 2015）。また、総務省が実施した「平成23年社会生活基本調査」によれば、年に1回以上、ボランティア活動をおこなっている人の割合は26.3%である（総務省 2011）。この「日本のボランティア活動参加者は約4人に1人」という数字からみると、実際のボランティア人口は上記の全国社会福祉協議会が把握する人数をはるかに超えると推察される。これはボランティア活動の普及啓発が進んできた結果でもあり、人々のなかにボランティアが定着してきたからといえる（渡邊 2010）。

しかしながら、ボランティア行動率の変化をみると、総務省の「社会生活基本調査」（2011）によれば、1986年（25.2%）、1991年（30.0%）、1996年（26.9%）、2001年（28.9%）、2006年（26.2%）、2011年（26.3%）と大きな変化はなく、しかも注目すべきことに、阪神・淡路大震災後の1996年調査時点でも、東日本大震災後の2011年調査時点でも、行動者率に大きな変化はみられないのである（三谷 2016）。三谷（2016）が指摘するとおり、ボランティア人口は増加しても、実際の日本のボランティア活動はある特定層の人たちにいつも偏って担われ、成り立っているのかもしれないという見方もできる。実際に年齢層に限ってみると、35～39歳（30.2%）、40～44歳（35.6%）、45～49歳（33.4%）、50～54歳（30.3%）と30年代後半から50代前半の壮年期で活動率が高くなっている（総務省 2011）。この年齢層の人は学齢期の子どもがいることが多く、学校を通じたボランティア活動がなされやすいために見出された傾向だと推察される（三谷 2016）。

ボランティアの活動分野は、例えば、全国社会福祉協議会（2010）の調査報告では、ボランティア活動を実施する団体・グループ（複数回答）では、「高齢者の福祉活動」（36.3%）、「障害者の福祉活動」（31.1%）、「子育て（乳幼児）に関する活動」（16.0%）と全体的に福祉の領域での活動が主流であるとはいえ、「地域の美化・環境保全に関する活動」（21.9%）、「まちづくり

に関する活動」(21.3%)、「青少年(児童)の健全育成に関する活動」(19.6%)、「教育・文化・スポーツ振興」(19.1%)、「災害時のボランティア活動」(15.4%)など、多様な分野で、多様な活動に彩られるようになった(岡本 2005)。

第3節 若い世代のボランティア活動の現状

我が国の将来を担う若い世代のボランティア活動についても、1995年の阪神・淡路大震災を契機として、地域社会にいる若い世代のボランティア意識も急速な高まりをみせて、近年、国内外を問わず学生を中心にボランティア活動は様々な展開をみせている。近年、前述のとおり政府の青少年の教育施策の一環として、「ボランティア活動」が活用されていることから、その教育を受けて育った若い世代での「ボランティア活動への参加」が着実に広がるのではないかと期待された。

しかしながら、前記の総務省（2011）が行った「平成23年社会生活基本調査」では、20歳代の若者における1年間に「ボランティア活動」を行った割合が、他の世代に比べ低く、調査対象者全体の2割に満たなかった。また、大学生のボランティア活動参加経験は、教育課程での活動経験も含めると8割程度（荒川ほか 2008）にもなったが、「小・中・高等学校の授業の一環として」のボランティア活動体験は、大学入学以降のボランティア活動に結びつかないこと（荒川ほか 2006）が示された。そして、諸外国との活動状況の比較でも、例えば、内閣府（2009）が世界の5カ国の青年（18～24歳）を対象に実施した第8回「世界青年意識調査」によると、「現在、活動している者」は、アメリカ（17.6%）が最も高く、韓国（8.2%）、イギリス（7.0%）、フランス（6.3%）、日本（5.6%）の順となっている。また、同じく内閣府（2013）が7カ国の青年（13～29歳）を対象に実施した平成25年度「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」では、「ボランティア活動に興味がある者」は、アメリカ（61.1%）が最も高く、韓国（56.9%）、イギリス（50.6%）、ドイツ（50.4%）、スウェーデン（42.8%）、フランス（42.6%）、日本（35.1%）の順となっているなど、ボランティア活動に対する意識も諸外国に比べ低い。このように、大学生を中心とした若い世代での「ボランティア活動」への継続的な参加行動やボランティア活動に対する意識が定着したとは言い難い。現在の大学生は、「総合的な学習の時間」が本格的に実施された世代にも拘わらず、「ボランティア活動」への参加が定着せず伸び悩んでいるのだろうか。

これからの少子高齢化の社会を考えていくと、ボランティア活動が果たす社会的役割の高まりと共に、次世代を担う大学生を代表とする若者のボランティア活動への参加への期待は大きく、今後の持続可能な社会の実現には若者の積

極的な参加は不可欠であると考えられる。また、「人間力の向上」の国際的通用性という視点から、OECD では DeSeCo (Definition and Selection of Competencies : Theoretical and Conceptual Foundations) により「キー・コンピテンシー (Key Competencies)」が提起されたが、ボランティア学習から得られた能力・技術は、この「キー・コンピテンシー」の評価基準を十分に満たし、キャリア教育にとっても有効な教育である(齋藤 2010)と捉えられている。そして、主体的なボランティア活動は、大学生を社会に送り出す大学教育において(工藤 2012)、主体的学習へと学生を転換させるアクティブ・ラーニングの現場(中央大学 2017)として捉えられたことから、大学教育におけるボランティア活動の果たす役割への期待は大きく、「ボランティアのもつ教育力」の可能性は今後さらに高まる(齋藤 2010)と考えられる。

このようにボランティア活動が果たす役割の重要性は、今後益々高まると考えられる。しかしながら、ボランティア組織や大学等の教育機関は、若者にとって、本質的に魅力を感じるボランティア活動とはどのようなものなのか、全体像を把握できずに推進活動が行われているのが現状である(仁部 2006)。また、「大学とボランティア活動」を結合した研究や実践は、端緒にすぎないばかりである(齋藤 2010)。そこで、ボランティア活動をどこにもある、だれもが携われる活動として、さらに推進・普及させるためには、特に、次世代を担う若者のボランティア行動に関してボランティア活動推進の観点からの実証的な研究が求められているのである。

第2章 先行研究の概要

第1節 ボランティア行動に関する研究

ボランティア活動に関する研究は、社会学に限らず、心理学、経済学、政治学、哲学などさまざまな学問分野での研究対象となっている（三谷 2016）。我が国でも、以前は、社会福祉分野のものが圧倒的に多かったが、近年では、社会学や教育学はもちろんのこと、経済学、経営学や哲学、心理学などの分野においても、ボランティアに関する論文等が多数発表されるようになってきた（筒井 2002）。そして、ボランティアはさまざまな領域にまたがる活動・実践であり、その研究も複数の領域にまたがり、学際的に行われてきた（内海 2000）。このようにボランティアが大きな学術的関心を集めるのは、ひとえにこの社会現象がもつ多層的な現代的意義にある（三谷 2016）。

実証的な研究のひとつの観点としては、ボランティア行動も人間の行動のひとつであることから、その行動を引き起こす心のメカニズムを解明することができれば、ボランティア活動の現場に役立つと考えられる（妻鹿 2006）。そして、人間の様々な行動の内的メカニズムの解明は、多くは心理学の分野で研究されてきた。

心理学でのボランティア活動などの研究は、社会心理学の領域で主に取り扱われ、ボランティア行動のような「他者を助ける」行動自体は、向社会的行動（prosocial behavior）の一部である援助行動（helping behavior）の1つの形態（青山ほか 2000, 伊藤 2011）として、一般的に位置づけられてきた。そして、人々が多くの労力を見知らぬ人のために払うのかということに、社会心理学者は興味をいだいてきた（大嶺 2000）。

そもそも、ボランティア活動をはじめとする人助け行動に関する研究の歴史は他の研究主題に比べ新しく、1960年代以降からアメリカで次第に盛んになった（高木 1998）。援助行動研究の開始の引き金となる事件が1964年にニューヨークで起きたキティ・ジェノビーズ嬢殺害事件である（高木 1998）。早朝、アパートに帰宅した女性が駐車場で暴漢に襲われ、多くの住人が事件にきづいたにもかかわらず、誰も彼女を助けなかった事件である（LATANÉ & DARLEY 1970）。この事件が新聞に報道されると、心理学者・社会学者・文化人類学者などの社会学者は、それぞれの専門領域から独自の考えを発表した（高木

1998) . この研究に代表されるように、主たる援助行動の研究テーマは、援助場面に遭遇した場合、「人はなぜ他者を助けるのか（逆に、助けないのか）」という疑問からきており、研究者はそれぞれ独自の視点や目標を設定して、それに答える研究努力を続けてきた（妹尾 2005） . しかしながら、現実のわれわれの生活において、他者との関係は決して一過的なものばかりではない（西川 1997） ことから、次第に、従来の研究が抱いていた疑問が、援助の効果を期待した計画的・相互的・組織的な援助行動にも向けられ（妹尾 2005） , 今日のボランティア行動をテーマとした研究に繋がるのである .

第2節 ボランティア行動の心理学的研究

1. 心理学的研究の概観

我が国の社会心理学で、ボランティアに注目した先駆的研究は、広瀬らの研究（広瀬 1993, 杉浦・大沼・野波・広瀬 1998）であろう（渥美 2002）。人々のボランティア活動意識の高まりやボランティア自身への多様な内面的影響が示唆され、また、ボランティア体験学習が教育的役割として期待されることから、我が国のボランティア活動に関する心理学的研究も次第に増えてきた。しかしながら、従来の援助行動と一線を画して、ボランティア行動を取り扱った研究の歴史は浅く研究蓄積はまだまだ少ない。研究テーマも「人はなぜボランティア活動をするのか」というボランティア活動への参加動機の解明が主体の段階である。

現状の我が国のボランティア研究では、ボランティア活動のさらなる普及・推進を図るための知見を得るには十分とは言えない。そもそも、ボランティア研究自体の研究蓄積が少ないこともあり、ボランティア活動への参加行動の生起・循環過程を構造的に捉えた研究はほとんど見られず、現状、ボランティア行動を引き起こす内的メカニズムを解明するには至っていない。そして、ボランティア活動の普及・推進を図る観点からの実証的な研究は、これまでほとんどなかった。

そこで、ボランティア行動を規定する要因の分析に関わりの深い、ボランティア活動への参加動機・ボランティア活動イメージ・ボランティア活動の参加成果（援助成果）について先行研究を概観のうえ、ボランティア活動のさらなる普及・推進を図る観点から、それらの先行研究の全体的な課題を論じる。

2. 参加動機に関する研究

現在、ボランティア活動への心理学的アプローチとしては、ボランティア活動が古くから根付いている欧米では、人々の参加動機(motivation)の解明が重要なテーマのひとつであった。研究者(e.g., CNAAN & GOLDBERG-GLEN 1991, HARRISON 1995, TRUDEAU & DEVLIN 1996, CLARY, SNYDER, RIDGE, COPELAND, STUKAS, HAUGEN, & MIENE 1998)は、それを解き明かそうとしてきた。例え

ば、CLARY ら (1998) は、ボランティア活動への参加動機を「価値」「理解」「社会」「キャリア」「防衛」「強化」という6種類に理論的に分類し、実証的研究を行った。この課題は、いわば、「人々は、なぜボランティア活動に参加したいと考えるのか」という参加動機の普遍的な疑問に迫ることである。そして、これまでの研究からボランティア活動への参加行動に影響を与える様々な要因があることが示されている。例えば、SMITH (1994) によれば、これまでの研究においては、参加決定要因として文脈要因（例えば、コミュニティの大小など）、社会的背景要因（例えば、学歴など）、パーソナリティ要因（例えば、内的統制者かなど）、状況的要因（例えば、参加を頼まれたかなど）、態度要因（例えば、その組織が魅力的かなど）が検討されている。

ボランティア活動への参加動機自体については、様々な研究が欧米を中心にされているが、桜井 (2002) は、ボランティア活動への参加動機に関する動機構造をどのように捉えるかによって、次のように3つの研究群に分類した。第1の研究群は、例えばFLASHMAN, & QUICK (1985) などのボランティアの参加行動は「利他主義」(altruism)の表出した行動であるとする見方（利他的動機アプローチ）である。第2の研究群は、MURNIGHN, KIM, & METZGER (1993) などのボランティア活動への参加は利己的 (egoistic) な動機に基づいてされると考える見方（利己的動機アプローチ）である。第3の研究群は、STORY (1992), PUFFER (1990) などのボランティア活動への動機は複数 (multiple) の因子によって構成されていると考える見方（複数動機アプローチ）である。現在のところ複数の因子で構成されているとする「複数動機アプローチ」が主流の捉え方となっている(桜井 2002)。例えば、STORY (1992) は「利他動機」「利己的動機」の2因子、PUFFER (1990) は「規範的動機」「合理的動機」「愛着的動機」の3因子を示した。

我が国でも近年になって、ボランティア活動への参加動機に関する研究は、この複数因子を仮定した捉え方に基づいて行われる調査研究が主な流れとなってきた。例えば、西浦 (1999) では、「自己志向」「交流志向」「社会志向」の3因子、青山ほか (2000) では、「自発的動機」「共感的動機」「報酬期待動機」「社会的規範動機」「技術・知識の活用動機」の5因子、谷田 (2001) では、「サークル活動の一環」「利他心」「福祉ボランティア活動の大切さを実感」「民主的社会的理想の実現」「不充足感」「周囲の人々の期待」の6因子、松岡・小笠原 (2002) では、「社交」「学習・経験」「個人的興味」

「キャリア」「自己陶冶」「組織的義務」「社会的義務」「スポーツ」の8因子が明らかにされているなど、ボランティア活動への参加動機については様々な捉え方がある。

しかしながら、最も重要なテーマのボランティア活動への参加動機の解明では、ボランティア活動の経験者を対象とするものが主体であり、ボランティア活動への参加志向はあるが、「参加機会がない」などのボランティアの予備軍を含めた参加志向動機の構成要因に関してはあまり検討されてこなかった。逆に、参加機会はあるが、「参加意志がない」などのボランティア不参加者の研究はほとんどなく、不参加志向動機の構成要因に関しては解明されてこなかった。ボランティア活動の未経験者を含めた参加志望者への働き掛けなくしては、ボランティア活動の一層の広がりは考えられないことから、活動経験者に留まらず経験はないが、機会等があれば、活動に参加したいと考えている参加志望者を含めて、ボランティア活動への参加動機の解明が必要である。一方、参加経験者のうち参加非志望者が何故に参加したいと思わなくなったのか、参加未経験者のうち参加非志望者が何故に参加したいと思わないのかが解らなければ、ボランティア活動の普及・推進の具体的方策は考えられないため、ボランティア活動に対する不参加動機の解明も必要である。ボランティア活動への参加行動の促進や参加行動の定着に繋がる知見を得るには、ボランティア活動の経験者に加え未経験者を含めた検討が必要である。

3. イメージに関する研究

ボランティア活動を対象とした研究では、ボランティア活動への参加動機に関する研究の他に、イメージから人々がボランティア活動をどのように捉えているのかが研究されてきた。行動とイメージの関係について、BOULDING, K. E. (1956) は、「イメージが変われば、それに応じた行動をするようになる」として、人間の行動はイメージに依存し「ある人の過去経験の総合的結果としてイメージができあがる」、そして、「イメージの一部はイメージ自身の歴史である」と述べている。小澤(2001)も、「ある対象や人物に一旦付着したイメージは、われわれの行動選択の場面で、大きな影響力をもつことが明らかにされている(スキーマ理論)」、また、「自己に対するイメージは、われわれの生き方を規定しているとさえ言うことができる」として、人々の「ボランテ

「ボランティア」に対するイメージを把握することが肝要であるとした。したがって、ボランティア活動イメージに焦点を当てることは、若者のボランティア活動の推進を考えるうえで意義があると言える。また、学校教育におけるボランティア活動には、ボランティア活動への理解を促したり、高齢者や障害者に対する理解を深めたりする効果も期待され、ボランティア活動の教育的効果を考えるうえでも意義があると言える（岡鼻 2013）。

ボランティア（活動）に対するイメージに関する調査研究では、例えば、新出ほか（1998）は、長野オリンピックにおけるボランティアを対象とする調査から、ボランティア活動に対するイメージを捉えることで、特定のボランティア活動に対する認識や態度などの特徴を見出せることを明らかにした。青少年のボランティアに関するイメージの研究では、ボランティアという言葉と具体的な行為を結びつけて、ボランティアに対する認識を実証的・定量的に調査した荒川ほか（2008）による医療福祉を学ぶ大学生を対象とした研究があり、「ボランティア」に対するイメージには「ボランティア活動（あるいは活動者）に求められる事柄」が含まれること、そして「ボランティア」に対する認識は多様で曖昧であることを明らかにした。また、伊藤（2002）は、短大生・大学生等を対象として、ボランティアについて抱くイメージを中心に、彼らの経験や環境、自己評価等の関連を探究した。この研究では、ボランティアイメージが楽しさや面白さなどに快楽化する一方、多様な構造を持っている可能性があること、学校教育の中でのボランティア経験と学校教育後のボランティア活動の現状やボランティアイメージとの関係は見出すことができなかったことなどが示された。大東ほか（2004）は、大学生を対象としたボランティアイメージの調査から、活動当事者側とはかなり食い違っている点があることを示した。大学生は、「自己実現」イメージを抱いているが、活動当事者側は、無償・自発などの「従来型」イメージを大学生が抱いていると捉えがちであり、その食い違いが両者の軋轢を生んでいるのではないかと指摘した。

しかしながら、多くの先行研究では、調査対象者のボランティア活動に関するイメージを把握することが主眼となっており、ボランティア研究の最も重要なテーマとしての参加動機・不参加動機との関連性が明確となっていない。例えば、ボランティア活動に関するイメージと参加意識等との関連を検討した先行研究（柴崎 1997、伊藤 2002、倉掛・大谷 2004）でも、ボランティア活動に関して参加意識として参加志望か不参加志望か、あるいは積極的か消極的か

という二律的検討にとどまっており、ボランティア活動イメージがボランティア活動への参加行動や不参加行動を引き起こす心理的要因としての参加志向動機と不参加志向動機の各構成要因にどのように影響を与えるのかということについては、構造的な検討がされてこなかった。そして、若者のボランティア活動への参加行動の促進や参加行動の定着に繋がる知見を得るには、行動とイメージとの関連性の重要性を考えると、ボランティア活動に対するイメージの実証的分析とともに、ボランティア活動への参加志向はあるが、「参加機会がない」などのボランティア予備軍を含めた参加志向動機、逆に、参加機会はあるが、「参加意志がない」などのボランティア不参加者を含めた不参加志向動機との関連などの包括的な検討も必要である。また、質問項目の選定手続きが曖昧であったり、既存調査の項目を用いて実施されるなど、最近の若者が抱くボランティア活動イメージと乖離している可能性がある。特に、2011年の東日本大震災以降は、若者が抱くボランティア活動イメージも大きく変容している可能性がある。

4. 参加成果に関する研究

ボランティア活動の援助成果に関する研究は、高木（1997）が提起した援助行動の生起過程に関するモデルにおいて導入された概念がその端緒となっている。従来の援助行動研究が主として着目してきたのは、援助提供によって被援助の問題がどれだけ解決したかという被援助者への効果・影響であった（妹尾 2001）。しかし、ボランティア元年と呼ばれた1995年以降、例えば、ボランティア活動は、従来あった「他者のため」という一義的な目的のみならず、自己啓発や自己実現の場として、人々に認識されている（妹尾 2001）ことから、高木（1998）は、援助を提供することが提供後の援助者に及ぼす肯定的効果に注目し、これを「援助成果」と概念化して（西川 2000）、援助の被援助者への効果である「援助効果」とを区別して用いた（妹尾 2001）。そして、援助行動の一形態としてのボランティア活動の援助成果に関する研究では、例えば、高木・玉木（1996）は、阪神・淡路大震災時に活躍した若者ボランティアが、活動を通じて認識変化や自己変革をもたらされたと報告している。妹尾・高木（2003）、妹尾（2008）は、中高年者と若者の調査からボランティア活動の経験を通じて援助成果を得ており、援助成果を得るほどボランティア活動継続が

動機づけられることを示した。他には、環境ボランティアの研究（安藤ほか 1999）、介護ボランティアの研究（青山ほか 2000）などで継続要因の援助成果にも関心が向けられている。これらの研究では、ボランティアがボランティア活動を通じて何らかのポジティブな成果を得ていることを示した（妹尾 2005）。さらに、妹尾（2005）は、援助行動を経験した後の援助者自身に及ぼす心理的効果・影響に着目し、その生起メカニズムとそこにおける経験が果たす機能を明らかにすることを通じて、援助行動に関するモデルを示した。このモデルの援助行動は、ボランティア活動を対象とした一連の研究から導かれたものであることから、ボランティア行動の生起過程モデルともいえる。このモデルは援助者の状況要因や参加動機の規定因などを統合したモデルには至っていないが、従来、社会心理学で扱われてきた緊急場面等など一過性の援助行動の生起過程モデルではなく、継続的・組織的な援助行動としてボランティア行動の生起過程を扱ったという点では、ボランティア行動の生起過程モデルの先駆けとなるものである。

このように援助成果の研究はまだ少なく、活動経験を通じて得られた実感としての援助成果に関する調査研究が主であり、ボランティア行動へ向かう前の参加経験から得たい成果への期待については、検討されていない。また、ボランティア活動イメージに関する研究と同様にボランティア活動の経験者を対象とするものが主体であり、ボランティア活動への参加志向はあるが、「参加機会がない」などのボランティアの予備軍を含めたボランティア活動の未経験者がほとんど検討対象となっていない。そして、ボランティア活動経験を通じて得たい援助成果の期待と参加行動・不参加行動を引き起こす参加志向動機と不参加志向動機の各構成要因への影響については、構造的な検討がされてこなかった。そして、若者が分析対象にも拘わらず、妹尾・高木（2003）が中高年を対象とした調査データから作成された援助成果の測定尺度によって若者を対象に調査した研究が散見され、若者が抱く援助成果の構成要因を的確に捉えていない可能性がある。

しかしながら、若者のボランティア活動への参加行動の促進や参加行動の定着に繋がる知見を得るには、ボランティア活動を動機づける要因として、そもそも若者はボランティア活動への参加経験から何を得たいと考えているのかという参加成果の期待を実証的に分析することが必要である。そして、ボランティア活動への参加志向はあるが、「参加機会がない」などのボランティア予備

軍を含めた参加志向動機，逆に，参加機会はあるが，「参加意志がない」などのボランティア不参加者を含めた不参加志向動機との関連などの包括的な検討も必要である．妹尾・高木（2003）が援助後の援助成果は，その後の援助行動を動機づける心理的な中核要因となることを示したが，そもそもボランティア行動に向かう前に抱く参加成果の期待を検討することは，ボランティア行動の生起・継続メカニズムに迫る有効な視座であり，ボランティア活動の一層の推進にとって必要である．

5. 先行研究の課題

ボランティア行動に関する心理学的研究に関して，ボランティア活動推進の観点から今後検討すべき課題を整理・列挙すると，下記の課題があると考えられる．

（1）ボランティア活動の未経験者を含めてボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因として，ボランティア活動への参加志向動機・不参加志向動機およびボランティア活動イメージとボランティア活動の参加成果志向に関する構成要因を解明することが必要であること．

（2）ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する中核的な要因としての参加志向動機・不参加志向動機と他の要因との関連性を構造的に検討する必要があること．

（3）特定分野のボランティア活動に対する調査研究ではなく，また，災害救済など非日常的なボランティア活動に対する調査研究に限定せず，ボランティア活動の全般領域に亘る普遍的な検討が必要であること．そして，一過性の援助行動とボランティア行動を区別した検討が必要であること．

（4）自分自身のボランティア経験の有無とは別に，取り巻く環境の差，特に，身近なボランティア経験者の有無によって，参加志向動機・不参加志向動機への影響の差異がある可能性があるため，環境要因としての身近なボランティア

経験者の有無と参加志向動機・不参加志向動機への影響を検証しておく必要があること。

(5) 日常の対人行動としての援助行動は人と人との相互関係にあることから、日常の一過的な援助行動・被援助行動の経験が、相互要因として継続的な援助行動のボランティア行動へ影響を及ぼす可能性があるため、日常の援助行動・被援助行動の経験とボランティア行動への参加志向動機・不参加志向動機への影響を検証しておく必要があること。

(6) 人は何らかの満たされない欲求をもっているときに、その欲求を満たそうと探究行動をとる(妻鹿 2006)と考えられるため、若者に潜在する心理的欲求とボランティア活動への参加志向動機・不参加志向動機および参加成果志向との関係性を検証しておく必要があること。

(7) ボランティア行動を単発的な行動に終わらせず、好循環行動や定着行動となるには、ボランティア活動の参加経験の主観的な質(参加の満足度等)が鍵になると考えられるため、参加経験の主観的な質が今後の参加行動に及ぼす影響を検証しておく必要があること。

第3章 本論文の目的と構成

第1節 本論文の目的と用語の整理

1. 本論文の目的

我が国のボランティア活動の現状と問題点を踏まえ先行研究等から見えた課題に基づいて、本論文は、大学生を対象として青年期におけるボランティア活動全般への参加行動や不参加行動を引き起こす内的メカニズムを明らかにすることによって、今後の若者のボランティア活動の推進や教育過程でのボランティア教育のあり方に繋がる知見を得ることを目的とした。

具体的には、大学生のボランティア活動の経験者および未経験者を対象として、ボランティア活動全般に関して、以下の4点を目的として検討・検証を探索的に進め、ボランティア活動の推進の観点から統合理論モデルとして、ボランティア行動への生起・促進モデルの提案を試みることを本論文の最終目標とする。

第1の目的は、大学生のボランティア活動への参加行動や不参加行動を規定する中核の要因として、ボランティア活動の参加志向動機および不参加志向動機の構成要因を明らかにすることである。

第2の目的は、大学生のボランティア活動への参加行動・不参加行動に対して、密接な影響を及ぼす要因がボランティア活動に対するイメージと参加成果の期待という参加成果志向であることを明らかにすることである。具体的には、新たにボランティア活動イメージおよび参加成果志向の各々の構成要因を明らかにしたうえで、ボランティア活動イメージおよび参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機にどのように影響を与えるのかを構造的に検討する。

第3の目的は、大学生のボランティア活動への参加行動・不参加行動に対して、環境要因および相互要因の影響を明らかにすることである。具体的には、参加行動・不参加行動に及ぼす環境要因として、特に身近なボランティア活動経験者に着目して、その有無によって参加志向動機・不参加志向動機が異なる

のか否かを検討する。また、参加行動・不参加行動に影響を及ぼす相互要因として、日常の一過的な援助行動・被援助行動の経験が、ボランティア行動の参加志向動機・不参加志向動機にどのように影響を与えるのかを検討する。

第4の目的は、大学生の満たされない欲求としての心理的要求およびボランティア活動の参加経験の質の観点から、ボランティア行動に向かうメカニズムを明らかにすることである。具体的には、若者に内在する心理的欲求とボランティア活動への参加志向動機・不参加志向動機および参加成果志向との関係性を構造的に検討する。そして、ボランティア活動の経験の主観的な質として、ボランティア活動経験の充足度・満足度等に着眼して、今後のボランティア活動への参加行動に及ぼす影響を検討する。

2. 本論文の用語整理

ボランティアの語源と定着

ボランティア (Volunteer) という言葉は、学術用の専門用語として考案された造語ではない (海野 2014)。その語源は、英語の Will に相当するラテン語の (Volo : 意志する) から派生した「ウォルタンス (Voluntas : 自由意志)」に由来する (海野 2014)。そして、人名称の -er をつけてできた言葉がボランティア (volunteer) である (大嶺 2000)。

ボランティアの概念と言葉が日本に入ってきたのは、基本的には戦後のことと考えられるが、一般的に知られるようになったのは 1960 年代以降と言えよう (森井 1994)。従来、日本では、ボランティア活動に該当するような活動をしていた人は、「篤志家」とよばれていたが、近年、ボランティア活動は、より一般的な活動になってきた結果、自発的に活動をする人という意の「ボランティア」が好まれて使われるようになった。そして、このような「他者への援助活動を自発的にする人」に相当することばが日本語にはないために、また、その活動の多様性から、外来語の「ボランティア」が定着しているのである (大嶺 2000)。

ボランティア活動の特質

ボランティア活動は、ことばではなかなか説明しにくい行為であるが（柴田 2010）、様々な学問領域でボランティア活動とは何かを論じる際には、ボランティア活動が持つ特質から説明されることが多い。従来、例えば池田（2006）は、ボランティア活動とは「主体性・社会性・無償性・先駆性に基づく活動である」と説明した。また、興梠（2003）は、ボランティア活動の理念として、「主体性・非営利性・公共性・先駆性」をあげている。そして、厚生労働省（2007）は、「ボランティアについて明確な定義を行うことは難しいが、一般的には「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」を指してボランティア活動と言われており、活動の性格として、「自主性（主体性）」、「社会性（連帯性）」、「無償性（無給性）」等があげられる」としている。

これらを要約すると、柴田（2010）が述べているように、ボランティア活動とは、「自分から進んで」（自発性・主体性などの「動機」により）、「お金のためではなく相手や世の中のために」（無給性・無償性・非営利性、公益性・公共性・社会性・連帯性などの「目的」をもって）、「まだ国や地方自治体に取り組んでいないことに挑戦する」（先駆性・開拓性・創造性などの「役割」を果たす）行為と、一般的には捉えられてきた。

しかしながら、1970年代後半から学校教育の中にボランティア活動が盛んに導入されるになり、更に近年では、教育再生などの観点から、ボランティア活動を若年層に啓蒙・普及させようとする動きが活発になり（水野ほか 2007）、また、現在では、実費や交通費をもらい、さらにはそれ以上に金銭を得るボランティア活動を「有償ボランティア」とよんだりする（大嶺 2000）など、実際のボランティア活動においては、概念が指し示す範囲についてのグレーゾーンが広がっており、ボランティアを特徴づけるのに不十分となってきた（桜井 2003）ことから、ボランティア活動については、統一された定義はない（新崎 2005）。

ボランティア活動の定義

学齢期におけるボランティア活動は学校教育と切り離して考えることができない（田中 2011）ことから、大学生のボランティア活動に関する研究を進めるには、教育課程での授業等の一環としてのボランティア活動も含めてボランティア活動を幅広く捉える必要があると考える。

したがって、本論文では、本論文の目的に則して、中央教育審議会（2002）の答申と同じく「個人が能力や経験などを生かし、個人や団体が支え合う、新たな公共に寄与する活動、具体的には、自分の時間を提供し、対価を目的とせず、自分を含め他人や地域、社会のために役立つ活動」を可能な限り幅広くとらえ、小・中・高等学校と大学など教育課程での授業等の一環としてのボランティア活動も含めて、こうした活動全体を幅広く「ボランティア活動」とする。

参加成果と参加成果志向の定義

妹尾（2001）は、援助者が援助行動後に得る満足感や喜びといった肯定的感情や自己満足観を強調して、「援助成果」を「向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬」と定義した。しかしながら、向社会的行動の一環としてのボランティア活動は障害のある人への支援・お年寄りへの支援などの直接的な対人活動に限らず、自然や環境を守る活動などの非対人活動を含む様々な活動領域にも及び、また、ボランティア活動は、一過的な援助行動ではなく継続的な援助行動であることから、ボランティア活動から得る「援助成果」の語義を明確にするため、本論文では、「ボランティア活動を通じて、ボランティア自身が認知する心理・社会的報酬」をボランティア活動の「参加成果」と呼び、ボランティア活動経験から得たい参加成果の期待を「参加成果志向」とする。

ボランティア学習・ボランティア教育の定義

ボランティア学習の定義には、一般のボランティア活動で起こる学びとして捉えたもの（無意識的なものを含む）と、ボランティア活動の学習性に着目して意図的な学びとして構成したものがあある（長沼 2014）。本論文では、教育過程でのボランティア教育のあり方を探る意図もあることから、その語義を明確にするため、後者の意味でボランティア学習を用いる。具体的には、長沼（2010）の定義を援用して「ボランティア活動の学習性に着目して社会体験学習として構成したもの」とする。また、ボランティア教育とは、本論文では、長沼豊が「新しいボランティア学習の創造」（2008）において概念整理した用法を援用して「ボランティア学習を推進するためのシステムの総称」とする。

第2節 本論文の構成

本論文は、序論、本論、総括の3部構成から成り立つ。序論の第1章では、本論文の背景として、ボランティア活動の現代的役割・意義を整理すると共に、我が国のボランティア活動の状況および若い世代のボランティア活動の現状について概観する。第2章では、本論文の主な研究領域である心理学的研究を概観し、その課題点を論じる。第3章では、本論文の目的と構成を提示する。

続く本論では、大学生のボランティア活動への参加行動および不参加行動を引き起こす内的メカニズムを明らかにするために実施した8つの実証的研究の検討結果を報告する。第4章では、まず、大学生のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する中核の要因として参加志向動機および不参加志向動機の構成要因を検討する(研究1)。続いて、ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する先行要因として大学生が抱くボランティア活動に対するイメージの構成要因を検討し、参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を検討する(研究2)。加えて、先行要因として参加成果がボランティア参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を検討する(研究3)。さらに、研究3から明らかとなった課題に基づいて、参加成果の期待を参加成果志向として概念化し、大学生の抱く参加成果志向の構成要因を明らかにしたうえで、参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を改めて検討する(研究4)。第5章では、大学生を取り巻く環境要因のひとつとして身近な経験者の有無が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を検討する(研究5)。さらに、相互要因として日常の一過的な援助行動・被援助行動経験が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を検討する(研究6)。第6章では、大学生の抱く心理的欲求と参加志向動機・不参加志向動機ならびに参加成果志向との関係を検討する(研究7)。そして、ボランティア活動の参加経験の主観的な質として、参加経験の満足度等が、今後のボランティア活動への参加行動に及ぼす影響を検討する(研究8)。

最後の総括として、第7章では、本論の実証的検討を通じて明らかとなった研究結果の概要をまとめ、一連の研究の統合理論の枠組みとして、若者のボラ

ンティア行動への生起・促進モデルを提案する。そして、本論文の意義をまとめる。最後に、今後の課題と展望を示す。

[本論文の概念図]

本論文の分析枠組みとして図示したものが、Figure3-1 である。この概念図では、外側の枠内には社会環境が配置され、内側の枠内にはボランティア行動を規定する要因が表現されている。本論文の分析枠組みとして、この概念図の点線で示された関係性を8つの研究によって実証していく。

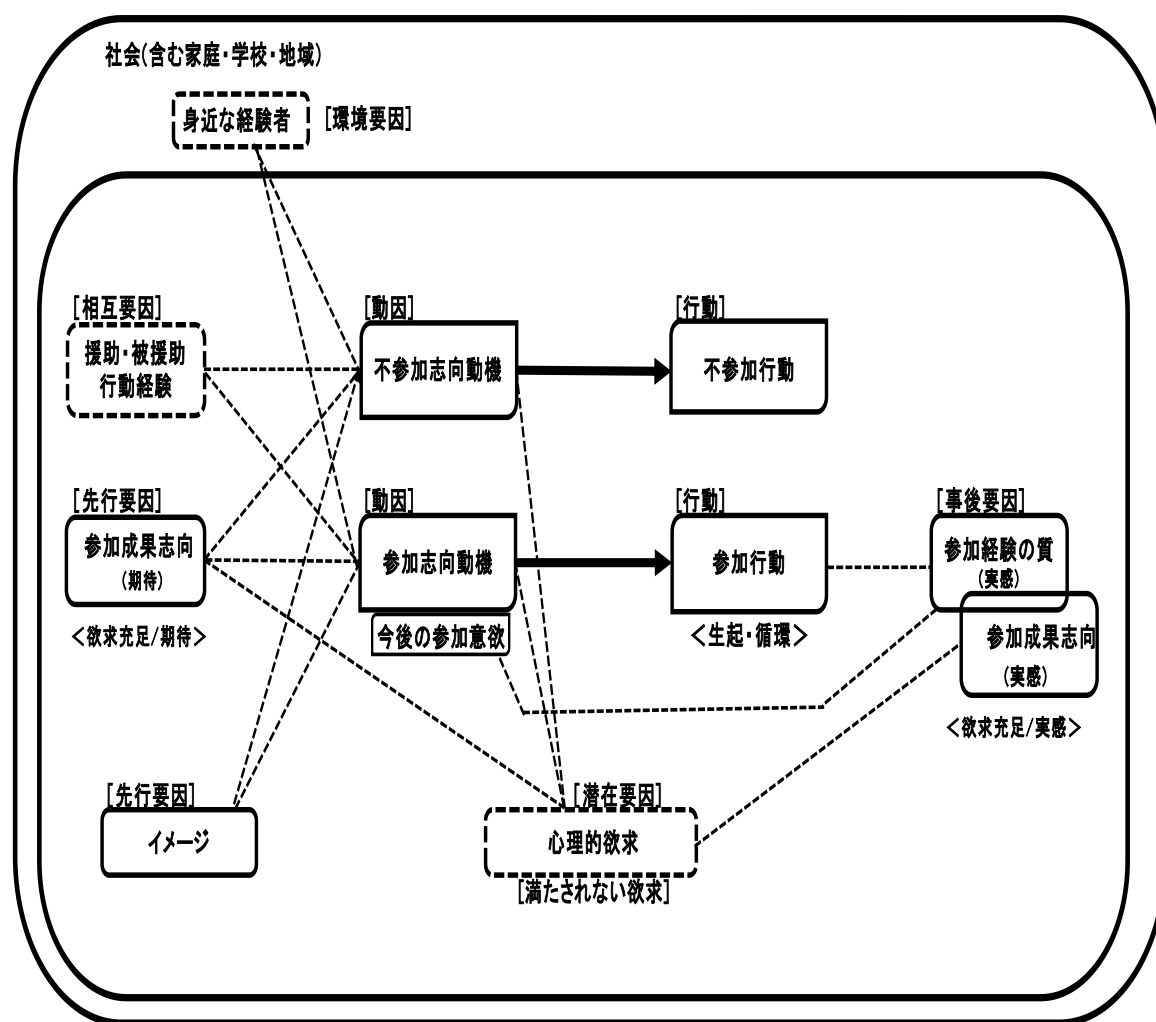


Figure 3-1 研究の概念図

[本論文の構成]

本論文の構成を以下のとおり提示する (Figure3-2) .

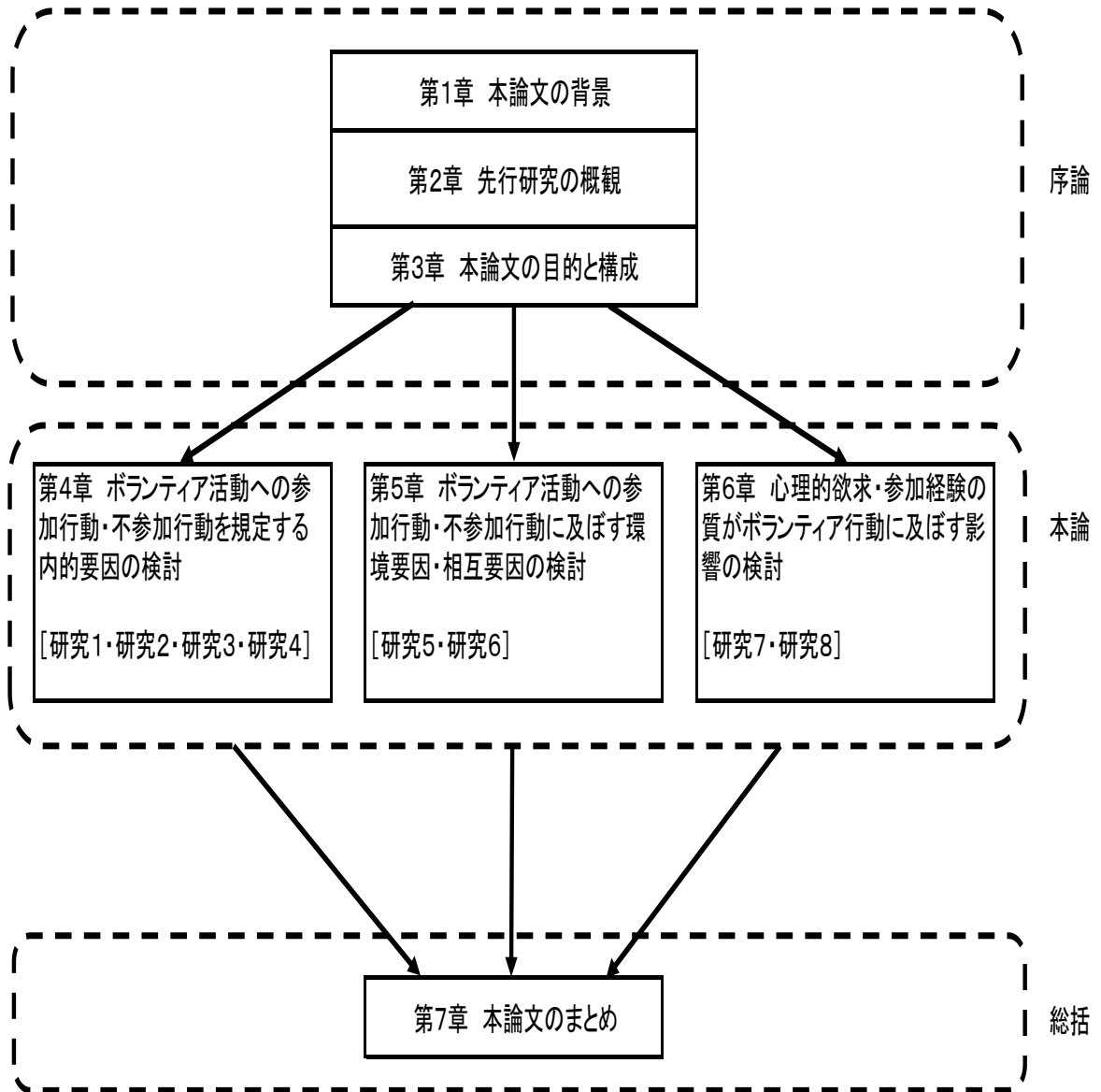


Figure 3-2 本論文の構成

第2部 本 論

第4章 ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する内的要因の検討

第1節 参加志向動機・不参加志向動機の構成要因 [研究1]

1. 目的

本研究では、青年期のボランティア活動への参加志向動機および不参加志向動機の構成要因を明らかにし、若者のボランティア活動推進のための知見を得ることを目的とした。

2. 予備調査

2.1. 方法

調査協力者：本研究の予備調査における協力者は、首都圏の4年制大学に通う大学生171名（男子82名，女子89名）であった。

調査方法：2010年6月に、青年期におけるボランティア活動への参加志向動機および不参加志向動機を測定するための項目を作成することを目的に予備調査を実施した。青年期のボランティア活動への「参加志向動機」および「不参加志向動機」の記述を収集するため、調査協力者に、「ボランティア活動の経験および今後の活動希望」について、①「ボランティア活動の経験があり、今後も経験したい」②「ボランティア活動経験はあるが、今後は活動に参加する意志はない」③「ボランティア活動の経験はないが、今後は活動に参加したい」④「ボランティア活動の経験はなく、今後も活動に参加する意志はない」のいずれかを選択し、その回答に応じて次のとおり、ボランティア活動への参加動機、ボランティア活動への不参加動機を自由に記述してもらった。手続きは、無記名・個別記入形式の質問紙を講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙には、上記①と③のいずれかを選択した協力者には、「ボランティア活動への参加動機（参加した理由又は参加したい理由）」を自由に記述してもらった。また、上記②と④のいずれかを選択した協力者には、「ボランティア活動へ参加しなかった理由又は今後も参加したくない理由（含む活動をやめた

理由)」を自由に記述してもらった。

2.2. 結果

予備調査で得られた記述を、心理学系大学教員と心理学専攻の大学生の3名で協議し、その内容の類似度によって、以下のようにそれぞれ分類・整理のうえ、質問項目を作成した。具体的には、「ボランティア活動への参加志向動機（参加した理由又は参加したい理由）」として、調査協力者のうち111名から196個の有効な記述回答を得られた。それらの記述を整理した結果、次の5グループに大別された。(a) 自己志向 (b) 活動志向 (c) 他者同調志向 (d) 他者志向 (e) 社会同調志向であった。次に、「ボランティア活動へ不参加志向動機（参加しなかった理由又は今後も参加したくない理由・活動をやめた理由）」として、調査協力者のうち37名から83個の有効な記述回答を得られた。それらの記述を整理した結果、次の2グループに大別された。(a) 自己原因 (b) 環境原因であった。その後、これらの記述の中から類似度・明解度からさらに記述を選定のうえ、それらを元に筆者が質問の表現内容や簡明さを考慮に入れて加筆・修正をおこない、「参加志向動機」の質問66項目および「不参加志向動機」の質問24項目を作成した。

3. 本調査

3.1. 方法

調査協力者：本調査における協力者は、首都圏の2つの4年制大学に通う大学生174名（男子76名，女子98名）であった。平均年齢は19.93歳（ $SD=1.31$ ）であった。

手続き：2010年7月から10月に、予備調査に基づき策定された各項目からなる質問紙を講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の内容：(1) 活動経験および今後の活動意志：「ボランティア活動の経験および今後の活動」に関して、①「ボランティア活動の経験があり、今後も経験したい」②「ボランティア活動の経験はあるが、今後は活動に参加する意志はない」③「ボランティア活動の経験はないが、今後は活動に参加したい」④「ボランティア活動の経験はなく、今後も活動に参加する意志はない」のいずれかを回答してもらった。この結果、調査協力者のうち参加志向動機へ

の回答者は125名、不参加志向動機への回答者は64名であった。なお、「ボランティア活動の経験はあるが、今後は活動に参加する意志はない」と回答した人には、参加志向動機と不参加志向動機の両方に回答してもらった（22名）。

（2）参加志向動機：予備調査によって抽出された「参加志向動機」の合計66項目を質問項目とした。そして、上記（1）で①②③と回答した人に、「良く当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法で回答してもらった。

（3）不参加志向動機：予備調査によって抽出された「不参加志向動機」の合計24を質問項目とした。そして、上記（1）で②④と回答した人に、「良く当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法で回答してもらった。

3.2. 結果

3.2.1. 参加志向動機の構成要因

因子分析の結果：参加志向動機尺度66項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った（Table 4-1）。その結果、因子負荷量の絶対値が.40以上を基準に、最終的に5因子40項目を採用した。

第Ⅰ因子は、「人のために動くということを一度経験してみたいから」「自分とは全く違う境遇の人に接し、その生活がどのようなものかを知りたいから」など、新たな体験志向の感情を含む項目が高い負荷量を示したので、「体験志向」因子と命名した（14項目）。第Ⅱ因子は、「自分の住む地域がよりよい発展をするための手助けができることが嬉しいから」「恩返しの意味をこめて参加したいから」など、社会的貢献志向などの感情を含む項目が高い負荷量を示したので、「社会貢献志向」因子と命名した（10項目）。第Ⅲ因子は、「ボランティア活動内容が面白そうだから」「ボランティアの被対象者(子どもなど)が好きだから」など、活動内容や活動被対象者への好感・興味などの感情を含む項目が高い負荷量を示したので、「興味対象志向」因子と命名した（8項目）。第Ⅳ因子は、「友人に誘われたから」「成り行きから」など、他者との同調に向かう感情を含む項目が高い負荷量を示したので、「他者同調志向」因子と命名した（5項目）。第Ⅴ因子は、「学校で勧められたから」「学校の授業の一環だから」など、社会的枠組みからの外発的な要因に起因する感情を含む項目が高い負荷量を示したので、「社会従属志向」因子と命名した（3項目）。

内的整合性を検討するため、各下位尺度のCronbachの α 係数を算出したと

ころ、「体験志向」で $\alpha=.95$ ，「社会貢献志向」で $\alpha=.90$ ，「興味対象志向」で $\alpha=.89$ ，「他者同調志向」で $\alpha=.78$ ，「社会従属志向」で $\alpha=.78$ の値が得られた。このことから，信頼性は十分であることが示された。

Table 4-1 参加志向動機の因子分析結果

	I	II	III	IV	V
I 体験志向 ($\alpha=.95$)					
39. 自ら行動する力をつけたいから	.81	-.10	.12	.01	.00
61. 人のために動くということを一度経験してみたいから	.80	.07	-.03	-.07	-.05
54. 自分とは全くちがう境遇の人に接し、その生活がどのようなものか知りたいから	.76	-.22	.14	-.06	-.11
49. ボランティア活動の具体的な活動内容のようなことをしたことがないので、どういものか知りたいから	.76	-.05	-.10	.01	.11
45. 助け合いというのは人には必要だと思うから	.76	.30	-.16	-.02	-.02
64. どういった活動目的でどのような人々が関わっているのかを見てみたいから	.75	.05	-.02	.03	.02
48. 何か新しい発見がありそうだから	.70	-.18	.18	.08	-.28
25. 自分とは違う環境に育った人と接することは今後のための勉強になると思うから	.68	-.13	.25	-.02	-.07
21. 自分の考えが変わるかもしれないから	.64	.02	.18	-.10	.15
38. 苦しんでいる人のためになりたいから	.62	.24	-.16	-.02	-.01
10. 金銭をとまなわない心的な見返りがあるから	.53	.11	.20	.04	.11
11. 協力の大切さを知ることができるから	.52	.37	.02	.04	.05
34. 活動後のすがすがしさを味わいたいから	.51	.28	.05	.05	.00
66. 人に感謝や喜んでもらえることがしたいから	.51	.30	.06	.07	-.14
II 社会貢献志向 ($\alpha=.90$)					
36. 自分の住む地域がよりよい発展をするための手助けができることが嬉しいから	.11	.75	-.03	.03	.02
1. 地域のために何かしたいと思ったから	.05	.68	.11	-.06	.09
29. 自分もボランティアを受けた経験があり、自分も同じ活動をやりたいから	-.26	.65	.12	.07	.00
7. 恩返しの意味をこめて参加したいから	.11	.65	.07	.01	.04
40. 街をきれいにしたいから	.21	.62	-.26	.01	.07
22. 近年、ボランティアに関する話題が取り上げられるようになり、その気運に乗じるため	.03	.57	.00	.02	.18
31. 少しは世の中や地域に貢献できればいいと思うから	.36	.56	-.15	.11	-.09
57. 地域の人との交流ができるから	.20	.54	.11	-.08	-.10
28. 友達と一緒にやれば面白そうだったから	-.10	.48	.11	.46	-.08
26. 自分の知識などを社会に還元したいから	.23	.46	.20	-.27	.22
III 興味対象志向 ($\alpha=.89$)					
16. 目指す職業に関係する被対象者（子ども・高齢者など）と関わってみたいから	.04	-.15	.77	-.02	.24
56. ボランティア活動の内容が面白そうだから	.04	.03	.70	.18	-.26
35. ボランティア活動の内容に興味があったから	.03	-.02	.69	.07	-.18
19. 将来の職業のため、経験したいから	.17	-.12	.66	-.06	.42
2. ボランティアの被対象者（子どもなど）が好きだから	-.10	.13	.66	.02	-.07
20. 自分の空いた時間を使って自分も楽しめるから	.18	.14	.53	-.01	.04
42. ボランティア活動の対象分野（環境・地域・福祉・医療など）に興味があるから	.29	.01	.49	-.07	.08
23. ボランティア活動の内容に魅力を感じるから	.10	.27	.49	-.04	-.17
IV 他者同調志向 ($\alpha=.78$)					
43. 友人に誘われたから	-.11	.07	-.02	.70	-.02
44. 成りゆきから	.31	-.21	-.33	.70	.23
24. 友達やみんなも参加するから	-.23	.13	.15	.64	.16
30. 周りにすすめられたから	-.06	.09	.10	.59	.21
65. ボランティアへ参加する機会があったから	.31	-.13	.15	.51	-.01
V 社会従属志向 ($\alpha=.78$)					
17. 学校で勧められたから	-.05	-.01	.21	.17	.82
5. 学校の授業の一環だから	.02	.08	-.06	.14	.69
3. 地域で決まっていたから	-.12	.38	-.13	.02	.43
因子間相関					
I	—	.61	.66	.06	-.16
II		—	.46	.33	.14
III			—	.03	-.17
IV				—	.20
V					—

男女の差：男女差の検討を行うために、参加志向動機の各下位尺度得点について t 検定を行った (Table4-2)。「体験志向」($t(74.45) = 2.34, p < .05$)と「社会貢献志向」($t(120) = 2.11, p < .05$)と「興味対象志向」($t(121) = 2.38, p < .05$)については、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示した。「他者同調志向」($t(121) = 0.38, n. s.$)と「社会従属志向」($t(123) = 0.02, n. s.$)については男女の得点差は有意ではなかった。

5つの下位尺度間の関連を見るため下位尺度間の相関係数を男女別に求めた (Table4-3)。その結果、「体験志向」は男性と女性共に「社会貢献志向」と「興味対象志向」とは有意な正の相関 ($r = .607 \sim .761, p < .01$)を示したが、「他者同調志向」と「社会従属志向」とは有意な相関は示さなかった。「社会貢献志向」は男性では「体験志向」と「興味対象志向」とは有意な正の相関 ($r = .608, p < .01$)を示したが、「他者同調志向」と「社会従属志向」とは有意な相関は示さなかった。一方、女性は全ての下位尺度と有意な正の相関 ($r = .352 \sim .607, p < .01$)を示した。「他者同調志向」は、男性は「社会従属志向」とは有意な正の相関 ($r = .384, p < .01$)を示したが、「他者同調志向」と「体験志向」・「社会貢献志向」・「興味対象志向」とは、いずれとも有意な相関は示さなかった。一方、女性では「他者同調志向」は「社会貢献志向」と「社会従属志向」とは有意な正の相関 ($r = .404 \sim .409, p < .01$)を示したが、「体験志向」・「興味対象志向」とは有意な相関を示さなかった。

Table 4-2 男女別の平均値とSDおよび t 検定の結果

	男性			女性			t 値
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	
体験志向	47	3.20	1.14	76	3.64	0.80	2.34 *
社会貢献志向	46	2.68	1.03	76	3.04	0.83	2.11 *
興味対象志向	47	3.15	1.04	76	3.55	0.83	2.38 *
他者同調志向	47	2.78	0.94	76	2.85	0.98	0.38
社会従属志向	49	2.61	1.25	76	2.61	1.15	0.02

* $p < .05$

Table 4-3 男女別の相関係数

	体験志向	社会貢献志向	興味対象志向	他者同調志向	社会従属志向
体験志向	—	.761 **	.753 **	.072	-.209
社会貢献志向	.607 **	—	.608 **	.262	.216
興味対象志向	.671 **	.469 **	—	.083	-.105
他者同調志向	.155	.404 **	.107	—	.384 **
社会従属志向	.097	.352 **	.013	.409 **	—

右上:男性 左下:女性 ** $p > .01$

参加経験・参加意志の差：ボランティア活動の参加経験・参加意志の違い，即ち，「参加経験あり・今後も参加意志あり」（以下「経験あり・志望群」），「参加経験あり・今後は参加意志なし」（以下「経験あり・非志望群」），「参加経験なし・今後は参加意志あり」（以下「経験なし・志望群」）の差を検討するため次のとおり分析を行った。「経験あり・志望群」には 66 名，「経験あり・非志望群」には 22 名，「経験なし・志望群」には 41 名の調査対象者が含まれていた。

3つの参加経験・参加意志群を独立変数，参加志向動機の下位尺度の5因子「体験志向」「社会貢献志向」「興味対象志向」「他者同調志向」「社会従属志向」を従属変数とした一要因の分散分析を行った（Table4-4）。その結果，「体験志向」「社会貢献志向」「興味対象志向」「他者同調志向」「社会従属志向」いずれも有意な群間差がみられた（体験志向： $F(2, 120) = 10.92$, $p < .001$ ，社会貢献志向： $F(2, 119) = 8.11$, $p < .01$ ，興味対象志向： $F(2, 120) = 20.55$, $p < .001$ ，他者同調志向： $F(2, 120) = 5.82$, $p < .01$ ，社会従属志向： $F(2, 122) = 3.93$, $p < .05$ ）。

次に Tukey の HSD 法 ($p < .05$ 水準) による多重比較を行ったところ，次のとおり有意な得点差が見られた（Figure4-1～4-5）。「体験志向」・「社会貢献志向」・「興味対象志向」では，「志望群」が「非志望群」よりも有意に高い得点を示した。「他者同調志向」では，「経験あり群」が「経験なし群」よりも有意に高い得点を示した。「社会従属志向」では，「経験あり・志望群」が「経験なし・志望群」よりも有意に高い得点を示した。

Table 4-4 経験・志望有無別の参加志向動機に対する一要因分散分析の結果

	経験あり 志望群 (n=65)	経験あり 非志望群 (n=20)	経験なし 志望群 (n=38)	F値
体験志向	3.55 (0.93)	2.64 (1.11)	3.77 (0.68)	10.92 ^{***} 経験あり・志望>経験あり・非志望 ^{***} 経験なし・志望>経験あり・非志望 ^{***}
社会貢献志向	2.98 (0.93)	2.21 (0.93)	3.16 (0.72)	8.11 ^{**} 経験あり・志望>経験あり・非志望 ^{**} 経験なし・志望>経験あり・非志望 ^{***}
興味対象志向	3.61 (0.86)	2.33 (0.93)	3.61 (0.64)	20.55 ^{***} 経験あり・志望>経験あり・非志望 ^{***} 経験なし・志望>経験あり・非志望 ^{***}
他者同調志向	3.00 (0.93)	3.04 (1.07)	2.39 (0.85)	5.82 ^{**} 経験あり・志望>経験なし・志望 ^{**} 経験あり・非志望>経験なし・志望 [*]
社会従属志向	2.77 (1.33)	2.92 (1.22)	2.19 (0.74)	3.93 [*] 経験あり・志望>経験なし・志望 [*]

カッコ内は標準偏差

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

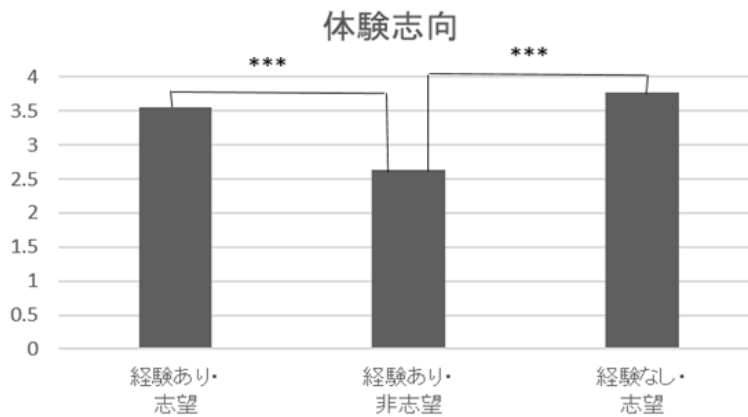


Figure4-1 参加経験・参加意志の差

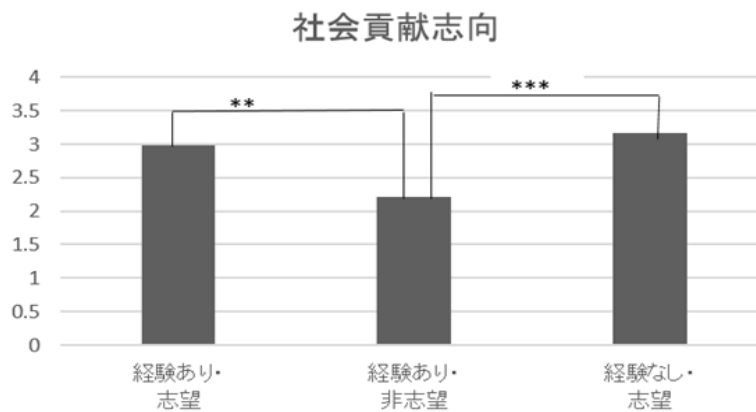


Figure4-2 参加経験・参加意志の差

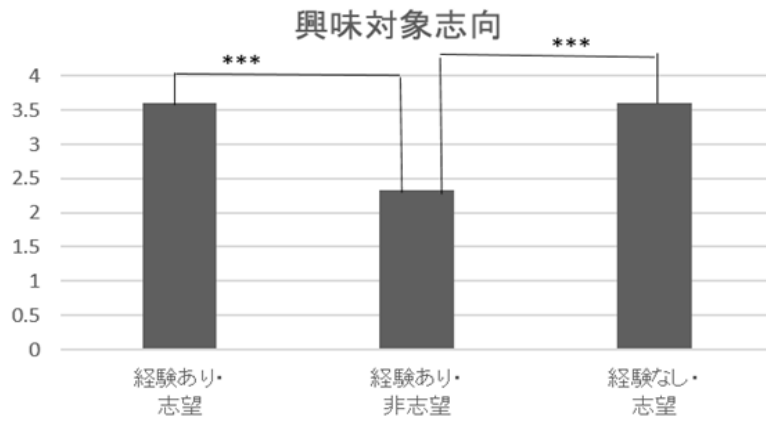


Figure4-3 参加経験・参加意志の差

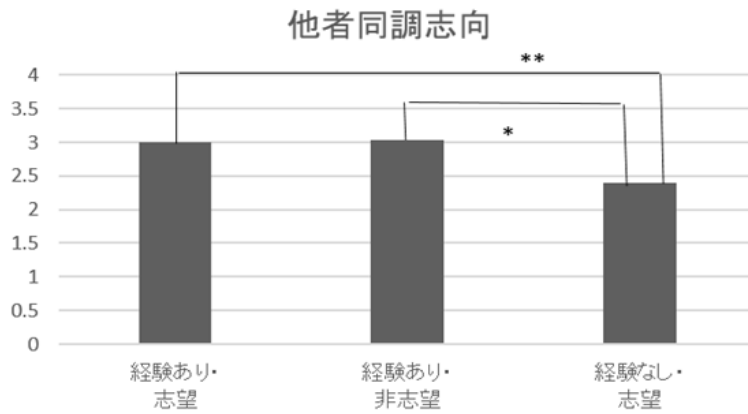


Figure4-4 参加経験・参加意志の差

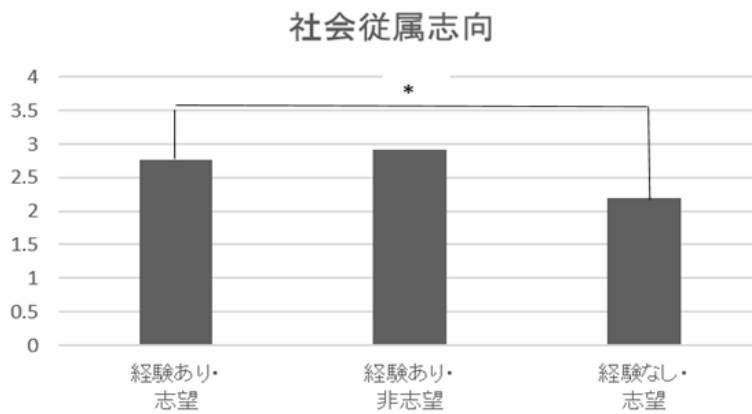


Figure4-5 参加経験・参加意志の差

3.2.2. 不参加志向動機の構成要因

因子分析の結果：不参加志向動機尺度 24 項目に対して主因子法による因子分析・Promax 回転を行った (Table4-5) . その結果, 因子負荷量の絶対値が.40 以上を基準に, 最終的に 3 因子 14 項目を採用した.

第 I 因子は, 「自分の利益がないから」「報酬のない労働をするための暇はないから」など, 利己を優先する感情を含む項目が高い負荷量を示したので, 「利己優先志向」因子と命名した (8 項目) . 第 II 因子は, 「偽善的だから」「ただの自己満足に感じるから」など, ボランティア活動自体を否定的に捉える感情の項目が高い負荷量を示したので, 「活動否定」因子と命名した (3 項目) . 第 III 因子は, 「どこでどんな活動をしているか知らないから」「ボランティア活動を上手く見つけられないから」など, 自らの力では情報を得ることが出来ていないことを要因とする項目が高い負荷量を示したので, 「情報不足」因子と命名した (3 項目) .

内的整合性を検討するため, 各下位尺度の Cronbach の α 係数を算出したところ, 「利己優先志向」で $\alpha=.86$, 「活動否定」で $\alpha=.77$, 「情報不足」で $\alpha=.70$ の値が得られた. このことから, 信頼性は十分であることが示された.

Table 4-5 不参加志向動機の因子分析結果

	I	II	III
I 利己優先志向($\alpha=.86$)			
80. 自分の利益がないから	.764	.096	-.120
84. 報酬のない労働をするための暇はないから	.754	-.158	.086
68. 他者よりも自分を優先したいから	.735	-.109	-.033
79. 自分が活動をする理由がなく, 誰かがやってくれるなら, それでいいと思うから	.722	-.014	.030
69. 自分にとっての実がないことに, 虚しさを感じるから	.646	.151	.097
73. 自分に直接的な関わりがないものをするのは気が引けるから	.611	.205	.067
71. ボランティア活動に参加したくない訳ではないが, 報酬をもらえる事をしたいのが本音だから	.541	-.040	.184
89. ボランティア活動をする必然性を感じないから	.493	.042	-.226
II 活動否定($\alpha=.77$)			
75. 偽善的だから	-.032	.936	.040
87. ただの自己満足に感じるから	.096	.699	-.094
88. 人間としてまだ未熟な時期にボランティアに参加してしまうと「やってあげている気持ちになってしまう」から	-.054	.570	.011
III 情報不足($\alpha=.70$)			
70. どこでどんな活動をしているのか知らないから	.105	-.133	.732
74. ボランティア活動を上手く見つけられないから	-.267	.159	.693
18. ボランティア主催者の素性や内容などが判らなく不安だから	.207	-.003	.596
因子間相関			
	I	II	III
I	—	.370	-.015
II		—	.226
III			—

男女の差：男女差の検討を行うために、不参加志向動機の各下位尺度得点について t 検定を行った (Table4-6)。「利己優先志向」($t(59) = 0.51, n.s.$)・「活動否定」($t(58.21) = 1.07, n.s.$)・「情報不足」($t(62) = 1.65, n.s.$)のいずれも男女の得点差は有意ではなかった。

3つの下位尺度間の関連を見るため下位尺度間の相関係数を男女別に求めた (Table4-7)。その結果、男性では3つの下位尺度間のいずれも有意な相関は示さなかったが、女性では「活動否定」が「利己優先志向」, 「情報不足」と有意な正の相関 ($r = .408 \sim .446, p < .05$) を示した。

Table 4-6 男女別の平均値とSDおよび t 検定の結果

	男性			女性			
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	t 値
利己優先志向	34	3.27	1.04	27	3.14	0.79	0.51
活動否定	34	2.67	1.27	27	2.96	0.89	1.07
情報不足	36	2.98	1.15	28	3.42	0.89	1.65

Table 4-7 男女別の相関係数

	利己優先志向	活動否定志向	情報力不足
利己優先志向	—	.321	.078
活動否定	.446 *	—	.021
情報不足	-.039	.408 *	—

右上：男性 左下：女性 * $p < .05$

参加経験有無の差：ボランティア活動の参加経験有無の差、即ち、「参加経験あり・今後は参加意志なし」(以下「経験あり・非志望群」), 「参加経験なし・今後も参加意思なし」(以下「経験なし・非志望群」)の差の検討を行うために、不参加志向動機の各下位尺度得点について t 検定を行った (Table4-8) (Figure4-6~4-8)。その結果、ネガティブな「利己優先志向」($t(59) = 0.31, n.s.$)・「活動否定」($t(59) = 0.12, n.s.$)、環境原因の「情報不足」($t(62) = 1.07, n.s.$)のいずれも「経験あり・非志望群」と「経験なし・非志望群」の得点差は有意ではなかった。

Table 4-8 経験・志望有無別の不参加志向動機のt検定結果

	経験あり・非志望群			経験なし・非志望群			t値
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	
利己優先志向	19	3.16	0.95	42	3.24	0.94	0.31
活動否定	19	2.77	1.25	42	2.81	1.07	0.12
情報不足	21	2.97	1.14	43	3.27	1.02	1.07

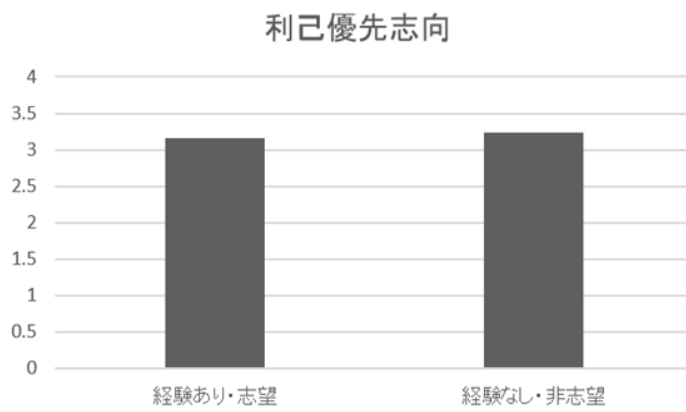


Figure4-6 参加経験・参加意志の差

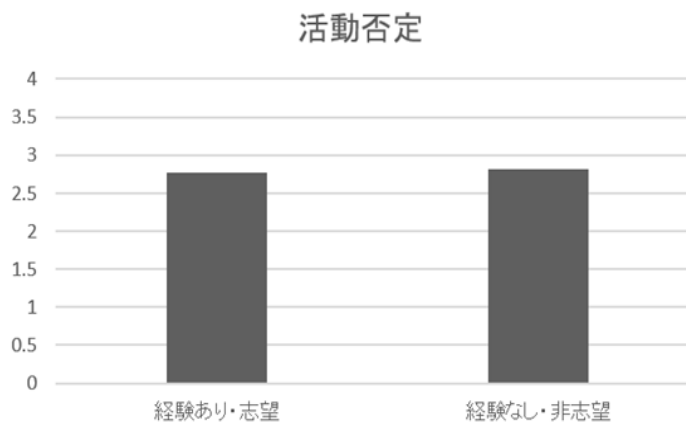
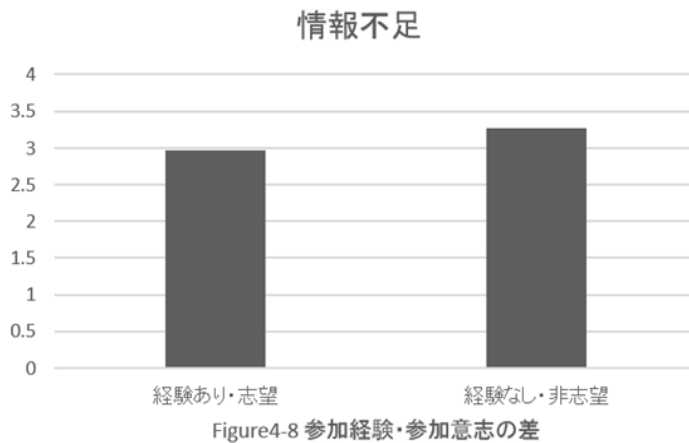


Figure4-7 参加経験・参加意志の差



3.3. 考察

参加志向動機

本研究では、まず大学生を対象として青年期におけるボランティア活動への参加志向動機の因子構成を明らかにした。具体的な因子構成としては、ボランティア活動に対して内発的な3因子「体験志向」・「社会貢献志向」・「興味対象志向」と外発的な2因子「他者同調志向」・「社会従属志向」が明らかとなった。「体験志向」・「社会貢献志向」・「興味対象志向」は、ボランティア団体・NPO 法人・大学サークルなどのボランティア実践者を対象とした参加動機に関する調査研究で見出された構成要因、例えば、西浦（1999）の「自己志向」・「社会志向」、谷田（2001）の「利他心」、松岡・小笠原（2002）の「学習・経験」「個人的興味」「キャリア」と個別構成要因としては一致することが分かった。しかし、「友人に誘われたから」「成り行きから」などの「他者同調志向」と「学校で勧められたから」「学校の授業の一環だから」などの「社会従属志向」は、上記の参加動機に関する調査研究では見出されておらず、青年期の参加志向動機では、本来の主体的・自発的な内発的要因に留まらず、外発的要因も大きいことが明らかとなった。これらのことから、ボランティア活動の普及・推進の観点では、体験志向や興味対象志向を満たす活動内容となる工夫をすること、参加実践者からの参加呼びかけや仲間同士での参加を働きかけることなどが効果的であることが示唆された。

参加志向動機の男女差をみると、ボランティア活動へ内発的な因子で女性が男性より有意に高い得点を示したことから、女性が男性よりボランティア活動参加に対して内発的であることが示された。そして、ボランティア活動への参

加経験有無と参加意志に関する検討では、ボランティア活動へ内発的な因子では、「経験あり・志望群」と「経験なし・志望群」の双方が「経験あり・非志望群」に対して有意に高い得点を示したことは、ボランティア活動に対して参加志望か不参加志望かに直接的に関わることであり、妥当であると考えられる。

本研究では、特定分野のボランティア活動ではなく、ボランティア活動全般に関して、ボランティア活動の経験者および未経験者の参加志向動機の因子構成が捉えられた。このことにより、従来のボランティア参加動機に関する調査研究に対して、ボランティア活動への参加動機がより包括的に捉えられたと考えられる。

不参加志向動機

次に、本研究では、青年期におけるボランティア活動の不参加志向動機の因子構成を明らかにした。具体的な因子構成としては、ボランティア活動の持つ社会性・利他性・無償性を受け入れ難いという意識として、ボランティア活動に対してネガティブな2因子「利己優先志向」「活動否定」が明らかになった。また、ボランティア活動に対するネガティブな意識とは異次元であり、必ずしも意識とは言えない環境原因としての「情報不足」が明らかになった。ボランティア活動の普及・推進の観点からは、ボランティア活動の主催者・推進側の啓蒙・情宣活動の一層の工夫と努力次第では、「情報不足」による不参加志向動機は、まだまだ解消・改善の余地があると考えられ、より多くの若者に対してボランティア活動の参加を促せられる可能性があると考えられる。

不参加志向動機の男女差をみると、いずれの因子も男女の得点差が有意でなかったことから、不参加志向動機の因子構成では、男女の差がないことが示された。そして、ボランティア活動への参加経験有無に関する検討では、いずれの因子も「経験あり・非志望群」と「経験なし・非志望群」の得点差は有意ではなかった。このことから、ボランティア活動の不参加志向動機では、ボランティア活動の経験あり・経験なしでは、差がないことが示唆された。

本研究では、ボランティア活動への参加志向動機を捉える因子構成と対極とも言えるボランティア活動の経験者および未経験者の不参加志向動機の因子構成を包括的に捉えられた。ボランティア活動の普及・推進の観点からもボランティア活動への参加志向動機に加え、ボランティア活動に対しての不参加志向動機を包括的に捉えられたことは実践的な結果が得られたものと考えられる。

第2節 ボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究2]

1. 目的

本研究では、大学生のボランティア活動に対するイメージの構成要因を明らかにし、参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討することによって、大学生のボランティア活動の推進や教育課程でのボランティア教育のあり方に繋がる知見を得ることを目的とした。

2. 予備調査

2.1. 方法

調査協力者：本研究の予備調査における協力者は、首都圏の2つの4年制大学に通う大学生189名（男子112名，女子77名）であった。平均年齢は19.57歳（ $SD=1.29$ ）であった。

調査方法：2012年5月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。大学生が抱くボランティア活動に対する「イメージ」を測定するための項目を作成するため、調査協力者には、「あなたが描くボランティア活動に対するイメージをお答えください」という教示を行い、複数回答可の自由記述を収集した。

2.2. 結果と考察

予備調査では、調査協力者のうち183名から339個の有効な記述回答が得られた。それらの記述を整理した結果、「思いやり」「優しさ」「人助け」などの「親和・援助」（117個）・「自発」「無報酬」「公共社会性」などの「活動理念」（98個）・「自己成長」「やりがい」などの「自己志向」（45個）・「自己満足」「偽善的」などの「否定・批判」（38個）・「積極性」「余裕」などの「行動条件」（29個）・「介護」「環境改善」「災害援助」「国際協力」「地域活動」など「具体的活動」（12個）に大別された。

なお、東日本大震災ではマスコミ報道等で多くの「災害ボランティア」の活躍が報じられたが、「具体的活動」のうち「災害援助」の記述は2個の記述にとどまった。これは、「具体的活動」の記述が最も少なかったことからみても、

今回調査では「具体的なボランティア活動」を直接的に尋ねたのではなく、「ボランティア活動に対するイメージ」を尋ねたためと考えられる。しかしながら、調査対象者の3分の1が「親和・援助」を挙げている点は、東日本大震災の影響の可能性はある。

これらの自由記述について同一・同義の記述を整理のうえ、総務省（1994）の「青少年のボランティア活動に関する調査」を加味・参考にして質問項目を策定した。そして、心理系大学教員と心理学専攻の大学院生の3名で内容を検証のうえ、最終的に64項目をボランティア活動イメージに対する質問項目とした。

3. 本調査

3.1. 方法

調査協力者：本調査における協力者は、首都圏の4つの4年制大学に通う大学生542名（男子256名，女子286名）であった。平均年齢は19.65歳（ $SD=1.32$ ）であった。

手続き：2012年5月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の構成：（1）ボランティア活動の経験および今後の活動意志：「ボランティア活動の経験および今後の活動」に関して、①「ボランティア活動の経験があり、今後も経験したい」②「ボランティア活動の経験はあるが、今後は活動に参加する意志はない」③「ボランティア活動の経験はないが、今後は活動に参加したい」④「ボランティア活動の経験はなく、今後も活動に参加する意志はない」のいずれかを回答してもらった。（2）ボランティア活動イメージ：予備調査によって抽出された「ボランティア活動イメージ」の64項目を用いて質問項目とした。（3）ボランティア活動参加志向動機：研究1のボランティア活動参加志向動機の構成要因を使用した。（4）ボランティア活動不参加志向動機：研究1のボランティア活動不参加志向動機の構成要因を使用した。上記（2）（3）（4）の回答形式は、「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法である。

3.2. 結果

3.2.1. ボランティア活動イメージ

因子分析結果：ボランティア活動イメージ64項目の平均値，標準偏差を算出した．そして，天井効果およびフロア効果の見られた10項目を以降の分析から除外した．次に残りの54項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った．負荷量の絶対値が.40未満の項目を除外しながら繰り返し因子分析を行ったところ，最終的に5因子23項目が得られた（Table4-9）．

第Ⅰ因子は，「ボランティア活動は勉強になるものである」「ボランティア活動は自分のためになる」「ボランティア活動は人生の生きがいになるものである」など，自己実現に繋がるイメージを含む項目が高い負荷量を示したので，「自己実現」（ $\alpha=.86$ ）因子と命名した（9項目）．第Ⅱ因子は，「ボランティア活動は優しさというイメージがある」「ボランティア活動は親切心である」「ボランティア活動は心づかいである」など，ボランティア活動本来の親和的な他者援助イメージを含む項目が高い負荷量を示したので，「親和援助」（ $\alpha=.74$ ）因子と命名した（4項目）．第Ⅲ因子は，「ボランティア活動は自己満足である」「ボランティア活動は偽善的である」など，否定的なイメージを含む項目が高い負荷量を示したので，「否定」（ $\alpha=.75$ ）と命名した（4項目）．第Ⅳ因子は，「ボランティア活動は老人介護というイメージがある」「ボランティア活動は障害者介護のイメージがある」など，具体的な活動内容をイメージする項目であったので，「具体的活動」（ $\alpha=.75$ ）と命名した（3項目）．第Ⅴ因子は，「ボランティア活動は強制的なイメージがある」「ボランティア活動は無責任である」など，強制的なものとして当事者意識から離れたイメージの項目であったので，「強制無責任」（ $\alpha=.64$ ）と命名した（3項目）．

なお，「具体的活動」では，「老人介護」・「障害者介護」・「環境改善」の項目で構成されたが，質問項目のうち他の具体的活動の「災害援助」は天井効果で除外され，「地域活動」・「国際協力」は十分な負荷量を示さなかったので除外された．

Table4-9 ボランティア活動イメージの因子分析結果

	I	II	III	IV	V
I 自己実現 ($\alpha=.80$)					
ボランティア活動は勉強になるものである	.72	.05	.10	-.03	-.11
ボランティア活動は自分のためになる	.70	-.09	.00	.03	.00
ボランティア活動は楽しいものである	.66	-.07	-.09	-.05	.15
ボランティア活動は余暇の有効活用ができる	.66	-.15	.05	-.10	.10
ボランティア活動は人生の生きがいになるものである	.66	-.01	-.08	-.02	.16
ボランティア活動はやりがいのあるものである	.62	.08	-.08	.05	-.02
ボランティア活動は達成感が得られる	.55	.11	.01	.12	-.02
ボランティア活動は人と人とのふれ合いである	.52	.14	.05	.04	-.09
ボランティア活動は知識や経験が身に付くものである	.52	.16	.06	.10	-.11
II 親和援助 ($\alpha=.74$)					
ボランティア活動は優しさというイメージがある	.02	.77	.02	-.07	-.01
ボランティア活動は親切心である	.00	.71	-.04	-.05	.12
ボランティア活動は心づかいである	.07	.62	.01	-.02	-.05
ボランティア活動は困った人を助けるものである	-.09	.52	-.01	.16	.01
III 否定 ($\alpha=.75$)					
ボランティア活動は自己満足である	-.02	.00	.71	-.06	-.12
ボランティア活動は偽善的である	.07	.03	.69	-.08	.05
ボランティア活動はみせかけのものである	-.13	-.05	.57	.14	.03
ボランティア活動はおせっかいである	.04	-.01	.56	.04	.15
IV 具体的活動 ($\alpha=.75$)					
ボランティア活動には老人介護というイメージがある	.00	-.09	-.03	.91	.01
ボランティア活動には障害者介護のイメージがある	-.04	.02	.01	.79	.02
ボランティア活動には環境改善というイメージがある	.08	.14	-.01	.43	.00
V 強制無責任 ($\alpha=.64$)					
ボランティア活動は強制的なイメージがある	-.13	.19	.00	.04	.71
ボランティア活動は無責任である	.07	-.05	.15	-.01	.59
ボランティア活動は専門的な能力が必要である	.20	-.06	-.04	.00	.54
因子間相関					
I	—	.65	-.33	.15	-.38
II		—	-.32	.22	-.39
III			—	.15	.57
IV				—	.16
V					—

男女の差：総務省（2011）が行った「平成 23 年社会生活基本調査」のボランティア活動に関する青年期のデータでは、女子が男子よりも行動率が高いことが示されている。したがって、ボランティア活動イメージとの関係からボランティア活動の推進に繋がる知見を得るためには、男子と女子が抱くボランティア活動イメージの差異について検討する必要がある。そこで、男子と女子との差の検討を行うために、ボランティア活動イメージの下位尺度得点について、 t 検定を行った（Table4-10）。自己実現 ($t(463.32) = -5.95, p < .001$) と親

和援助 ($t(470.23) = -2.61, p < .01$) については男子よりも女子の方が有意に高い得点を示した。否定 ($t(513) = 1.78, n.s.$)・具体的活動 ($t(513) = 0.97, n.s.$)・強制無責任 ($t(474.49) = 1.79, n.s.$) については、男女の得点差は有意ではなかった。

Table4-10 男女別の平均値, *SD*および *t* 検定の結果

	男 子			女 子			<i>t</i> 値
	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	<i>n</i>	平均	<i>SD</i>	
自己実現	243	3.64	0.67	272	3.97	0.54	-5.95 ***
親和援助	242	3.88	0.72	271	4.03	0.60	-2.61 **
否 定	243	2.85	0.82	272	2.73	0.75	1.78
具体的活動	241	3.21	0.90	274	3.13	0.88	0.97
強制無責任	243	2.39	0.81	273	2.27	0.68	1.79

** $p < .01$ *** $p < .001$

参加経験・参加意志の差：ボランティア活動の参加経験の有無および参加意志の有無によってボランティア活動イメージが異なるのかを検討するため、参加経験の有無（参加経験あり、参加経験なし）と参加意志の有無（参加志望、参加非志望）を独立変数、ボランティア活動イメージの5因子を従属変数とした2要因の分散分析を行った（Table4-11）（Figure4-9～4-13）。参加経験の有無別では参加経験あり群には467名、参加経験なし群は52名が調査対象者に含まれ、参加意志の有無別では参加志望群には400名、参加非志望群には119名が含まれていた。分散分析の結果、自己実現では、参加意志の主効果（ $F(1, 515) = 9.834, p < .01$ ）がみられ、志望群の方が非志望群よりも有意に得点が高かった。強制無責任では、参加経験の有無×参加意志の有無の有意な交互作用（ $F(1, 515) = 4.054, p < .05$ ）がみられた。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検討を行った結果、参加志望群においては、参加経験なし群の方が参加経験あり群よりも有意に得点が高かった（ $F(1, 515) = 5.570, p < .05$ ）。

Table4-11 経験有無別・志望有無別のイメージに対する2要因分散分析の結果

	経験あり		経験なし		2要因分散分析		
	志望 (n=372)	非志望 (n=95)	志望 (n=28)	非志望 (n=24)	経験別 F値	志望別 F値	交互作用 F値
自己実現	4.08 (1.40)	3.47 (1.23)	3.85 (0.59)	3.22 (0.90)	1.369	9.834** 志望>非志望	0.001
親和援助	4.32 (2.83)	4.11 (2.56)	4.05 (0.53)	3.70 (0.86)	0.608	0.444	0.011
否定	2.88 (2.31)	3.40 (2.55)	3.00 (0.80)	2.83 (1.11)	0.424	0.299	1.043
具体的活動	3.19 (1.89)	4.77 (7.96)	3.29 (0.80)	2.93 (0.83)	2.503	1.197	3.043
強制無責任	2.42 (2.44)	2.60 (0.81)	3.60 (6.12)	2.31 (0.80)	1.180	2.257	4.054* 経験なし>経験あり

(注)カッコ内は標準偏差

* $p < .05$ ** $p < .01$

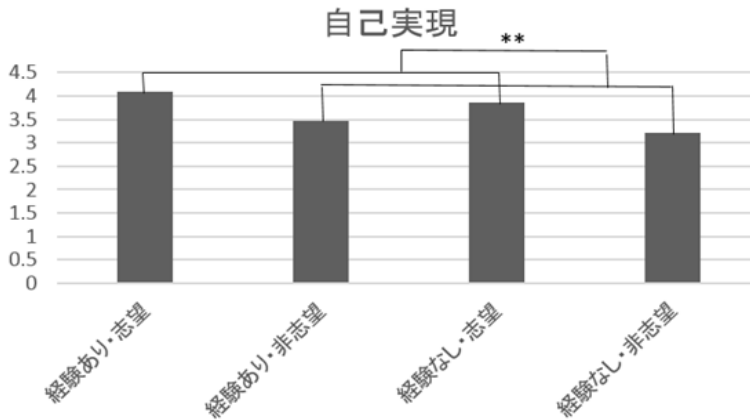


Figure4-9 参加経験・参加意志の差

親和援助

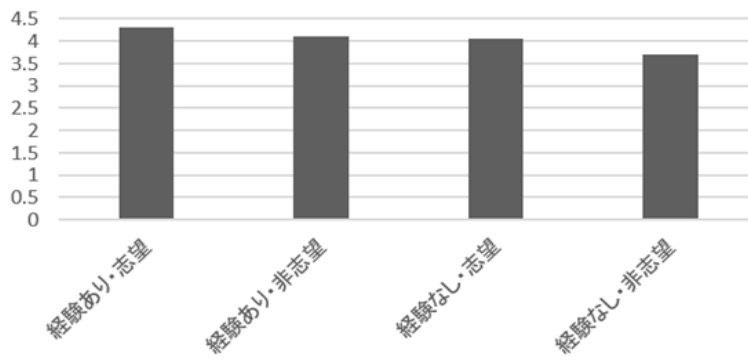


Figure4-10 参加経験・参加意志の差

否 定

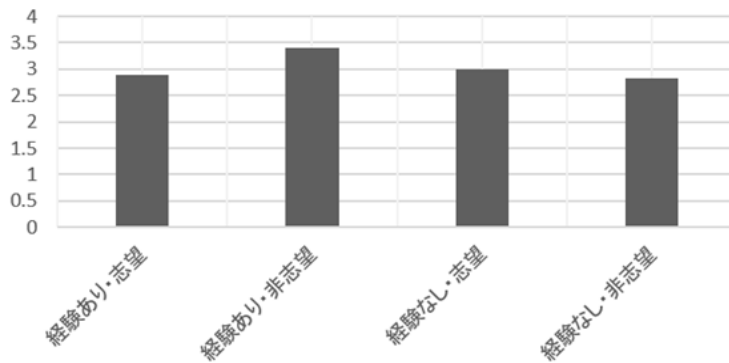


Figure4-11 参加経験・参加意志の差

具体的活動

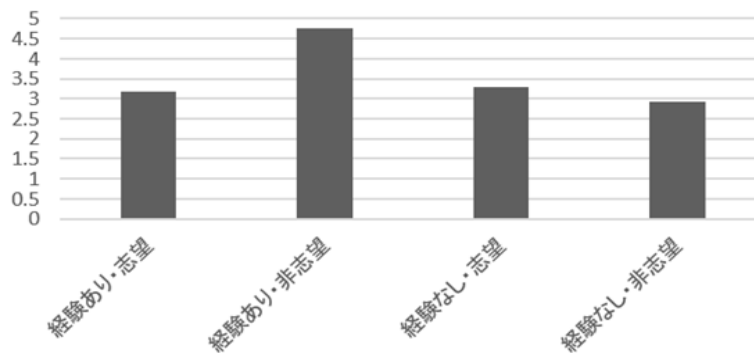


Figure4-12 参加経験・参加意志の差

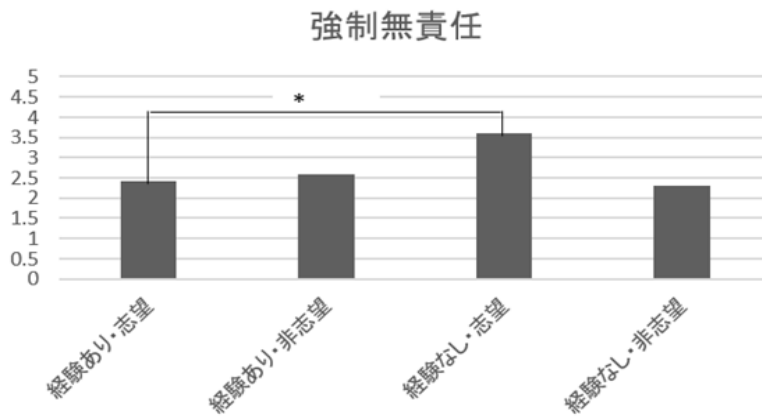


Figure4-13 参加経験・参加意志の差

3.2.2. イメージと参加志向動機・不参加志向動機との関係

次に、イメージと参加志向動機・不参加志向動機との関連を検討した。イメージの5因子を独立変数、参加志向動機の5因子および不参加志向動機の3因子を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table4-12）。その結果、自己実現は、参加志向動機の体験志向（ $\beta=.57$ ）、社会貢献志向（ $\beta=.42$ ）、興味対象志向（ $\beta=.61$ ）、他者同調志向（ $\beta=.16$ ）に正の影響を及ぼし、不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta=-.34$ ）、活動否定（ $\beta=-.15$ ）に負の影響を及ぼしていた。親和援助は、参加志向動機の体験志向（ $\beta=.13$ ）、社会貢献志向（ $\beta=.13$ ）、他者同調志向（ $\beta=.14$ ）と不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta=.17$ ）に正の影響を及ぼした。否定は、参加志向動機の体験志向（ $\beta=-.11$ ）、社会貢献志向（ $\beta=-.10$ ）、興味対象志向（ $\beta=-.11$ ）に負の影響を及ぼし、不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta=.24$ ）、活動否定（ $\beta=.37$ ）に正の影響を及ぼした。具体的活動は、参加志向動機の世界貢献志向（ $\beta=.14$ ）、他者同調志向（ $\beta=.25$ ）、社会従属志向（ $\beta=.25$ ）に正の影響を及ぼし、興味対象志向（ $\beta=-.09$ ）に負の影響を及ぼした。強制無責任は、参加志向動機の興味対象志向（ $\beta=.09$ ）、他者同調志向（ $\beta=.10$ ）、社会従属志向（ $\beta=.14$ ）と不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta=.16$ ）、活動否定（ $\beta=.17$ ）、情報不足（ $\beta=.20$ ）に正の影響を及ぼした。重回帰分析の結果に基づきパス図を作成した（Figure4-14）。なお、パス図には有意なパス（ $p<.05$ 水準）のみを記した。

Table4-12イメージ・参加志向動機・不参加志向動機の構成要因別の重回帰分析結果

	参加志向動機					不参加志向動機		
	体 験	社会貢献	興味対象	他者同調	社会従属	利己優先	活動否定	情報不足
自己実現	.57 ***	.42 ***	.61 ***	.16 **	-.05	-.34 ***	-.15 **	-.04
親和援助	.13 **	.13 **	.03	.14 **	.08	.17 **	.05	.09
否 定	-.11 **	-.10 *	-.11 *	.04	.04	.24 ***	.37 ***	.04
具体的活動	.00	.14 **	-.09 *	.25 ***	.25 ***	.08	.00	.08
強制無責任	.05	.08	.09 *	.10 *	.14 **	.16 **	.17 ***	.20 ***
R^2	.45 ***	.30 ***	.39 ***	.16 ***	.09 ***	.24 ***	.27 ***	.06 ***

(注) 値は標準偏回帰係数

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

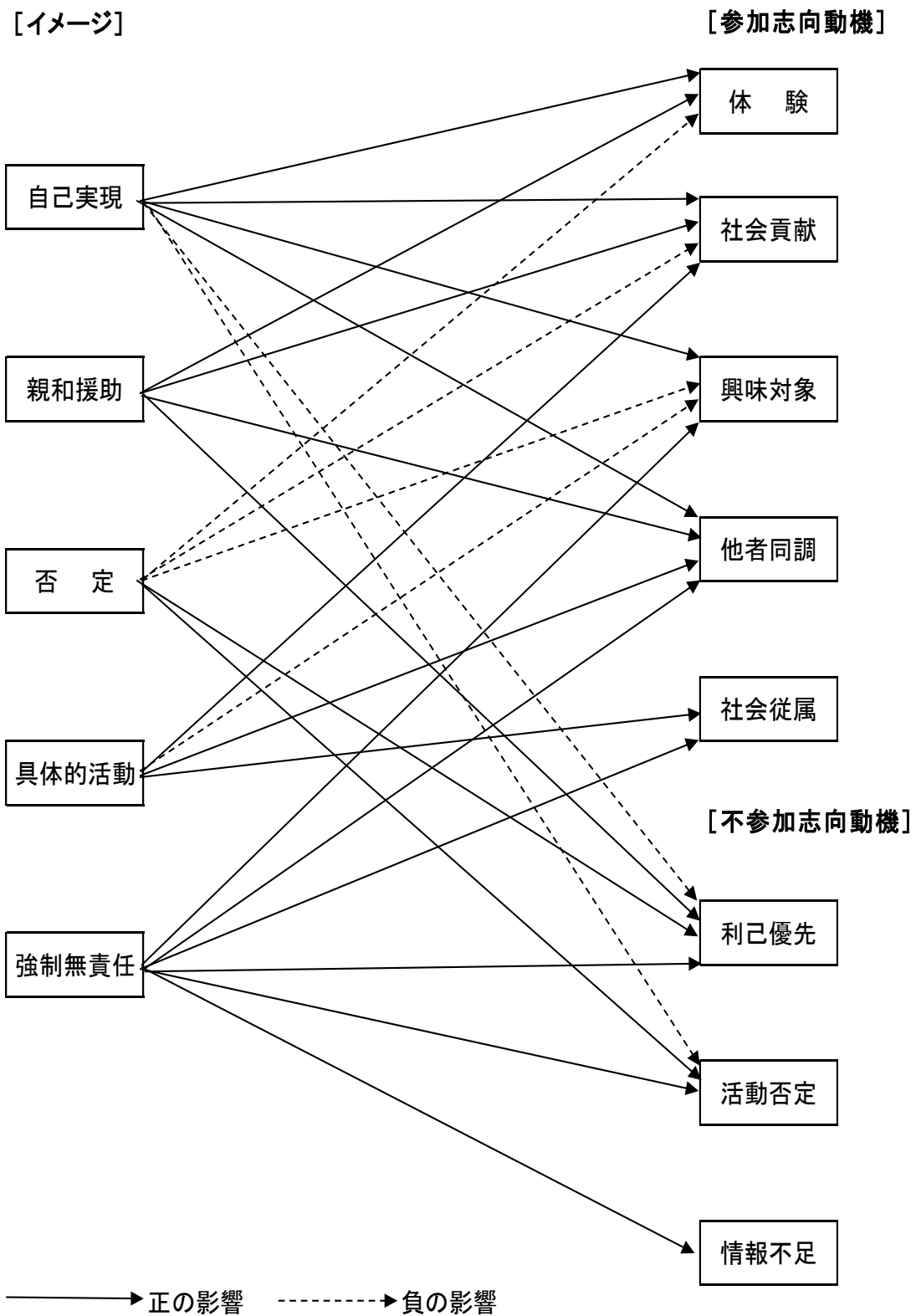


Figure4-14 イメージ・参加志向動機・不参加志向動機のパス図

3.3. 考察

本研究では、まず大学生のボランティア活動に対するイメージの因子構成を明らかにした。具体的な因子構成としては、ポジティブな自己実現、本来的な親和援助、ネガティブな否定と強制無責任、その他の具体的活動の5因子が明らかとなった。自己実現・親和援助・否定・強制無責任は、青少年を対象としたボランティア活動イメージ・意識に関する調査研究で見出された構成因子、例えば、河内（1999）の貢献スケール・偽善視的スケール、伊藤（2002）の充実達成獲得・社会性獲得・反ボランティア義務的、大東ほか（2004）の自己実現・公共性他律的、水野・加藤（2007）肯定的イメージ・期待感・批判的イメージなどと個別に合致がみられた。しかし、具体的活動は、上記の調査研究では見出されていない。大学生は抽象的イメージの他に、具体的ボランティア活動をイメージとして想起していることが明らかとなった。これは、大学生のボランティア活動の情報源として、「友人・ロコミ」・「インターネット等の情報網」が多いことからみて（文部科学省 2015）、近年のボランティア参加者の増加とインターネット等の情報網の発展、教育課程でのボランティア教育の進展などによって、具体的なボランティア活動が一層身近に感じられるようになったためと推察される。

ボランティア活動イメージの男女差をみると、自己実現と親和援助では、女子が男子より有意に高い得点を示した。このことから、女子が男子よりボランティア活動に対して、ポジティブなイメージと本来的なイメージを抱いていることが示された。そして、二律的検討として、ボランティア活動への参加経験の有無と参加意志の有無の差をみると、まず、自己実現では、志望群の方が非志望群よりも高く抱くことが示された。このことは、伊藤（2002）がボランティア活動に対して参加希望の学生の方が参加非希望の学生よりも充実達成獲得という自己実現と類似イメージを高く抱くことを示していることから、大学生の参加志望か参加非志望かは、より高く自己実現を抱いているかが、その鍵となることが示唆された。また、強制無責任では、参加志望群においては、参加経験なし群の方が参加経験あり群よりも高く抱くことが示された。このことは、水野・加藤（2007）は経験なし群の方が経験あり群よりも批判的イメージが高いことを示していることに通じると言える。そして、新垣（2009）は、体験満足度が高いほど強制的などのネガティブイメージが低下することを示していることから、大学生の経験者はボランティア活動体験によって、何らかの

体験満足度が得られた結果として、未経験者よりもネガティブイメージが低いものと考えられる。

次に、大学生のボランティア活動に対するイメージが参加志向動機と不参加志向動機の各構成要因にどのように影響を与えるのかについて検討した。その結果、ポジティブな因子の自己実現は、主に内発的な参加志向動機の体験志向・社会貢献志向・興味対象志向に正の影響を及ぼし、ネガティブな不参加志向動機の利己優先志向・活動否定に負の影響を及ぼすことが示された。このことは、ボランティア活動への参加に対して積極的か消極的かという参加意識とボランティア活動イメージの関連性を二律的に検討した先行研究（柴崎 1997, 伊藤 2002, 倉掛・大谷 2004）では、ボランティア活動に対して総じて積極的な学生の方が、消極的な学生よりもポジティブなイメージを抱くことが概略的に示されていることから裏付けられるものと考えられる。そして、大学生の参加行動や不参加行動に繋がる参加志向動機および不参加志向動機に対しては、ポジティブなイメージの自己実現が大きな鍵となることが明らかとなったことから、自己実現イメージの増進が、ボランティア活動参加への内発的・積極的な参加志向動機を高め、利己的・否定的な不参加志向動機を低めることが示唆された。

親和援助が参加志向動機の体験志向・社会貢献志向・他者同調志向と不参加志向動機の利己優先志向とに正の影響を及ぼした。倉掛・大谷（2004）は、ボランティア活動に対して積極的な学生と消極的な学生の両方が利他イメージを抱くことを示していることから、ボランティア活動の本質的な利他イメージを肯定的に捉えるか否定的に捉えるかによって、参加志向動機と不参加志向動機の両方向に影響することが示唆された。

否定は、全ての内発的な参加志向動機の体験志向・社会貢献志向・興味対象志向に負の影響を及ぼし、ネガティブな不参加志向動機の利己優先志向・活動否定に正の影響を及ぼした。このことは、ボランティア活動に対するイメージと動機の方向性が一致することであり、妥当な結果であると言える。

具体的活動は、参加志向動機の社会貢献志向・他者同調志向・社会従属志向に正の影響を及ぼし、興味対象志向に負の影響を示した。このことから、イメージされた具体的な活動如何によって、参加志向動機を高めたり、低めたりすることが示唆された。

強制無責任は、主に参加志向動機の外発的な他者同調志向・社会従属志向、

全ての不参加志向動機の利己優先志向・活動否定・情報不足に正の影響を示した。このことは、ボランティア活動の持つ本質的な自発性・自主性に関わることであり、妥当な結果であると言える。そして、荒川ほか（2006）は、小・中・高等学校の授業の一環としてボランティア活動を経験した者は、他の機会を利用した学生に比べ「自発的ではない」というイメージを抱く割合が高いことを示していることから、教育課程でのボランティア活動には、外発的活動が含まれることによるイメージと参加志向動機への影響が示唆された。

以上のことから、大学生のボランティア活動参加に対して、イメージと参加志向動機・不参加志向動機の密接な関係性を読み取ることが出来たと言える。そして、ボランティア活動への参加志向動機を高めるには、自己実現イメージの醸成と否定イメージの低減や親和援助イメージ・具体的活動イメージの肯定的イメージへの形成を図ることが効果的であり、各段階の学校教育でのボランティア教育において、ボランティア活動に対するイメージへ訴求する工夫も必要であることが示唆された。

本研究では、次世代を担う大学生を対象として、新たにボランティア活動イメージの構成要因を明らかに出来たこと、そして、先行研究では解明されてこなかったボランティア活動イメージがボランティア活動への参加行動や不参加行動を引き起こす参加志向動機と不参加志向動機にどのように影響を与えるのかということを含括的且つ構造的に明らかに出来たことは、今後の大学生のボランティア活動への参加促進や参加定着の観点や教育課程でのボランティア体験学習のあり方を検討するうえで意義があったと考える。

第3節 参加成果が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究3]

1. 目的

本研究では大学生のボランティア活動に対する参加成果を明らかにして、参加志向動機・不参加志向動機への影響を検討することによって、大学生のボランティア活動の推進・普及や教育課程でのボランティア教育のあり方に繋がる知見を得ることを目的とした。

2. 方法

調査協力者：協力者は、首都圏の4つの4年制大学に通う大学生合計542名（男子256名、女子286名）であった。平均年齢は19.65歳（ $SD=1.32$ ）であった。

手続き：2012年5月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でもボランティアと無関連科目の講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の構成：（1）ボランティア活動の経験および今後の活動意志：「ボランティア活動の経験および今後の活動」に関して、①「ボランティア活動の経験があり、今後も経験したい」②「ボランティア活動の経験はあるが、今後は活動に参加する意志はない」③「ボランティア活動の経験はないが、今後は活動に参加したい」④「ボランティア活動の経験はなく、今後も活動に参加する意志はない」のいずれかを回答してもらった。（2）ボランティア活動参加成果：妹尾・高木（2003）が抽出した援助成果の構成要因を使用した。これは一過的でない、長期にわたるボランティア活動から得られる援助成果を捉えるものである。「愛他的精神の高揚」（4項目）・「人間関係の広がり」（4項目）・「人生への意欲喚起」（3項目）の3因子11項目で構成されている。これらの項目について「あなたがボランティア活動への参加から得られたこと（得たいこと）」を回答してもらった。（3）ボランティア活動参加志向動機：研究1のボランティア活動参加志向動機の構成要因を使用した。（4）ボランティア活動不参加志向動機：研究1のボランティア活動不参加志向動機の構成要因を使用した。上記（2）（3）（4）の回答形式は、「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法である。

3. 結果

3.1. 参加成果の構成要因

参加成果 11 項目の平均値，標準偏差を算出した結果，天井効果およびフロア効果は見られなかった．次に 11 項目について主因子法による因子分析を行った．固有値の変化から 1 因子構造が妥当であると考えられた．そこで再度，1 因子を仮定して主因子法による因子分析を行った結果，参加成果の 1 因子 11 項目 ($\alpha=.95$) が得られた (Table4-13)．1 因子による分散の説明率は 66.1%であった．

Table4-13 参加成果の因子分析結果

I 参加成果 ($\alpha=.95$)	I
6 やりがいが生まれた (やりがいを得たい)	.85
9 「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた (目標を持ちたい)	.85
11 日常生活の中での人との対応が好ましい方向に変わった (変わりたい)	.83
4 対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になっている (勉強になりたい)	.83
10 自分に出来ることで社会と関わり，人の役に立つことが出来た (役立ちたい)	.82
8 新しい出会いがあり人間関係の輪が広がった (輪を広めたい)	.79
1 対象者の幸福・安寧のための新たな目標が出来た (目標を持ちたい)	.78
5 活動そのものを楽しめた (楽しみたい)	.78
7 人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた (気持ちを持ちたい)	.77
2 気持ちの充足感が生まれた (充足感を得たい)	.74
3 仲の良い友達が出来た (仲の良い友達を得たい)	.65

3.2. 参加経験・参加意志の差

まず，ボランティア活動の参加経験の有無および参加意志の有無によって参加成果が異なるのかを検討するため，参加経験の有無と参加意志の有無を独立変数，参加成果の 1 因子を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った (Table4-14) (Figure4-15)．参加経験の有無別では参加経験あり群には 438 名，参加経験なし群は 49 名が調査対象者に含まれ，参加意志の有無別では参加志望群には 376 名，参加非志望群には 111 名が含まれていた．分散分析の結果，参加意志の主効果 ($F(1, 483) = 40.45, p < .001$) がみられ，志望群の方が非志望群よりも有意に得点が高かった．

Table4-14 経験有無別・志望有無別の参加成果に対する2要因分散分析の結果

	経験あり		経験なし		2要因分散分析		
	志望	非志望	志望	非志望	経験別 F値	志望別 F値	交互作用 F値
(n)	(351)	(87)	(25)	(24)			
参加成果	3.81	2.96	3.73	2.96	0.10	40.45***	0.12
	(0.71)	(1.16)	(0.64)	(1.07)		志望>非志望	

(注) 下段カッコ内は標準偏差

*** $p < .001$

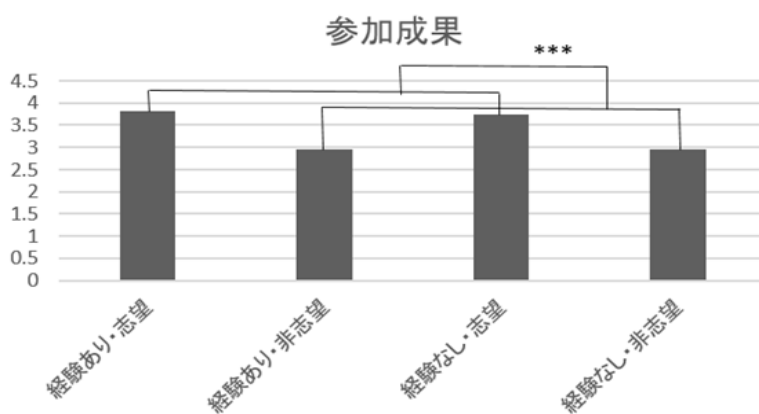


Figure4-15 参加経験・参加意志の差

3.3. 参加志向動機・不参加志向動機との関係

参加成果と参加志向動機・不参加志向動機との関連を検討した。参加成果の1因子を独立変数、参加志向動機の5因子および不参加志向動機の3因子を従属変数とした単回帰分析（強制投入法）を行った（Table4-15）。

その結果、参加成果は、参加志向動機の体験志向（ $\beta = .78$ ）、社会貢献志向（ $\beta = .68$ ）、興味対象志向（ $\beta = .70$ ）、他者同調志向（ $\beta = .39$ ）、社会従属志向（ $\beta = .16$ ）のいずれにも正の影響を及ぼし、不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta = -.27$ ）、活動否定（ $\beta = -.20$ ）に負の影響を及ぼした。単回帰分析の結果に基づきパス図を作成した（Figure4-16）。なお、パス図には有意なパス（ $p < .05$ 水準）のみを記した。

Table4-15 参加成果・参加志向動機・不参加志向動機の構成要因別の単回帰分析結果

	参加志向動機					不参加志向動機		
	体 験	社会貢献	興味対象	他者同調	社会従属	利己優先	活動否定	情報不足
参加成果	.78 ***	.68 ***	.70 ***	.39 ***	.16 **	-.27 ***	-.20 ***	.00
R^2	.61 ***	.46 ***	.48 ***	.15 ***	.02 **	.07 ***	.04 ***	.00

(注) 値は標準化偏回帰係数

** $p < .01$ *** $p < .001$

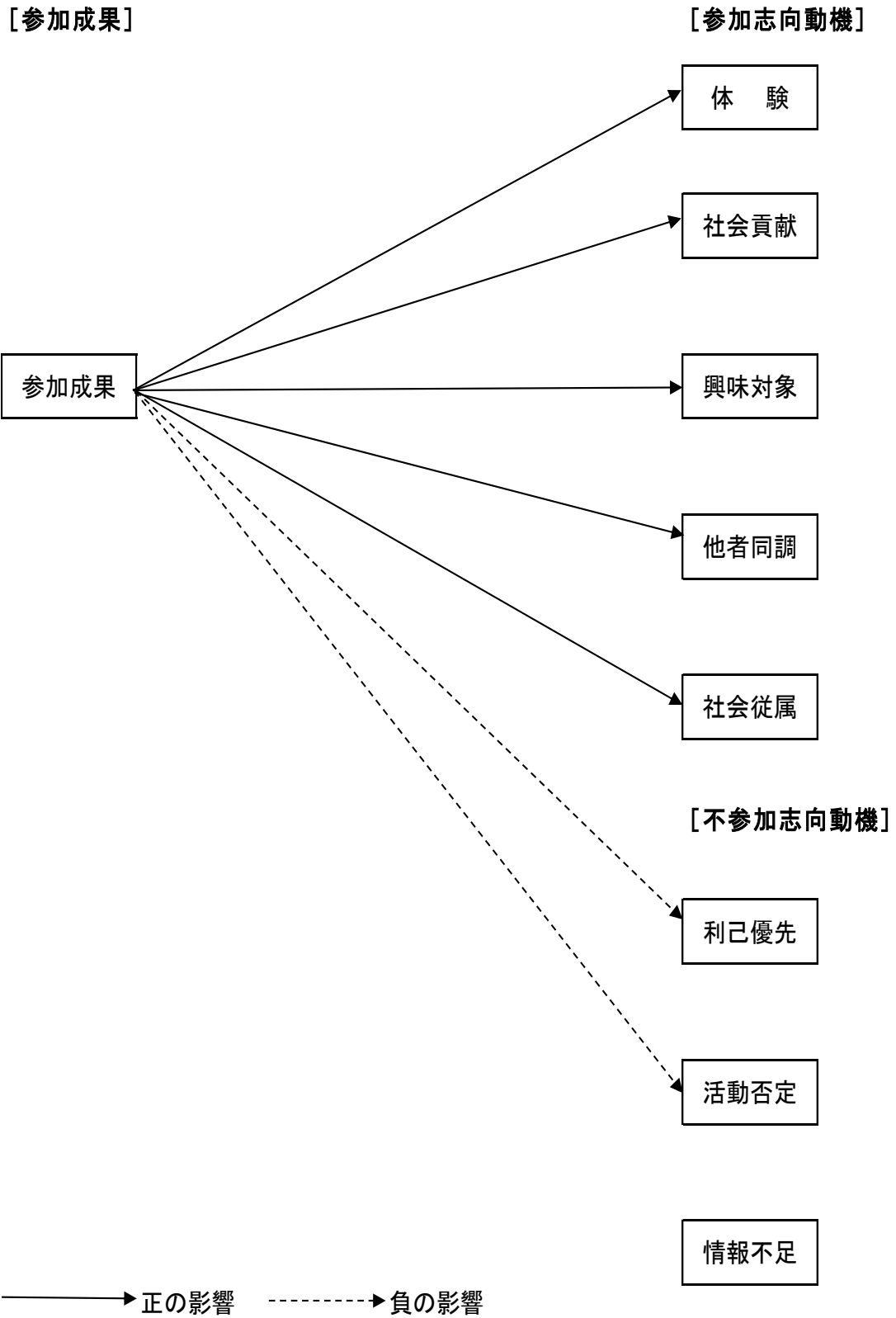


Figure4-16 参加成果・参加志向動機・不参加志向動機のパス図

4. 考察

本研究では、大学生を対象として、ボランティア活動の参加成果の視点から、参加志向動機・不参加志向動機への影響を検討した。その結果、災害ボランティア（高木・玉木 1996）、中高年ボランティア（妹尾・高木 2003）、学生ボランティア（佐々木 2003、妹尾 2008）がボランティア活動を通じて得られた援助成果（参加成果）では、複数の因子構造であったが、本研究の参加成果では、単数の因子構造であった。こうした構造の差異は、本研究だけでは明らかにできないが、妹尾・高木（2003）の援助成果は、中高年のボランティアを対象とした調査から抽出されたものであり、大学生の援助成果を必ずしも十分に捉えていない可能性はある。しかしながら、妹尾・高木（2003）の援助成果の個別 11 項目は、本研究において何れも高い値を示したことから、その構成要因の内容自体には大きなギャップがないことが示唆された。

参加経験・参加意志の差の検討からは、参加志望者は、非志望者よりも、参加経験の有無に拘わらず活動に対する参加成果が高いことが示唆された。さらに参加成果と参加志向動機・不参加志向動機との関係の検討からは、参加成果が高いほど、参加志向動機の体験志向・社会貢献志向・興味対象志向・社会従属志向のいずれもが高まり、不参加志向動機の利己優先志向・活動否定が低下することが示唆された。妹尾・高木（2003）や高木・玉木（1996）は、活動継続・活動再参加への動機づけには、自己への活動の恩恵への認知、即ち、参加成果の実感を感じている人であることを示していることから妥当な結果といえる。

これらのことから、大学生のボランティア活動参加に対して、参加成果と参加志向動機・不参加志向動機の密接な関係性を読み取ることが出来たことから、参加成果がボランティア参加行動を動機づける重要な要因であることが示唆された。

第4節 参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究4]

1. 目的

本研究では、大学生のボランティア活動を通じて得たい参加成果志向の構成要因を明らかにし、参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討することによって、大学生のボランティア活動の推進や教育課程でのボランティア教育のあり方に繋がる知見を得ることを目的とした。

2. 予備調査

2.1. 方法

調査協力者：本研究の予備調査における協力者は、首都圏の2つの4年制大学に通う114名（男子70名，女子44名）であった。平均年齢は19.70歳（ $SD=1.05$ ）であった。

調査方法：2015年6月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。大学生がボランティア活動を通じて得たい参加成果を測定するための項目を作成するため、調査協力者には、「あなたがボランティア活動へ参加することを通じてあなたが得たいことをお答えください」という教示を行い、複数回答可の自由記述を収集した。

2.2. 結果と考察

予備調査では、調査協力者のうち91名から161個の有効な記述回答が得られた。それらの記述を整理した結果、能力開発的な成果期待としての「自己成長・発見」（41個）・「愛他・向社会性向上」（23個）・「対人的能力」（18個）・「知識・技能習得」（8個）、キャリア開発に関係する成果期待としての「職業選択」（8個）、心理的な成果期待としての「充実・達成」（51個）・「エンジョイ」（10個）・「その他」（2個）に大別された。匿名の自由記述という手法の特性もあり、大学生がボランティア活動を通じて得たいと考える様々な参加成果志向を収集することができた。また、「能力開発」関連と「職業選択」の参加成果志向が表明されたことは、ボランティア活動が有する意義のひとつとしての教育効果に対して、大学生自体も期待が大きいこ

とが示唆された。なお、今回収集された自由記述の「知識・技能習得」・「職業選択」は、妹尾・高木（2003）が中高年を対象として参与観察・半構造化面接から抽出した参加成果では、見られないものであり、近い将来の進路決定を控える大学生の特徴ではないかと考えられる。

これらの自由記述について同一・同義の記述を整理のうえ、質問項目が幅広く網羅されるように、自由記述では明確な同義の記述がなかった日本学生支援機構（2006）の「学生ボランティア活動に関する調査報告書」から「自己成長・発見」の1項目、仁部（2006）の「若年者のボランティア活動とキャリア開発の関係」から「自己成長・発見」の2項目と「職業選択」の2項目を加えて質問項目を策定した。そして、大学教員と大学院生の3名で内容を検証のうえ、最終的に47項目を参加成果志向の質問項目（大学生用）とした。

3. 本調査

3.1. 方法

調査協力者：本調査における協力者は、関東地方の4つの4年制大学に通う大学生309名（男子171名、女子135名、不明3名）であった。平均年齢は19.76歳（ $SD=1.26$ ）であった。

手続き：2015年10月から11月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の構成：（1）ボランティア活動の経験と今後の活動意志：「ボランティア活動の経験と今後の活動」に関して、①「ボランティア活動の経験があり、今後も経験したい」②「ボランティア活動の経験はあるが、今後は活動に参加する意志はない」③「ボランティア活動の経験はないが、今後は活動に参加したい」④「ボランティア活動の経験はなく、今後も活動に参加する意志はない」のいずれかを回答してもらった。（2）ボランティア活動の参加成果志向：予備調査によって抽出された「ボランティア活動への参加成果志向」の47項目を用いて質問項目とした。調査協力者には「あなたがボランティア活動へ参加する場合に、あなたが得たいことをお聞きします。以下には、ボランティア活動から得られることが示されています。それらは、あなたの場合、どの程度当てはまりますか。」という教示を行った。（3）ボランティア活動参

加志向動機：研究1のボランティア活動参加志向動機の構成要因を使用した。

(4) ボランティア活動不参加志向動機：研究1のボランティア活動不参加志向動機の構成要因を使用した。上記(2)(3)(4)の回答形式は、「全く当てはまらない」(1点)～「良く当てはまる」(5点)の5件法である。

3.2. 結果

3.2.1. ボランティア活動の参加成果志向

因子分析結果：ボランティア参加成果志向 47 項目の平均値、標準偏差を算出した。天井効果の見られた1項目を以降の分析から除外して、次に残りの46項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。負荷量の絶対値が40未満の項目を除外しながら繰り返し因子分析を行ったところ、最終的に5因子34項目が得られた (Table4-16)。

第I因子は、「自分と違う考えを理解できるようになりたい」「人と接する力を身につけたい」「人に対して常に思いやる心を持ちたい」「自分自身が成長したい」など、自己の成長を含む項目が高い負荷量を示したので、「自己成長」($\alpha=.94$) 因子と命名した(15項目)。第II因子は、「充実感を感じたい」「やり遂げたという達成感を得たい」「皆で何かをする楽しさ・喜びを味わいたい」など、充実感・達成感等の精神的な高揚感を含む項目が高い負荷量を示したので、「精神的な高揚」($\alpha=.86$) 因子と命名した(6項目)。第III因子は、「就職や転職に経験を活かしたい」「就職や転職などに有利となる活動履歴を得たい」など、キャリア開発を含む項目が高い負荷量を示したので、「キャリア開発」($\alpha=.84$) と命名した(5項目)。第IV因子は、「ストレス解消・気分転換を図りたい」「自分自身の健康につなげたい」など、心身の健康や安寧を得たい項目であったので、「ヘルス安寧」($\alpha=.84$) と命名した(5項目)。第V因子は、「人から感謝されたい」「人から尊敬されたい」「家族、学校、友人などから評価されたい、認められたい」という他者からの評価承認を得たいという項目であったので、「評価承認」($\alpha=.84$) と命名した(3項目)。

Table4-16 参加成果志向尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	V
I 自己成長 ($\alpha = .94$)					
22 自分と違う考えを理解できるようになりたい	.908	-.135	-.064	.117	-.157
24 人と接する力を身につけたい	.803	-.018	-.122	.069	-.068
18 人に対して常に思いやる心を持ちたい	.757	-.022	-.105	-.041	.184
17 自分自身が成長したい	.712	.033	.107	-.164	.103
1 自発性・自主性を身につけたい	.708	.045	-.149	.002	.106
16 自分を客観視出来るようになりたい	.704	-.304	-.003	.294	.033
4 やる気や積極性を持って物事に取り組めるようになりたい	.654	.159	.031	-.035	-.030
5 人のために何かをする大切さを理解したい	.643	.209	-.025	-.215	.090
19 地域や社会の課題・実情に対する理解を深めたい	.632	.128	.124	.004	-.251
39 豊かな人間性を身につけたい	.592	.241	-.059	.032	.048
23 自分の生き方に関する考え方を変えたい	.544	-.154	.002	.261	.096
9 社会や人の役に立ちたい	.541	.260	.034	-.269	.166
15 自分の可能性を伸ばしたい	.513	.189	.158	.021	.019
11 新しい経験を通じて自信をつけたい	.488	.141	.186	-.110	.142
31 自分の人格形成につなげたい	.403	.101	.029	.281	.031
II 精神的高揚 ($\alpha = .86$)					
44 充実感を感じたい	-.052	.824	-.065	.103	.055
29 やり遂げたという達成感を得たい	.034	.688	.003	-.010	.105
28 皆で何かをする楽しさ・喜びを味わいたい	.120	.657	.040	.133	-.175
20 ボランティア活動自体を楽しみたい	-.012	.583	.032	.114	-.133
43 身体を動かしたい	.089	.537	-.181	.358	-.079
45 生きがい・やりがいを感じたい	.155	.468	-.007	.220	.086
III キャリア開発 ($\alpha = .84$)					
13 就職や転職に経験を活かしたい	-.038	.007	.894	-.063	.020
10 就職や転職などに有利となる活動履歴を得たい	-.283	.035	.727	-.079	.247
12 やりたい仕事をみつけたい	.226	-.256	.677	.178	-.066
30 将来就きたい職業の現場を理解したい	-.030	-.002	.567	.160	.049
47 その仕事に対する自分の適性を知りたい	.183	.212	.492	.097	-.209
IV ヘルス安寧 ($\alpha = .84$)					
32 ストレス解消・気分転換を図りたい	-.163	.148	-.015	.727	.092
41 自分自身の健康につなげたい	-.020	.296	.046	.539	-.004
37 時間を有効に使いたい	.081	.218	.024	.466	.094
36 自分の趣味、好きなことが出来る機会を得たい	.059	.056	.247	.417	.124
34 自分の居場所・活躍できる場を見つけたい	.086	.202	.124	.403	.119
V 評価承認 ($\alpha = .84$)					
35 人から感謝されたい	.086	-.106	.095	.040	.746
2 人から尊敬されたい	.102	-.039	.067	.004	.738
38 家族、学校、友人などから評価されたい、認められたい	-.107	-.010	-.042	.332	.736
因子間相関	I	II	III	IV	V
I	-	.70	.63	.55	.52
II		-	.52	.48	.55
III			-	.54	.53
IV				-	.33
V					-

参加経験・参加意志の差：ボランティア活動の参加経験の有無と参加意志の有無によってボランティア活動参加成果志向が異なるのかを検討するため、参加経験の有無（参加経験あり，参加経験なし）と参加意志の有無（参加志望，参加非志望）を独立変数，ボランティア活動参加成果志向の5因子を従属変数とした2要因の分散分析を行った（Table4-17）（Figure4-17～4-21）。参加経験の有無別では参加経験あり群には183名，参加経験なし群は113名が調査対象者に含まれ，参加意志の有無別では参加志望群には183名，参加非志望群には113名が含まれていた。分散分析の結果，参加成果志向5因子のいずれにも，自己成長（ $F(1, 292) = 73.020, p < .001$ ）・精神的高揚（ $F(1, 297) = 73.827, p < .001$ ）・キャリア開発（ $F(1, 296) = 16.255, p < .001$ ）・ヘルス安寧（ $F(1, 297) = 28.905, p < .001$ ）・評価承認（ $F(1, 299) = 25.096, p < .001$ ）と参加意志の主効果がみられ，志望群の方が非志望群よりも有意に得点が高かった。

Table4-17 経験有無別・志望有無別の参加成果志向に対する2要因分散分析の結果

	経験あり		経験なし		2要因分散分析		
	志望 (n=114)	非志望 (n=69)	志望 (n=69)	非志望 (n=44)	経験別 F値	志望別 F値	交互作用 F値
自己成長	3.82 (0.71)	3.13 (0.90)	4.01 (0.56)	3.06 (0.99)	0.344	73.020*** 志望>非志望	1.733
精神的高揚	3.79 (0.74)	2.97 (1.00)	3.81 (0.76)	2.84 (1.02)	0.278	73.827*** 志望>非志望	0.498
キャリア開発	3.40 (0.95)	3.04 (1.01)	3.69 (0.86)	3.10 (1.07)	2.181	16.255*** 志望>非志望	0.998
ヘルス安寧	3.22 (0.96)	2.67 (0.93)	3.40 (0.93)	2.70 (1.01)	0.800	28.905*** 志望>非志望	0.401
評価承認	3.18 (1.08)	2.59 (1.01)	3.41 (1.10)	2.67 (1.19)	1.297	25.096*** 志望>非志望	0.350

(注)カッコ内は標準偏差

*** $p < .001$

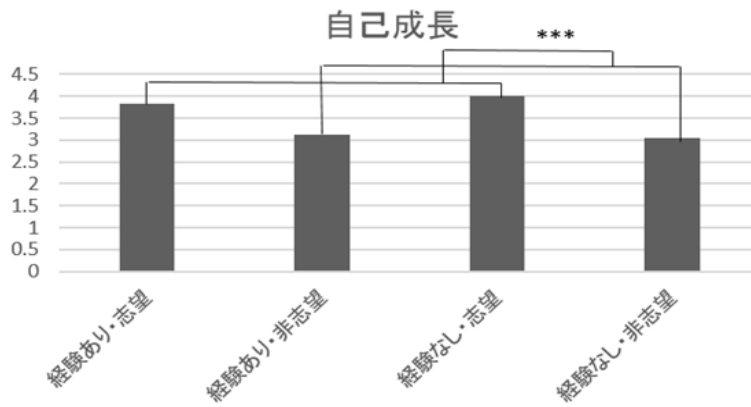


Figure4-17 参加経験・参加意志の差

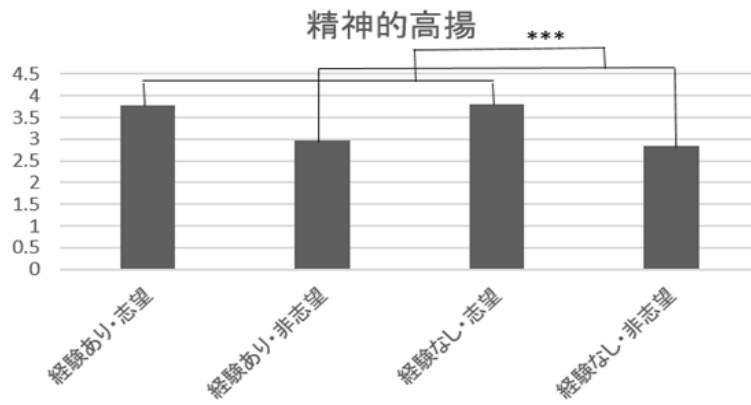


Figure4-18 参加経験・参加意志の差

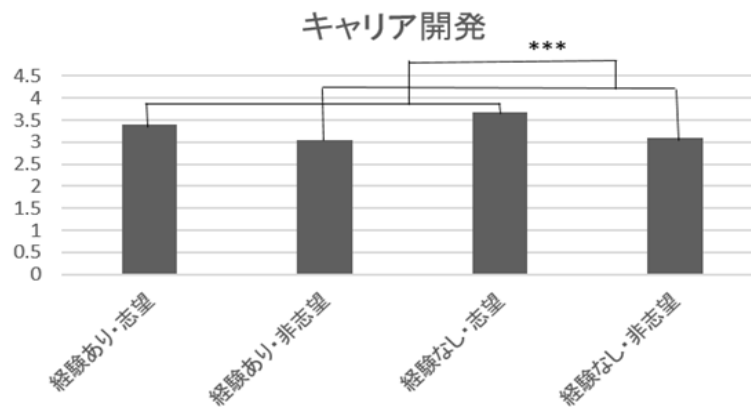


Figure4-19 参加経験・参加意志の差

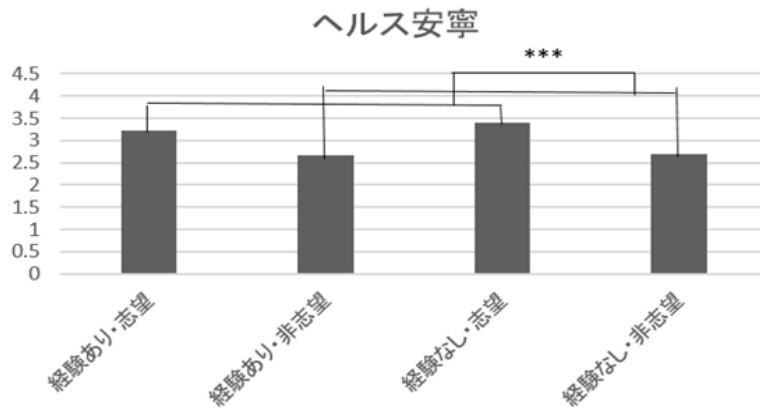


Figure4-20 参加経験・参加意志の差

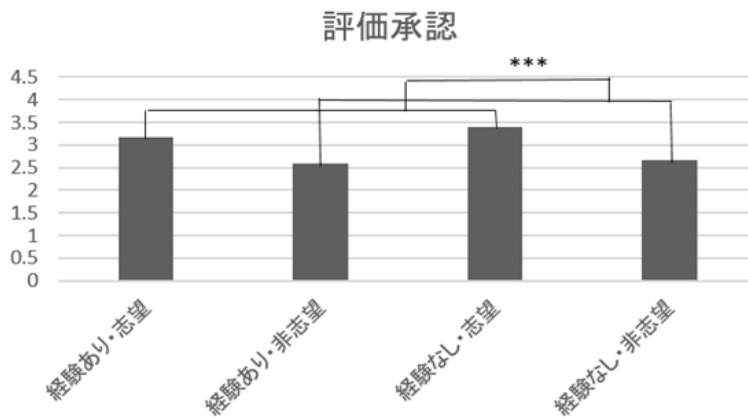


Figure4-21 参加経験・参加意志の差

3.2.2. 参加成果志向と参加志向動機・不参加志向動機との関係

次に、参加成果志向と参加志向動機・不参加志向動機との関連を検討した。参加成果志向の5因子を独立変数、参加志向動機の5因子と不参加志向動機の3因子を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table4-18）。その結果、自己成長は、参加志向動機の体験志向（ $\beta=.52$ ）、社会貢献志向（ $\beta=.27$ ）に正の影響を及ぼし、参加志向動機の他者同調志向（ $\beta=-.24$ ）、社会従属志向（ $\beta=-.30$ ）、不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta=-.42$ ）に負の影響を及ぼした。精神的高揚は、体験志向（ $\beta=.32$ ）、社会貢献志向（ $\beta=.36$ ）、興味対象志向（ $\beta=.47$ ）、他者同調志向（ $\beta=.27$ ）に正の影響を及ぼし、不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta=-.29$ ）、活動否定（ $\beta=-.30$ ）に負の影響を及ぼした。キャリア開発は、参加志向動機の世界従属志向（ $\beta=.17$ ）、不参加志向動機の利己優先志向（ $\beta=.27$ ）、活動否定（ $\beta=.27$ ）に正の影響を及ぼした。ヘルス安寧は、参加志向動機の世界従属志向（ $\beta=.20$ ）

に正の影響を及ぼした。評価承認は、社会貢献志向 ($\beta=.13$)、他者同調志向 ($\beta=.15$) と不参加志向動機の利己優先志向 ($\beta=.29$) に正の影響を及ぼした。重回帰分析に基づきパス図を作成した (Figure4-22)。なお、パス図には有意なパス ($p<.05$ 水準) のみを記した。

Table4-18 参加成果志向・参加志向動機・不参加志向動機の構成要因別の重回帰分析の結果

	参加志向動機					不参加志向動機		
	体 験	社会貢献	興味対象	他者同調	社会従属	利己優先	活動否定	情報不足
自己成長	.52 ***	.27 **	.06	-.24 **	-.30 **	-.42 ***	-.06	.05
精神的高揚	.32 ***	.36 ***	.47 ***	.27 **	.01	-.29 **	-.30 **	-.03
キャリア開発	.00	-.08	.09	.08	.17 *	.27 **	.27 **	.15
ヘルス安寧	-.11	.01	.01	.17	.20 *	.04	.04	-.11
評価承認	.06	.13 *	.06	.15 *	.11	.29 ***	-.05	.12
R^2	.56 ***	.39 ***	.37 ***	.17 ***	.08 ***	.24 ***	.09 ***	.04

(注)値は標準偏回帰係数

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

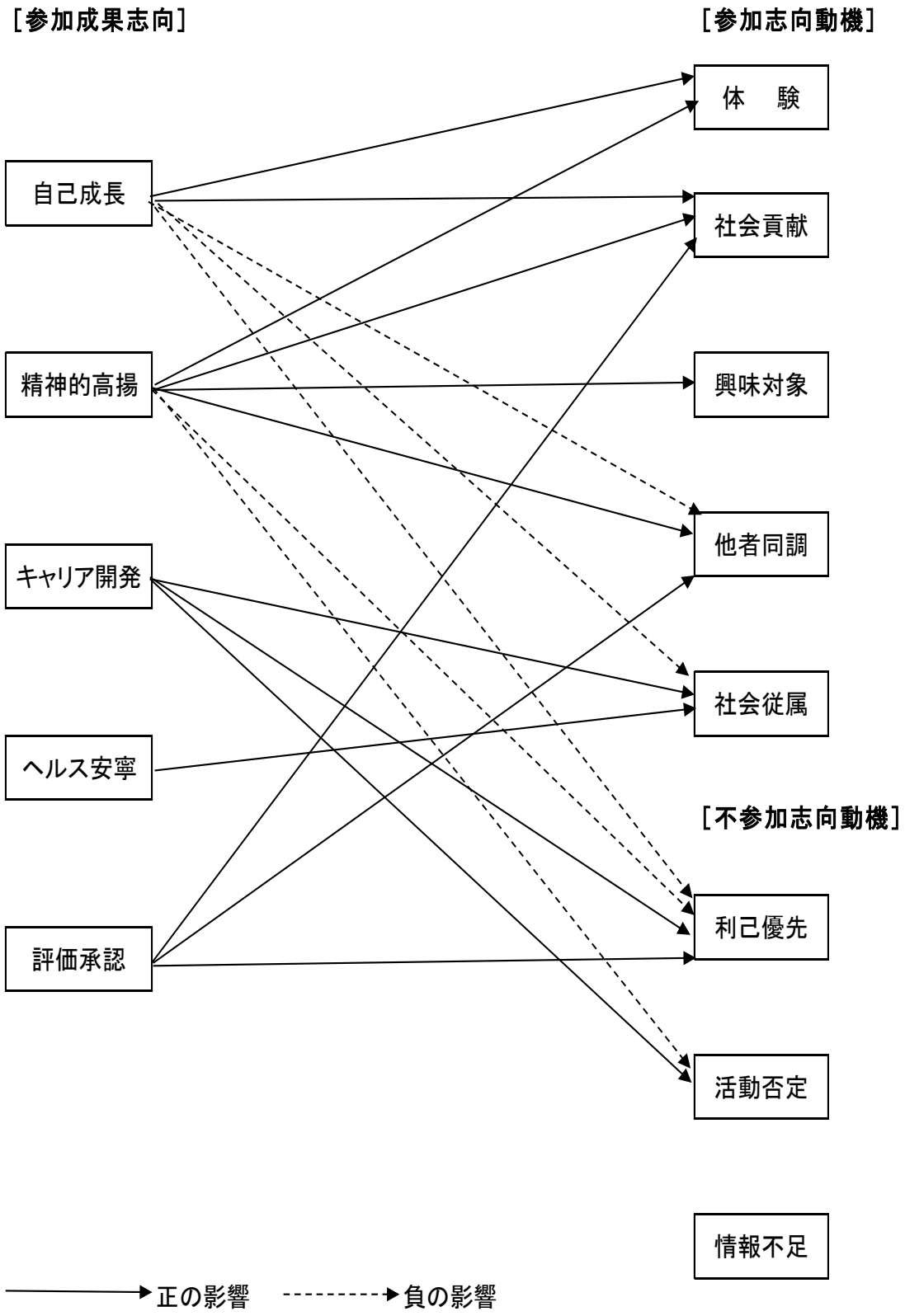


Figure4-22 参加成果志向・参加志向動機・不参加志向動機のパス図

3.3. 考察

本研究では、まず大学生を対象として、ボランティア活動を通じて得たい参加成果の期待の視点から参加成果志向の因子構成を明らかにした。具体的な因子構成としては、「自己成長」・「精神的高揚」・「キャリア開発」・「ヘルス安寧」・「評価承認」の5因子が得られた。平常時のボランティア活動経験から若者が得た参加成果（援助成果）として、例えば、妹尾（2008）が自分自身に成長や満足を与えられた「自己報酬感」、他者のためと自分の行動や認識が愛他的になった「愛他的精神の高揚」、人間関係が充実した「人間関係の広がり」の3因子を示した。また、八木ほか（2003）は、「愛他的精神の高揚」と「人間関係の広がり」の2因子を示した。山本（2011）は、中高校生を対象にした調査から「自分にとって役に立った」の1因子を示した。しかし、参加成果の期待である参加成果志向では、「自己成長」と「精神的高揚」は、妹尾（2008）の「自己報酬感」と山本（2011）の「自分にとって役に立った」とほぼ一致しているが、妹尾（2008）と八木ほか（2003）「愛他的精神の高揚」と「人間関係の広がり」は、参加成果志向では、独立した因子としては抽出されなかった。一方、「キャリア開発」・「ヘルス安寧」・「評価承認」が、新たな因子として抽出された。こうした先行研究との構造の差異は、先行研究は、妹尾・高木（2003）が中高年を対象とした調査データから作成された参加成果（援助成果）の測定尺度によって若者（大学生）を対象に調査したため、若者（大学生）の参加成果自体を必ずしも捉えていない可能性がある。しかしながら、本研究では、予備調査で大学生を対象に「ボランティア活動を通じて、あなたが得たいこと」について項目収集したうえで、質問項目を作成したことから、「キャリア開発」・「ヘルス安寧」・「評価承認」の因子が新たに抽出されたものと考えられる。また、「愛他的精神の高揚」と「人間関係の広がり」は独立した因子ではなく、これらと同様の個別項目は参加成果志向では、「自己成長」因子に含まれたことは、先行研究はボランティア活動後の参加成果の実感を測定しているが、本研究ではボランティア活動に向かう前の参加成果の期待を測定しているため、これらの項目も、参加成果への期待としての自己の能力開発と捉え、「自己成長」に包含されたものと考えられる。このように、新たな視点とアプローチによって、大学生の率直なボランティア活動から得たい参加成果志向を見出せたことは意義あるものと考えられる。なお、「自己成長」・「キャリア開発」といったボランティア活動が有する教育的・実利的な

参加成果を大学生も期待していること、そして、心理的欲求からの「精神的
高揚」・「ヘルス安寧」・「評価承認」といった参加成果への期待も抱いている
ことも明らかとなった。

ボランティア活動への参加経験の有無と参加意志の有無の差をみると、参加
志望者は、非志望者よりも参加経験の有無に拘わらず活動参加から自己成長・
精神的な高揚・キャリア開発・ヘルス安寧・評価承認を得たいと期待しているこ
とが明らかとなった。このことは、ボランティア活動に対して参加志望か非参
加志望かに、参加成果の期待が関わることを示されたと言える。

次に、大学生の参加成果の期待が参加志向動機と不参加志向動機の各構成要
因にどのように影響を与えるのかについて検討した。まず、自己成長が内発的
な参加志向動機の体験志向・社会貢献志向に正の影響を及ぼし、外発的な他者
同調志向・社会従属志向とネガティブな不参加志向動機の利己優先志向に負の
影響を及ぼすことが示された。このことは、災害時のボランティア経験（高
木・玉木 1996）や平常時のボランティア経験（佐々木 2003）から若者が得た
参加成果でも挙げられていることに通じる。自己成長は、本来、自ら能動的に
目指すものであることから、参加志向動機の内発的な体験志向と社会貢献志向
を高めることは首肯できる。また、例え外発的であろうとも参加機会を得られ
ることによって、ボランティア活動が自己成長へと結果的に繋がるのであれば、
その期待に応えられることから参加志向動機の外発的な他者同調志向・社会従
属志向が低減するものと考えられる。自己成長は正に自己の利益になることで
あるから「ボランティア活動は自分の利益がない」「他者よりも自分を優先し
たい」という理由がなくなるために、不参加志向動機の利己優先志向が低減す
るものと言える。そして、これらのことから、アイデンティティ確立が非常に
困難となっている今日、ボランティア活動は自分自身を成長させ、自分をつく
るための大きな要素となっている（前林 2009）ため、大学生の参加志向動機
と不参加志向動機に対しては、自己成長への期待が大きな要因となることが示
唆された。

精神的な高揚は、参加志向動機の体験志向・社会的貢献志向・興味対象志向・
他者同調志向に正の影響を及ぼし、不参加志向動機の利己優先志向・活動否定
に負の影響を及ぼすことが示された。このことは、妻鹿（2006）が MASLOW
（1954）の人間の基本的欲求は、低次から高次へ順に構成されるとした欲求段
階説からボランティア活動をおこす背景にある欲求として、高次の欲求である

自己実現欲求が支配的であることは、生きがいややりがいを求めてボランティア活動をする人のことを考えれば容易に想像できると述べたことから裏付けられる。すなわち、「充実感を感じたい」「やり遂げたという達成感を得たい」「皆で何かをする楽しさ・喜びを味わいたい」という精神的な高揚への期待は、高次の欲求である自己実現欲求に通じるものであり、ボランティア活動への参加志向動機・不参加志向動機にも結びつくと考えられる。したがって、ボランティア活動参加に対して能動的で内発的な体験志向・社会貢献志向・興味対象志向が高まることは、妻鹿（2006）が述べたとおり容易に想像できる。また、例え「友人から誘われたから」「友達もみんなも参加するから」といった必ずしも能動的でない外発的な他者同調志向であっても、ボランティア活動が自己実現欲求に応えられる可能性は高く、そのために他者同調志向も高まるものと考えられる。また、自己実現欲求は人間の基本的欲求のひとつであり、自己の内面の問題に他ならず、ボランティア活動が自己実現欲求に応えられると思えば、「ボランティア活動は自分の利益がない」「他者よりも自分を優先したい」という利己優先志向や「ただの自己満足に感じるから」という活動否定の理由は大方なくなるため、これらの不参加志向動機が低減するものと考えられる。

キャリア開発は、外発的な参加志向動機の社会従属志向とネガティブな不参加志向動機の利己優先志向と活動否定に正の影響を及ぼすことが示された。進路の決定段階にある大学生にとって、キャリア開発には、ボランティア活動を通じて経験する多くの事柄は、自身の将来に程度の差こそあれ重要な意味を帯びてくる（坂野ほか 2002）というポジティブな教育的側面がある一方、社会的な枠組みからも避けられず、近い将来の進路を意識せざるを得ないという現実的側面もあると考えられる。このことから、教育過程でのボランティア活動には、キャリア教育という性格もあり、その教育的意義を学生も認識・受容していることが、「学校で勧められたから」「学校の授業の一環だから」という参加志向動機の社会従属志向を高めるものと思われる。また、キャリア開発志向が高い場合は、「ボランティア内容が何でもよい」というわけにはいかず、自分のキャリア計画に合ったボランティア活動を精選する必要があるため、不参加志向動機が高くなる可能性が考えられる。また、研究2では、大学生が抱くボランティア活動イメージの中で、「強制的なイメージがある」「無責任である」など、強制的なものとして当事者意識から離れたイメージの「強制無責

任」因子が不参加志向動機の「利己優先志向」「活動否定」を高めることを明らかにしたが、参加成果志向のキャリア開発に対しても、教育課程でのキャリア教育と結びつき、ネガティブな強制イメージを想起して、不参加志向動機の「利己優先志向」「活動否定」を高めるのではないかと推察される。

ヘルス安寧は、外発的な参加志向動機の世界従属志向に正の影響を及ぼすことが示された。日本学生支援機構（2006）の調査では、学生がボランティア開始時の大きな障害としての「大学の時間が忙しい」「情報が不足している」が挙げられているが、例えば、ボランティア活動が「学校の授業の一環」「学校で勧められた」ことで参加するのであれば、その障害はかなり取り除かれる可能性が高く、学生がボランティア活動に求める参加成果としてのヘルス安寧への期待にも応えられるものと考えられる。このことから、ヘルス安寧が「学校で勧められたから」「学校の授業の一環だから」などという参加志向動機の世界従属志向を高めるものと推察される。

評価承認は、参加志向動機の世界貢献志向・他者同調志向と不参加志向動機の利己優先に正の影響を及ぼすことが示された。評価承認は、「人から感謝されたい」「人から尊敬されたい」などの期待であるが、ボランティア活動は、自発的な社会貢献活動に他ならず、「人から感謝され、尊敬される」ものであり、参加志向動機の「人のため・社会のために」という社会貢献志向を促すことは妥当な結果といえる。また、「家庭、学校、友人などから評価されたい、認められたい」という正に他者からの評価承認への期待が、参加志向動機の「友人に誘われたから」「友達もみんな参加するから」「周りにすすめられたから」という外発的な他者同調志向を高めることは、両者ともに取り巻く他者との関係性がポイントとなることから、妥当な結果と言える。一方、評価承認が不参加志向動機の利己優先志向を高めることは、ボランティア活動などの向社会的行動は、その行動によって賞賛や承認を得ようといった目標が優先された場合、利己的動機づけに基づいた行動判断がされる（伊藤 2004）ことから考えると、ボランティア活動への参加を通じて他者の評価承認を得たいということは、利己的な参加成果の期待が優先されることに他ならず、不参加志向動機の利己優先志向とは、ボランティア活動に向き合う方向性が一致する。そして、MASLOW（1954）の欲求段階説では、自我欲求は、地位や承認・評価など他人からの尊敬への欲求などであるが（上淵 2012）、評価承認は自我欲求に当てはまる。評価承認への期待が、参加志向動機の内発的な社会貢献志向と外発的な

他者同調志向を促すことは、ボランティア活動の機能として、大学生において基本的欲求の自我要求を充足させる手段のひとつとしての役割を担っていることが示唆された。

以上のことから、大学生のボランティア活動参加に対して、参加成果志向は、参加志向動機・不参加志向動機を規定する密接な要因であることが明らかとなった。特に、自己成長・精神的 high といった参加成果志向は、内発的な参加志向動機を高めることが示された。妻鹿（2006）は、ボランティア活動をスタートさせるときには、自己実現や達成感という欲求を満たせるかもしれないと考えて活動に取り組むことを指摘していることから、これらの満たせるかもしれない欲求は、参加成果の期待に他ならず、その高まりがボランティア活動への参加志向動機の促進や不参加志向動機の低減に繋がるものと考えられる。

そして、環境ボランティアでは、安藤・広瀬（1999）は、環境運動自体の望ましさに関わる要因よりも、個人として得られるものに関わる要因の方が活動継続意図・積極的活動意図との関連が強かったことを示し、また、ボランティア体験学習では、新垣（2009）は、「興味との合致度」「体験満足度」などが高いほどボランティア意欲が向上しており、ボランティア学習の効果が高いことを示したが、大学生のボランティア活動への参加が定着せず伸び悩んでいる理由のひとつとして、参加成果の期待と実感とのギャップが生じている可能性が考えられる。したがって、ボランティア活動の推進やボランティア教育の効果を高めるには、参加成果の期待と実際の活動内容とのミスマッチを防ぐ必要があると考えられる。そのためには、大学生がボランティア活動を通じて得たい参加成果への期待を的確に捉え、その期待に対して適切に応える方策をとる必要があることが示唆された。

本研究では、次世代を担う大学生を対象として、先行研究で解明されてこなかった参加成果志向の構成要因を明らかにできたこと、参加成果志向がボランティア行動への参加行動や不参加行動を引き起こす参加志向動機と不参加志向動機にどのように影響を与えるのかということを含括的且つ構造的に明らかに出来たことは、今後の大学生のボランティア活動への参加促進や参加定着の観点、教育過程でのボランティア体験学習のあり方を検討するうえで意義はあったと考える。

第5章 ボランティア活動への参加行動・不参加行動に及ぼす環境要因・相互要因の検討

第1節 身近な参加経験者の有無が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究5]

1. 目的

本研究では、取り巻く環境要因の差、特に身近なボランティア経験者の存在に着目して、参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討することによって、大学生のボランティア活動の推進のための知見を得ることを目的とした。

2. 方法

調査協力者：本調査における協力者は、首都圏の4つの4年制大学に通う大学生542名（男子256名，女子286名）であった。平均年齢は19.65歳（ $SD=1.32$ ）であった。

手続き：2012年5月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の構成：（1）身近なボランティア経験者の有無：身近な人（父親・母親・兄弟姉妹・友人・恋人・その他）でのボランティア経験者の有無について、「いる」「いない」の2件法で回答（複数回答可）してもらった。（2）ボランティア活動参加志向動機：研究1のボランティア活動参加志向動機の構成要因を使用した。（3）ボランティア活動不参加志向動機：研究1のボランティア活動不参加志向動機の構成要因を使用した。上記（2）（3）の回答形式は、「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法である。

3. 結果

参加志向動機

まず、参加志向動機に関して、「身近な経験者あり群」と「身近な経験者な

し群」との差の検討を行うために、参加志向動機の下位尺度得点について t 検定を行った (Table5-1)。「体験志向」 ($t(450) = 4.07, p < .001$)、「社会貢献志向」 ($t(458) = 3.60, p < .001$)、「興味対象志向」 ($t(414) = 4.33, p < .001$)、「他者同調志向」 ($t(458) = 2.80, p < .01$) については、「身近な経験者なし群」よりも「身近な経験者あり群」の方が有意に高い得点を示した。しかし、「社会従属志向」 ($t(351.53) = -0.83, n.s.$) については、身近な経験者の有無での有意な得点差はみられなかった。

Table5-1 身近な経験者有無別の t 検定結果

	身近な経験者あり			身近な経験者なし			t 値
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	
体験志向	299	3.66	0.81	153	3.33	0.85	4.07 ***
社会貢献志向	306	3.26	0.83	154	2.97	0.77	3.60 ***
興味対象志向	278	3.56	0.91	138	3.15	0.90	4.33 ***
他者動向志向	304	3.22	0.86	156	2.98	0.92	2.80 **
社会従属志向	302	3.27	1.01	155	3.34	0.87	-0.83

** $p < .01$, *** $p < .001$

不参加志向動機

次に、不参加志向動機に関して、「身近な経験者あり群」と「身近な経験者なし群」との差の検討を行うために、不参加志向動機の下位尺度得点について t 検定を行った (Table5-2)。「利己優先志向」 ($t(370.74) = -2.60, p < .05$) は「身近な経験者あり群」よりも「身近な経験者なし群」の方が有意に高い得点を示した。しかし、「活動否定」 ($t(376.50) = -1.97, n.s.$) と「情報不足」 ($t(399.51) = -1.76, n.s.$) は、身近なボランティア経験者の有無での得点差は有意ではなかった。

Table5-2 身近な経験者有無別の t 検定結果

	身近な経験者あり			身近な経験者なし			t 値
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	
利己優先志向	313	2.81	1.01	171	3.05	0.94	-2.60 *
活動否定	319	2.85	1.03	172	3.03	0.94	-1.97
情報不足	319	3.14	1.05	170	3.30	0.88	-1.76

* $p < .05$

4. 考察

本研究では、「参加志向動機」と「不参加志向動機」に関して、「身近なボランティア経験者」の有無の差を明らかにした。まず、参加志向動機では、「体験志向」・「社会貢献志向」・「興味対象志向」と「他者同調志向」については、「身近な経験者なし群」よりも「身近な経験者あり群」の方が有意に高い得点を示した。また、不参加志向動機では、「利己優先志向」については「身近な経験者あり群」よりも「身近な経験者なし群」の方が有意に高い得点を示した。即ち、大学生にとって「身近なボランティア経験者」の存在は、参加志向動機の促進要因であり、不参加志向動機の抑制要因のひとつの要因であることが示唆された。

「身近なボランティア経験者」の存在は、ボランティア活動の実態を把握できることや様々な情報を得やすいこと、また、ボランティアの参加成果を間近で実感できることから参加志向動機が触発されるためと考えられる。このことは、文部科学省（2004）の「ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書」において、ボランティア活動の促進要因として、23.9%の人が「職場や身近な友人にボランティア活動を行っている人がいる」、14.8%の人が「家族や親戚にボランティア活動を行っている人がいる」ことを挙げている。また、日本学生支援機構（2006）の調査報告において、大学生のボランティア活動開始時の情報源として、「友人から聞く」（36.8%）・「家族・親戚から聞く」（11.2%）となっていることから裏付けられる。また、人は、自分の考えや行動を決定するにあたり、家族や友人など自分の、身近にいる人に相談にのってもらえることがあるが、近年の研究では身近な人の取る行動パターン自体からも影響を受けていると言われ（内閣府 2008）。例えば、安藤・広瀬（1999）は、環境ボランティアの研究から、身近に環境問題に関心の

ある人が多いほど、環境運動を積極的に行う意図が高いこと、友人が環境問題に関心がある場合には情報入手・情報提供や環境イベントに誘うなど、相互の働き掛けが多かったことを示していることに通じる。

内発的な参加志向動機に関しては、例えば、三谷（2016）は、子どもの頃に他者を援助する大人が身近（近所の人）がいた人は、向社会的態度が身につく、現在において共感性が高い傾向にあり、そのためボランティア活動に参加しやすくなることを明らかにしているが、現在、「身近なボランティア経験者」がいる場合でも、その存在が共感性の形成・醸成に影響を及ぼしているものと考えられる。また、外発的な参加志向動機の他者同調志向に関しては、「身近なボランティア経験者」からボランティア活動に勧誘され参加機会も自ずと多くなると推測されることから「身近なボランティア経験者」の有無の差が現れたものと考えられる。そして、不参加志向動機の利己優先志向に関しては、「身近なボランティア経験者」は、少なくとも「利己優先志向」という不参加志向動機よりも、例えば、「体験志向」・「社会貢献志向」など何らかの参加志向動機が上回った結果としてのボランティア参加行動であると考えられるが、「身近なボランティア経験者」がいない人は、そんな「身近なボランティア経験者」の参加志向動機から触発される機会に乏しいためと推察される。

これらのことから、身近な経験者の存在が、参加志向動機の醸成に繋がり、ネガティブな不参加志向動機の形成にはマイナスとなることが確かめられたことから、身近な経験者の存在もボランティア活動への参加行動・不参加行動に及ぼす重要な要因であることが明らかになったといえる。ボランティア活動の推進の観点からは、例えば、身近な人からの積極的な参加への働き掛けや体験談などの発信の機会を増やしたり、家族ぐるみでの参加や身近な人と一緒に参加できる形態などを工夫することも、もっと検討しても良いと考えられる。

第2節 援助・被援助行動の経験が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 [研究6]

1. 目的

本研究では、ボランティア行動は援助行動の一形態であることから、日常の他人への援助行動経験と他人からの被援助行動経験に着目して、参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を探り、大学生のボランティア活動の推進のための知見を得ることを目的とした。

2. 方法

調査協力者：本調査における協力者は、首都圏の4つの4年制大学に通う大学生542名（男子256名，女子286名）であった。平均年齢は19.65歳（ $SD=1.32$ ）であった。

手続き：2012年5月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の構成：（1）援助行動経験：菊池（1988）が作成した向社会的行動尺度（大学生版）の20項目のうち被援助行動経験との整合性の観点から17項目を使用した。本尺度は大学生が援助行動や親切行動など、向社会的行動に関してどの程度行っているか、その行動経験を測定する尺度である。回答の形式は、「行った経験がある」と「行った経験なし」の2件法である。（2）被援助行動経験：上記（1）の援助行動経験と同一の17項目を使用した。回答形式は、「してもらったことがない」（1点）～「何回もしてもらったことがある」（4点）の4件法である。（3）ボランティア活動参加志向動機：研究1のボランティア活動参加志向動機の構成要因を使用した。（4）ボランティア活動不参加志向動機：研究1のボランティア活動不参加志向動機の構成要因を使用した。上記（3）（4）の回答の形式は、「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法である。

3. 結果

援助行動経験

まず、援助行動経験と参加志向動機・不参加志向動機との関連を検討するため、援助行動経験の合計を独立変数、参加志向動機の5因子および不参加志向動機の3因子を従属変数とした単回帰分析（強制投入法）を行った（Table5-3）。その結果、「援助行動経験」は、参加志向動機の「体験志向」（ $\beta=.42$ ）、「社会貢献志向」（ $\beta=.41$ ）、「興味対象志向」（ $\beta=.43$ ）、「他者同調志向」（ $\beta=.31$ ）、「社会従属志向」（ $\beta=.11$ ）のいずれにも正の影響を及ぼし、不参加志向動機の「利己優先志向」（ $\beta=-.16$ ）に負の影響を及ぼした。

Table5-3 援助行動経験・参加志向動機・不参加志向動機の構成要因別の単回帰分析結果

	参加志向動機					不参加志向動機		
	体 験	社会貢献	興味対象	他者同調	社会従属	利己優先	活動否定	情報不足
援助行動経験	.42 ***	.41 ***	.43 ***	.31 ***	.11 *	-.16 **	-.07	.01
R^2	.17 ***	.17 ***	.18 ***	.09 ***	.01 *	.03 **	.00	.00

(注)値は標準化偏回帰係数

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

被援助行動経験

次に、被援助行動経験と参加志向動機・不参加志向動機との関連を検討するため、被援助行動経験を独立変数、参加志向動機の5因子および不参加志向動機の3因子を従属変数とした単回帰分析（強制投入法）を行った（Table5-4）。その結果、「被援助行動経験」は、参加志向動機の「体験志向」（ $\beta=.37$ ）、「社会貢献志向」（ $\beta=.37$ ）、「興味対象志向」（ $\beta=.34$ ）、「他者同調志向」（ $\beta=.29$ ）、「社会従属志向」（ $\beta=.17$ ）のいずれにも正の影響を及ぼし、不参加志向動機のいずれにも有意な影響はなかった。

Table5-4 被援助行動経験・参加志向動機・不参加志向動機の構成要因別の単回帰分析結果

	参加志向動機					不参加志向動機		
	体 験	社会貢献	興味対象	他者同調	社会従属	利己優先	活動否定	情報不足
被援助行動経験	.37 ***	.37 ***	.34 ***	.29 ***	.17 ***	-.06	-.01	.06
R^2	.14 ***	.14 ***	.12 ***	.08 ***	.03 ***	.00	.00	.00

(注)値は標準化偏回帰係数

*** $p<.001$

単回帰分析の結果に基づきパス図を作成した (Figure5-1) . なお, パス図には有意なパス ($p<.05$ 水準) のみを記した.

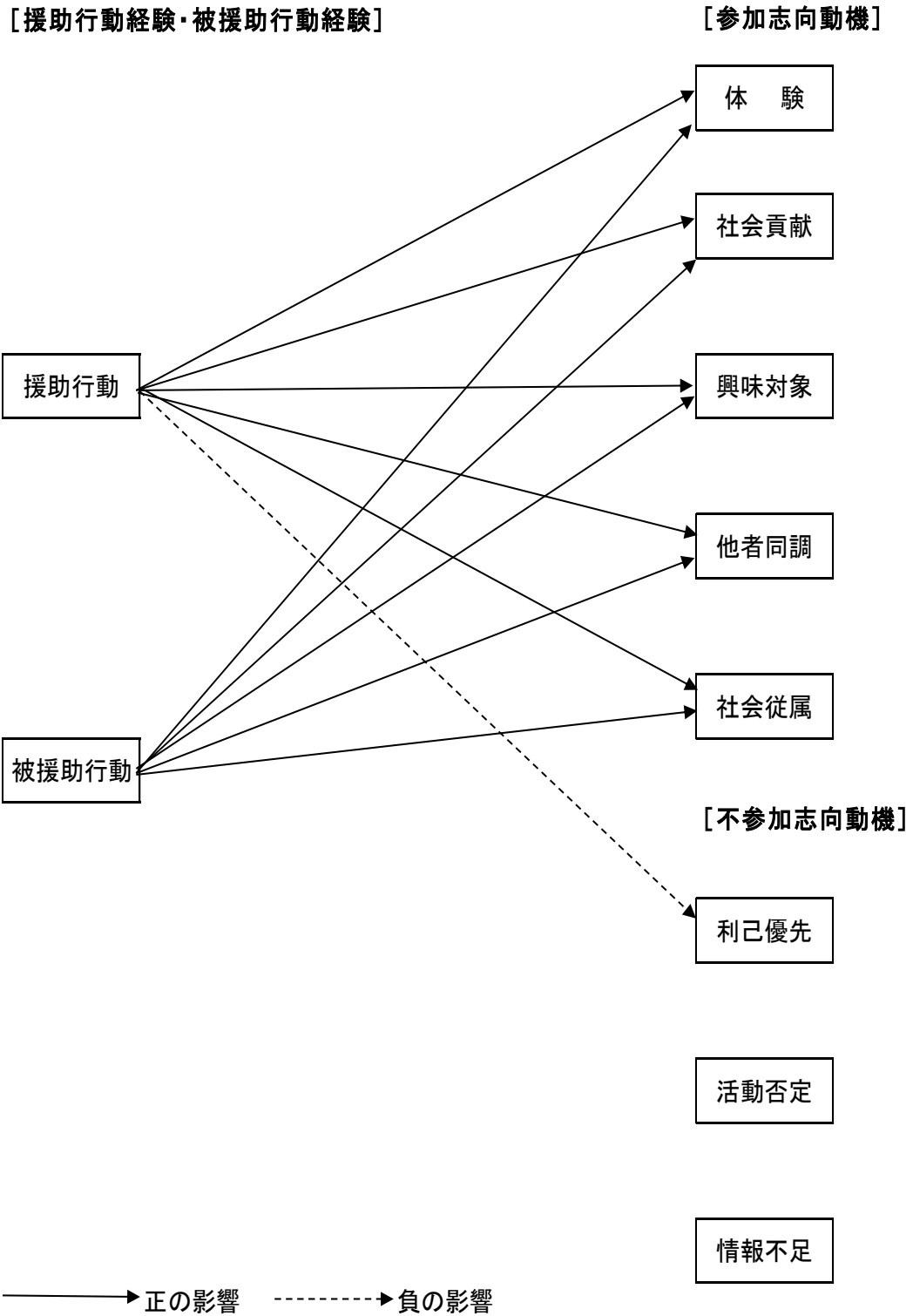


Figure5-1 援助行動経験及び被援助行動経験・参加志向動機・不参加志向動機のパス図

4. 考察

本研究では、まず、援助行動経験が参加志向動機と不参加志向動機の各構成要因にどのように影響を与えるのかを検討した。その結果、援助行動経験は、参加志向動機のいずれの構成要因にも正の影響を及ぼすことが示された。このことから、日常の援助行動の経験が多いほど、ボランティア活動への参加志向動機を高めることが示唆された。即ち、松浦（2006）が援助行動の研究において、一度援助行動を経験すると次回も援助行動を起こしやすいという援助行動の循環を明らかにしているが、本研究によって援助行動の一形態であるボランティア行動においても、援助行動と同様の循環となることが改めて明らかとなった。

次に、一過性の被援助行動経験が参加志向動機と不参加志向動機の各構成要因にどのように影響を与えるのかを検討した。その結果、一過性の被援助行動経験は、参加志向動機のいずれの構成要因にも正の影響を及ぼすことが示された。このことから、日常の一過性の援助行動の被経験が多いほど、援助行動経験と同様にボランティア活動への参加志向動機を高めることが示唆された。本研究の結果は、文部科学省（2004）の「ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書」において、ボランティア活動の促進要因として、36.6%の人が「自分が外で困っているとき、見知らぬ人に助けられたことがある」ことを挙げていることを裏付けるものとなった。

これらのことは、一過性の援助・被援助行動の経験が多いとその経験によって思いやり、共感性、感謝、喜び、返礼などの感情が醸成され、ボランティア行動への参加志向動機にプラスに働くためと推察される。本研究によって、援助者の立場での日常の援助行動経験と、被援助者の立場での日常の被援助行動経験は、他者との間において自己強化的に循環する援助行動の一環として（妹尾 2005）、ボランティア行動への参加志向動機を促すことを明らかにできたことは、ボランティア行動の生起・継続を検討するうえで意義があったと考える。

第6章 心理的欲求・参加経験の質がボランティア行動に及ぼす影響の検討

第1節 心理的欲求と参加志向動機・不参加志向動機・参加成果志向との関係 [研究7]

1. 目的

本研究では、大学生の基本的な心理的欲求と参加志向動機・不参加志向動機・参加成果志向との関係を検討することを目的とした。

2. 方法

調査協力者：本調査における協力者は、関東地方の4つの4年制大学に通う大学生309名（男子171名，女子135名，不明3名）平均年齢は19.76歳（ $SD=1.26$ ）であった。

手続き：2015年10月から11月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の構成：（1）ボランティア活動の経験と今後の活動意志：「ボランティア活動の経験と今後の活動」に関して、①「ボランティア活動の経験があり、今後も経験したい」②「ボランティア活動の経験はあるが、今後は活動に参加する意志はない」③「ボランティア活動の経験はないが、今後は活動に参加したい」④「ボランティア活動の経験はなく、今後も活動に参加する意志はない」のいずれかを回答してもらった。（2）心理的欲求尺度：大久保・加藤（2005）が作成した青年期の心理的欲求尺度の構成要因を使用した。これは、自己決定理論（DECI & RYAN 2000, RYAN & DECI 2000）に基づいて個人が心理的欲求をどの程度もっているかを測定するものである。「関係性への欲求」（9項目）・「自律性への欲求」（5項目）・コンピテンスへの欲求（6項目）の3因子 20項目で構成されている。（3）ボランティア活動参加志向動機：研究1のボランティア活動参加志向動機の構成要因を使用した。（4）ボランティア活動不参加志向動機：研究1のボランティア活動不参加志向動機の構成要因を使用した。（5）参加成果志向：研究4のボランティア活動の参加成果

志向の構成要因を使用した。上記（２）（３）（４）（５）の回答形式は、「全く当てはまらない」（１点）～「良く当てはまる」（５点）の５件法である。

3. 結果

参加経験・参加意志の差

ボランティア活動の参加経験の有無と参加意志の有無によって心理的欲求が異なるのかを検討するため、参加経験の有無（参加経験あり、参加経験なし）と参加意志の有無（参加志望、参加非志望）を独立変数、心理的欲求の３因子を従属変数とした２要因の分散分析を行った（Table6-1）（Figure6-1～6-3）。参加経験の有無別では参加経験あり群には181名、参加経験なし群は113名が調査対象者に含まれ、参加意志の有無別では参加志望群には181名、参加非志望群には113名が含まれていた。分散分析の結果、心理的欲求３因子のいずれにも、関係性への欲求（ $F(1, 289) = 8.195, p < .01$ ）・自律性への欲求（ $F(1, 290) = 8.167, p < .01$ ）・コンピテンスへの欲求（ $F(1, 288) = 9.411, p < .01$ ）と参加意志の主効果がみられ、志望群の方が非志望群よりも有意に得点が高かった。

Table6-1 経験有無別・志望有無別の心理的欲求に対する2要因分散分析の結果

	経験あり		経験なし		2要因分散分析		
	志望 (n=113)	非志望 (n=68)	志望 (n=68)	非志望 (n=45)	経験別 F値	志望別 F値	交互作用 F値
関係性への欲求	3.90 (0.66)	3.46 (0.72)	3.82 (0.84)	3.72 (0.87)	0.999	8.195** 志望>非志望	3.261
自律性への欲求	3.98 (0.69)	3.87 (0.73)	4.15 (0.68)	3.76 (0.84)	0.074	8.167** 志望>非志望	2.475
コンピテンスへの欲求	3.95 (0.70)	3.60 (0.82)	3.99 (0.73)	3.77 (0.84)	1.108	9.411** 志望>非志望	0.503

(注)カッコ内は標準偏差

** $p < .01$

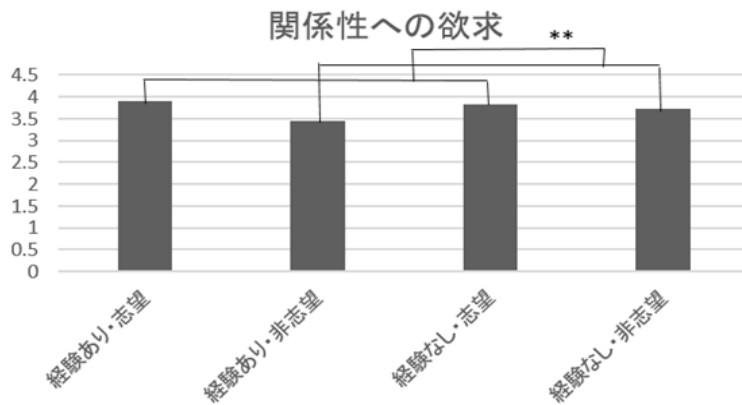


Figure6-1 参加経験・参加意志の差

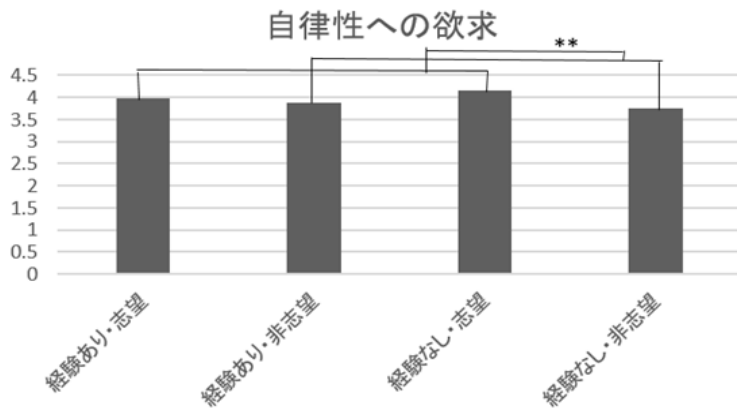


Figure6-2 参加経験・参加意志の差

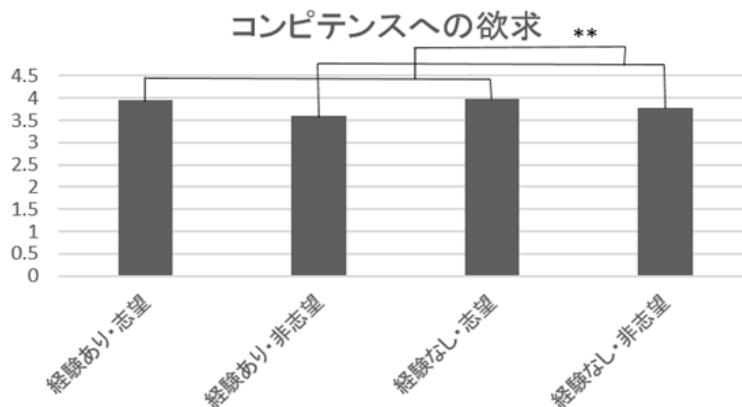


Figure6-3 参加経験・参加意志の差

心理的欲求と参加志向動機・不参加志向動機との関係

次に、心理的欲求と参加志向動機・不参加志向動機との関連を検討した。心理的欲求の3因子を独立変数、参加志向動機の5因子と不参加志向動機の3因子を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table6-2）。その結

果，関係性への欲求は，参加志向動機の体験志向（ $\beta=.39$ ），社会貢献志向（ $\beta=.36$ ），興味対象志向（ $\beta=.34$ ），他者同調志向（ $\beta=.32$ ）に正の影響を及ぼした．自律性への欲求は，社会貢献志向（ $\beta=-.20$ ），他者同調志向（ $\beta=-.24$ ）に負の影響を及ぼした．コンピテンスへの欲求は，参加志向動機および不参加志向動機のいずれの因子にも有意な影響はみられなかった．重回帰分析に基づきパス図を作成した（Figure 6-4）．なお，パス図には有意なパス（ $p<.05$ 水準）のみを記した．

Table6-2 心理的欲求・参加志向動機・不参加志向動機の構成要因別の重回帰分析結果

	参加志向動機					不参加志向動機		
	体 験	社会貢献	興味対象	他者同調	社会従属	利己優先	活動否定	情報不足
関係性への欲求	.39 ***	.36 ***	.34 ***	.32 ***	.08	-.05	.09	.17
自律性への欲求	-.11	-.20 **	-.09	-.24 **	-.15	-.11	-.11	-.10
コンピテンスへの欲求	.13	.09	-.00	-.07	-.04	.07	-.05	.12
R^2	.19 ***	.13 ***	.09 ***	.07 ***	.02	.01	.01	.05 **

(注) 値は標準偏回帰係数

** $p<.01$ *** $p<.001$

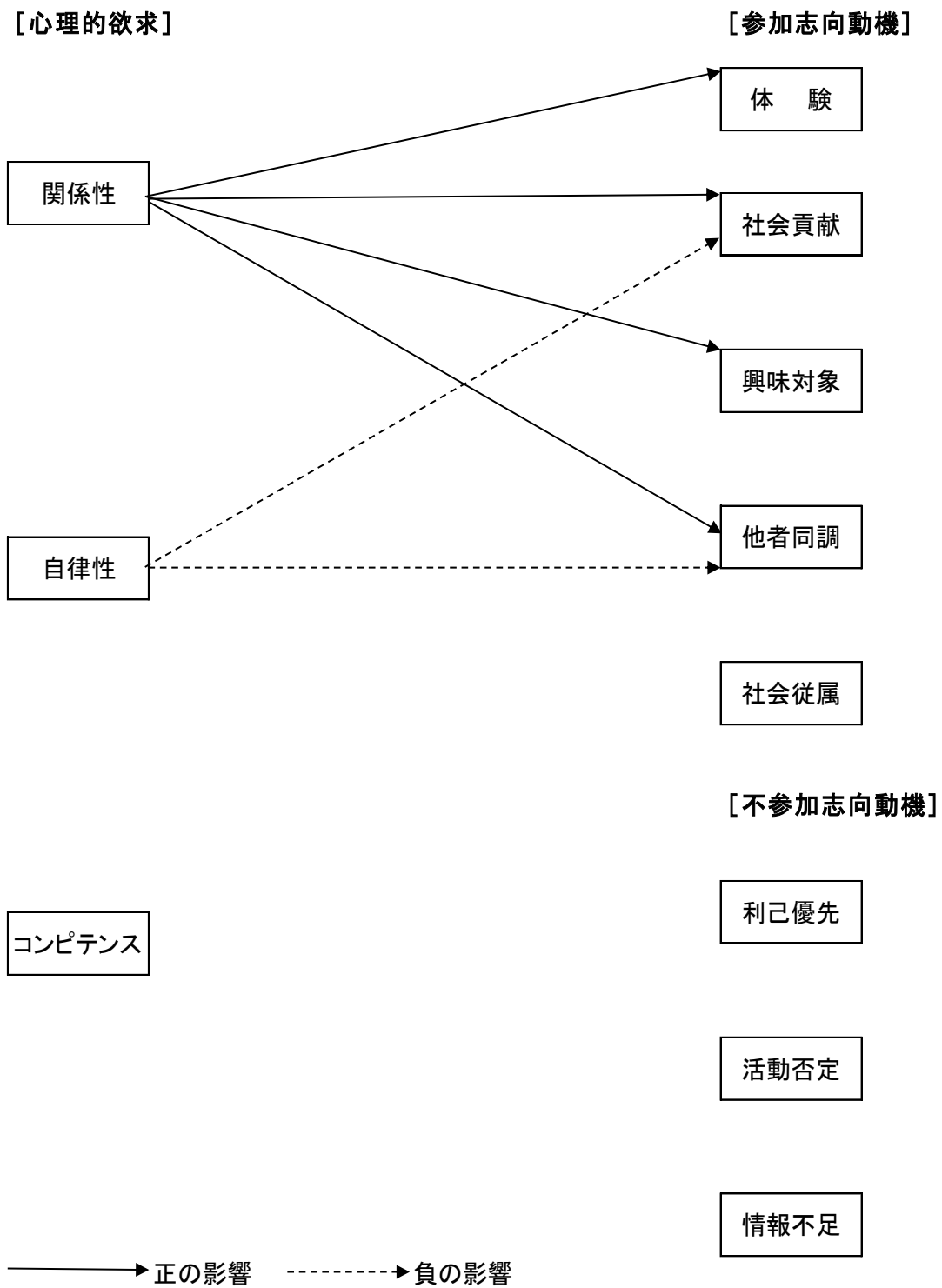


Figure6-4 心理的欲求・参加志向動機・不参加志向動機のパス図

心理的欲求と参加成果志向との関係

さらに、心理的欲求と参加成果志向との関連を検討した。心理的欲求の3因子を独立変数、参加成果志向の5因子を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table6-3）。その結果、関係性への欲求は、参加成果志向の自己成長（ $\beta=.21$ ）、精神的高揚（ $\beta=.32$ ）、キャリア開発（ $\beta=.23$ ）、ヘルス安寧（ $\beta=.24$ ）、評価承認（ $\beta=.20$ ）のいずれにも正の影響を及ぼした。自律性への欲求は、参加成果志向のいずれの因子にも有意な影響はみられなかった。コンピテンスへの欲求は、参加成果志向の自己成長（ $\beta=.21$ ）、評価承認（ $\beta=.25$ ）に正の影響を及ぼした。重回帰分析に基づきパス図を作成した（Figure 6-5）。なお、パス図には有意なパス（ $p<.05$ 水準）のみを記した。

Table6-3 心理的欲求・参加成果志向の構成要因別の重回帰分析結果

	参加成果志向				
	自己成長	精神的高揚	キャリア開発	ヘルス安寧	評価承認
関係性への欲求	.21 *	.32 ***	.23 **	.24 **	.20 *
自律性への欲求	.02	-.01	-.02	.07	-.10
コンピテンスへの要求	.21 *	.16	.10	.05	.25 **
R^2	.17 ***	.19 ***	.09 ***	.10 ***	.13 ***

(注) 値は標準偏回帰係数

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

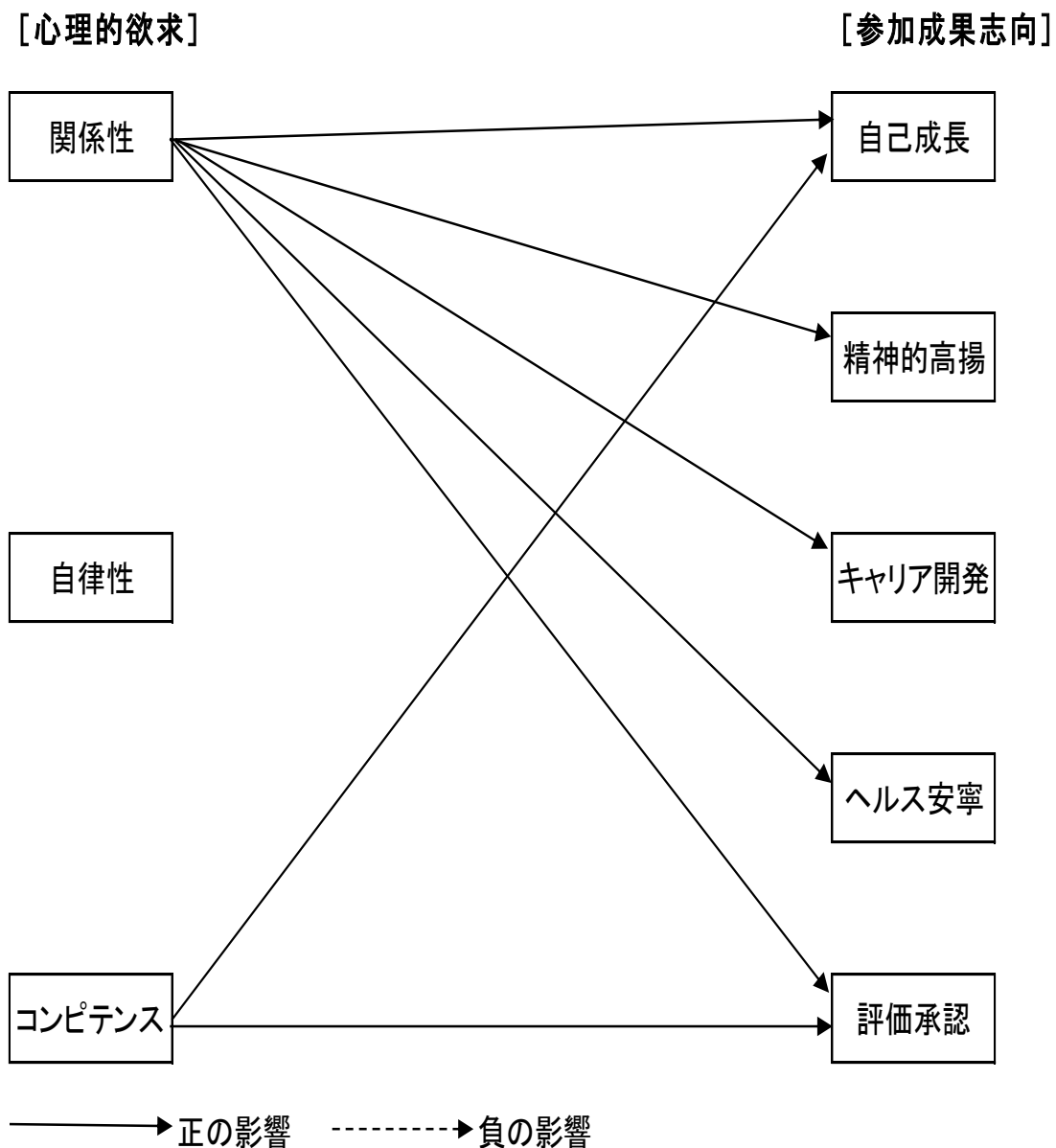


Figure6-5 心理的欲求・参加志向動機・不参加志向動機のパス図

4. 考察

本研究では、まず、心理的欲求の3因子に関して、ボランティア活動への参加経験の有無と参加意志の有無の差をみると、参加志望者は、非志望者よりも参加経験の有無に拘わらず関係性への欲求・自立性への欲求・コンピテンスへの欲求のいずれにも、高い欲求を持っていることが明らかとなった。このことは、大学生のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する潜在的な要因として、心理的欲求への充足期待があることが示唆された。

次に、心理的欲求が参加志向動機と不参加志向動機の各構成要因にどのように影響を与えるのかについて検討した。その結果、関係性への欲求は、参加志向動機の体験志向・社会貢献志向・興味対象志向・他者同調志向に正の影響を及ぼした。即ち、大学生において、ボランティア活動の対象者や活動仲間との間の親密な繋がり・関係を得たい・実感したいという気持ちが、内発的な参加志向動機の体験志向・社会貢献志向・興味対象志向と外発的な他者同調志向を高めることが示された。また、「友人に誘われたから」「友達やみんなも参加するから」などの他者同調志向は、ボランティア実践者を対象とした先行研究には見出されず、大学生を対象とした研究（研究1）によって明らかとなった構成要因であることから考えると、大学生においては、ボランティア活動への参加行動を規定する要因として、ボランティア活動の対象者や活動仲間との関係性への欲求に対する充足期待が重要であることが示唆された。

自律性への欲求は、参加志向動機の世界貢献志向・他者同調志向に負の影響を及ぼした。日本学生支援機構（2006）の調査では、ボランティア活動に不満な学生の約半数（48.8%）が「自分の思うとおりの活動ができなかった」ことを挙げているとおり、ボランティア活動は一般的なサークル活動に比べて必ずしも自律性を発揮できる活動ではないことから、自律性への欲求は本来的な参加志向動機の世界貢献志向を低めるものと考えられる。また、他者同調志向は、外発的な参加志向動機であり、ボランティア活動の持つ本質的な自発性・自主性に関わることであるため、自律性とは方向性が逆であることから妥当な結果であると言える。

なお、岡田ほか（2014）が学校支援ボランティア（平均年齢 59.25 歳）を対象にして、ボランティア活動における心理的欲求の充足と動機づけとの関連を検討した研究で、有能感欲求の充足および生徒との関係性欲求の充足がボランティア活動に対する動機づけに有意な正の影響を及ぼすことを示した。しかし、大学生を対象とした本研究では、コンピテンスへの欲求が参加志向動機に有意な影響がなかったことから、大学生と一般ボランティアでは心理的欲求の充足と動機づけの関係において違いがあることが示唆された。

次に、心理的欲求が参加成果志向の各構成要因にどのように影響を与えるのかについて検討した。その結果、関係性への欲求は、参加成果志向の自己成長・精神的な高揚・キャリア開発・ヘルス安寧・評価承認のいずれにも正の影響を及ぼした。このことから、関係性への欲求と参加成果志向との密接な関係性

が明らかとなった。コンピテンスへの欲求は、参加成果志向の自己成長・評価承認に正の影響を及ぼした。コンピテンスへの欲求は、「能力があると感じることが多くあってほしい」「毎日の生活において、自分の能力を示す機会が多くあってほしい」など、自己の能力を発揮する場や機会を得たいという欲求であるが、参加成果志向の自己成長にも自己の能力を発揮・向上することも含まれることから、コンピテンスへの欲求は参加成果志向の自己成長を高めるものと考えられる。また、コンピテンスへの欲求には、「自分が何かをやっているときには、周りの人に上手だと言われたい」という他者からの評価承認の欲求も含まれることから、参加成果志向としての評価承認を高めることは首肯できる。

これらのことから、大学生において、彼らの関係性への欲求とコンピテンスへの欲求という心理的欲求への充足期待に対して、ボランティア活動から得たい参加成果の期待は、心理的機能として応え得るものであることが示唆された。また、自律性への欲求という心理的欲求への充足期待に対しては、参加成果の期待は心理的機能として応えるものとなっていないことは、今後のボランティア活動の推進や教育課程でのボランティア教育に関して、自らの意志や自己決定によってボランティア活動に携われる活動形態の工夫やイメージの醸成といったことも必要であると考えられる。

第2節 参加経験の主観的な質が今後の参加行動に及ぼす影響

[研究8]

1. 目的

本研究では、大学生のボランティア活動の参加経験の主観的な質が今後の参加行動に及ぼす影響について検討することを目的とした。

2. 方法

調査協力者：本調査における協力者は、関東地方の3つの4年制大学に通う大学生154名（男子99名，女子155名）平均年齢は19.32歳（ $SD=1.24$ ）であった。

手続き：2016年6月から7月に、無記名・個別記入形式の質問紙をいずれの大学でも講義時間中に配布し、その場で回収した。

質問紙の構成：（1）ボランティア活動（学校の授業・必須科目）の経験：「参加経験がある」と「参加経験がない」の2件法で回答してもらった。（2）ボランティア活動（学校の授業・必須科目以外での自発的な参加）の経験：「参加経験がある」と「参加経験がない」の2件法で回答してもらった。（3）ボランティア活動（学校の授業・必須科目）の経験の質：（1）において「参加経験がある」と回答した人を対象に、①社会的効果の実感：「それらの活動は、対象者や社会に有益なものとなったと思う」②参加成果の充足：「それらの活動によって、私自身が得たいと期待したものが得られた」③活動参加の満足：「それらの活動に対して、私自身は満足している」という各問について、「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法で回答してもらった。（4）ボランティア活動（学校の授業・必須科目以外での自発的な参加）の経験の質：（2）において「参加経験がある」と回答した人を対象に、①社会的効果の実感：「それらの活動は、対象者や社会に有益なものとなったと思う」②参加成果の充足：「それらの活動によって、私自身が得たいと期待したものが得られた」③活動参加の満足：「それらの活動に対して、私自身は満足している」という各問について、「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法で回答してもらった。（5）参加成果：研究4のボランティア活動の参加成果志向の構成要因を使用した。回答の

形式は、「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法である。（6）今後の参加意欲：（1）と（2）において「参加経験がある」と回答した人を対象に、「今後も、それらの活動に積極的に参加したい」という間について「全く当てはまらない」（1点）～「良く当てはまる」（5点）の5件法で回答してもらった。なお、ボランティア活動（学校の授業・必須科目）への「参加経験がある」と回答した人は73名、ボランティア活動（学校の授業・必須科目以外での自発的な参加）への「参加経験がある」と回答した人は75名であった。

3. 結果

ボランティア活動の経験の質と今後の参加行動

まず、ボランティア活動の経験の質と今後のボランティア活動への参加行動との関連を検討した。社会的効果の実感・参加成果の充足・活動参加の満足
の3項目を独立変数、今後の参加意欲を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、学校の授業・必須科目でのボランティア活動の経験の質では、活動参加の満足（ $\beta=.37$ ）が今後の参加意欲に正の影響を及ぼしていた。一方、学校の授業・必須科目以外でのボランティア活動の経験の質では、社会的効果の実感（ $\beta=.20$ ）・参加成果の充足（ $\beta=.27$ ）・活動参加の満足（ $\beta=.50$ ）のいずれもが今後の参加意欲に正の影響を及ぼしていた（Table6-4）。重回帰分析に基づきパス図を作成した（Figure 6-6, Figure 6-7）。なお、パス図には有意なパス（ $p<.05$ 水準）のみを記した。

Table6-4活動の質と今後の参加意欲の重回帰分析結果

	授業等参加 参加意欲	自発的参加 参加意欲
社会的効果の実感	.21	.20 *
参加成果の充足	.14	.27 *
活動参加の満足	.37 *	.50 ***
R^2	.33 **	.71 ***

(注) 値は標準偏回帰係数 * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

<授業等参加>

[活動の質]

[今後の参加意欲]

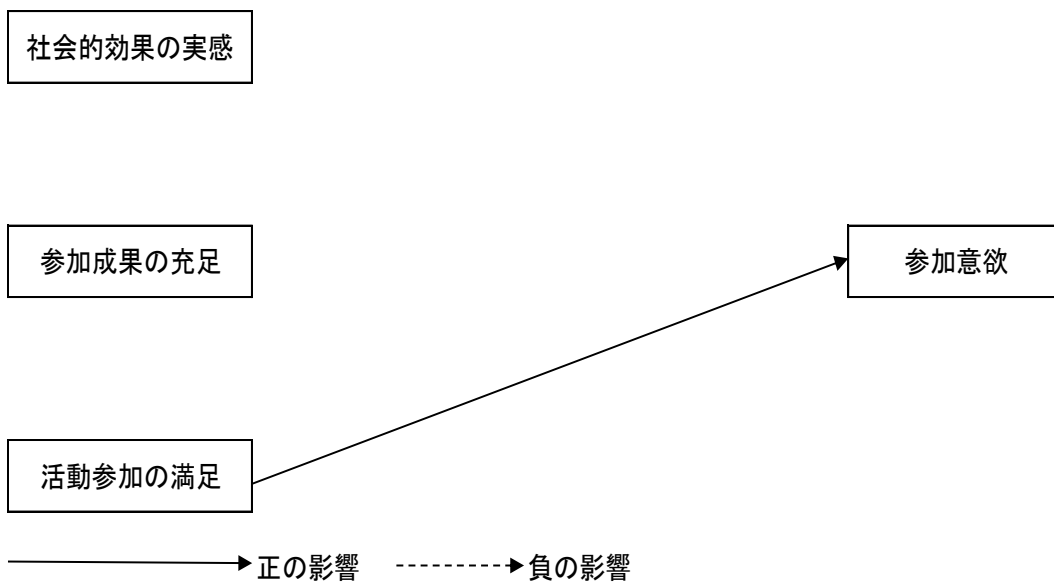


Figure6-6 活動の質・今後の参加意欲のパス図

<自発的参加>

[活動の質]

[今後の参加意欲]

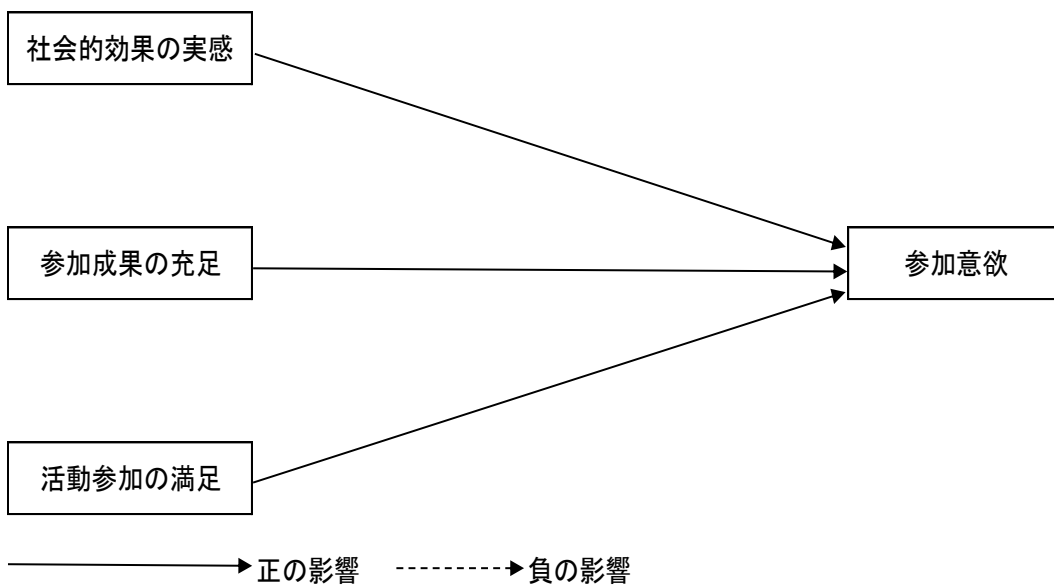


Figure6-7 活動の質・今後の参加意欲のパス図

参加成果と今後の参加行動

次に、ボランティア活動の参加成果と今後のボランティア活動への参加行動との関連を検討した。参加成果の5因子を独立変数、今後の参加意欲を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、学校の授業・必須科目での経験者では、今後の参加意欲に対して、参加成果の精神的高揚（ $\beta=.56$ ）が正の影響を及ぼし、ヘルス安寧（ $\beta=-.62$ ）が負の影響を及ぼしていた。一方、学校の授業・必須科目以外での経験者では、今後の参加意欲に対して、参加成果では、自己成長（ $\beta=.47$ ）と精神的高揚（ $\beta=.44$ ）が正の影響を及ぼしていた（Table6-5）。重回帰分析に基づきパス図を作成した（Figure 6-8）。なお、パス図には有意なパス（ $p<.05$ 水準）のみを記した。

Table6-5参加成果志向と今後の参加意欲の重回帰分析結果

	授業等参加	自発的参加
	参加意欲	参加意欲
自己成長	.26	.47 *
精神的高揚	.56 *	.44 *
キャリア開発	-.10	-.28
ヘルス安寧	-.62 *	-.14
評価承認	.01	.07
R^2	.33 *	.46 ***

(注) 値は標準偏回帰係数

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

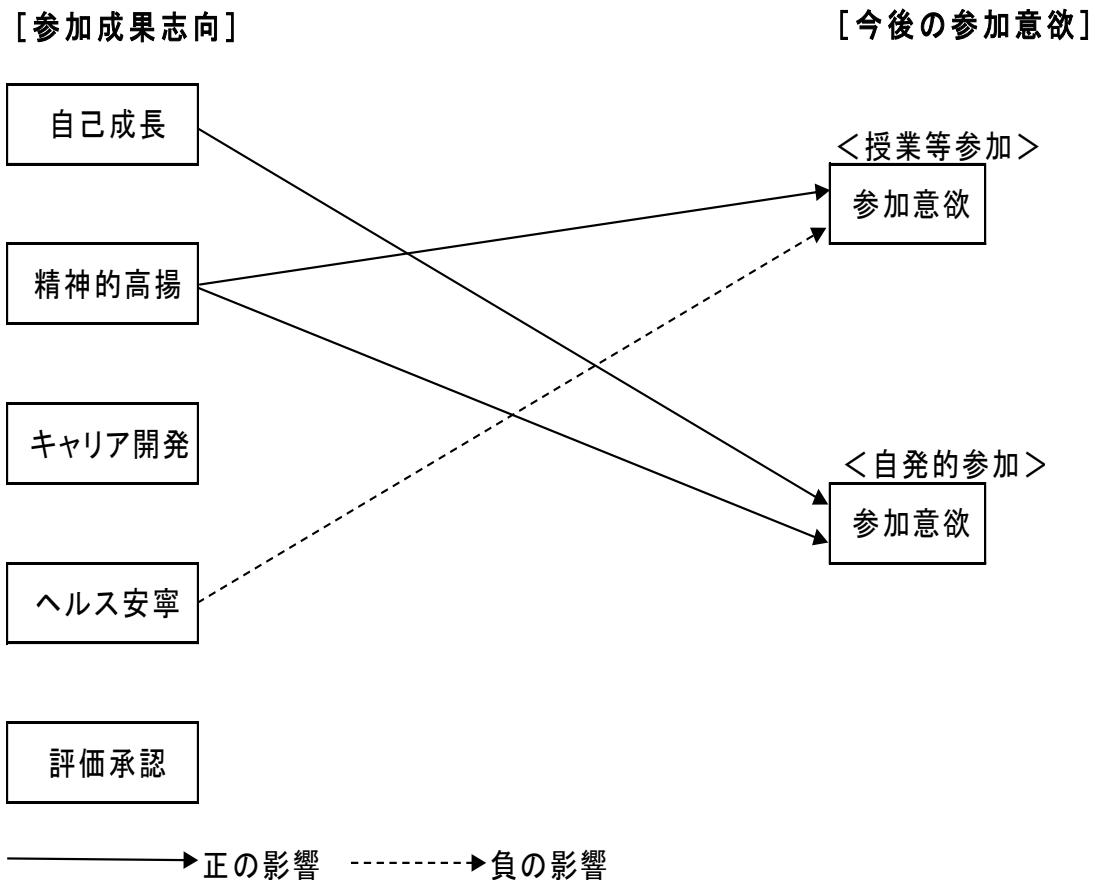


Figure6-8 参加成果志向・今後の参加意欲のパス図

4. 考察

本研究では、まず、ボランティア活動の経験の質が今後の参加意欲に及ぼす影響を検討した。その結果、学校の授業・必須科目でのボランティア活動の経験の質では、活動参加の満足が有意な正の影響を示した。このことは、荒川ほか（2006）が「小・中・高等学校の授業の一環として」のボランティア活動体験は、大学入学以降のボランティア活動に結びつかないことを示したが、それは一概には言えず、本研究によって例え授業の一環としてのボランティア活動でも、「ボランティア活動への参加に対して、自分自身は満足している」という活動参加から満足が得られれば、その後の参加意欲に結びつくことが明らかとなった。したがって、教育課程でのボランティア体験学習などがその後のボランティア活動への積極的参加に結びつくようにするには、今後、ボランティア活動の質として、ボランティア体験学習などから満足を得られるような活動

内容・活動形態の在り方に一層の工夫をすることが大事であるといえる。

一方、学校の授業・必須科目以外での自発的なボランティア活動の経験の質では、社会的効果の実感・参加成果の充足・活動参加の満足の内いずれもが今後の参加意欲に正の影響を及ぼしていた。このことから、社会的効果の実感と参加成果の実感および活動参加の満足が高いほど、即ち、参加経験の主観的な質が高いほど、その後のボランティア活動への参加意欲が促進されることが明らかとなった。このことは、ボランティア活動の満足感を得ることが、その後の活動継続に結びつくことを示した研究（例えば、佐藤 2009, 松川・津野 1998, 内藤 2009）に通じる。

長沼（2014）は、活動参加満足度が高い組織とは、例えば、自分が組織に関与する度合いが高く、そこでなし得たことが満足感につながっている場合、組織内の人間関係が円滑で楽しく喜びが得られる場合、組織運営に関わり、そこでの達成感等から満足がいく成果が得られる場合を挙げている。このことと本研究の結果を併せて考えると、アクティブ・ラーニングを含めボランティア活動の推進には、学生の個々の参加志向動機に合致させることに努め、長沼（2014）が挙げた上記のような運営に努めるなど、質の高いボランティア活動の体験（新垣 2009）を提供する必要があると考えられる。

なお、本研究によって学校の授業・必須科目において、社会的効果の実感がその後の参加意欲に必ずしも結びつかないことも示唆された。ボランティア活動が果たす社会的機能への実感がその後のボランティア活動への参加に結びつくようなボランティア活動となることが理想であるが、ボランティア教育のあり方を考えるうえでの今後の課題のひとつといえるかもしれない。例えば、ボランティア体験学習の参加者に対して社会への貢献実感を持てるように、活動参加の都度、ボランティア体験学習などが果たす社会的効果を明確に伝えることも必要ではないかと考えられる。

次に、ボランティア活動の参加成果と今後のボランティア活動への参加行動との関連を検討した結果、学校の授業・必須科目でのボランティア活動経験では、参加成果志向のヘルス安寧が、今後の参加意欲に負の影響を及ぼすことが明らかとなった。学校の授業・必須科目でのボランティア活動経験から得られたヘルス安寧が高くなっても、その後のボランティア行動の継続を抑制させることが示唆された。また、学校の授業・必須科目および学校の授業・必須科目以外でのボランティア活動経験のどちらにおいても、今後の参加意欲に対して、

参加成果の精神的高揚が正の影響を及ぼすことが明らかとなった。そして、学校の授業・必須科目以外でのボランティア活動経験では、参加成果の自己成長が今後の参加意欲に正の影響を及ぼすことが明らかとなった。これらのことは、研究4では参加成果志向の精神的高揚と自己成長が内発的な参加志向動機に正の影響を及ぼすことが明らかとなったことと併せて考えると、ボランティア活動から精神的高揚や自己成長を得たい期待と得られた実感が高くなるほど、ボランティア行動の生起だけでなく継続にも結びつくことが示唆された。今後のボランティア活動の推進には、ボランティア活動の経験から精神的高揚や自己成長を得たい期待に対して、ボランティア活動の体験を通じて、それらの期待を如何に実感できるかの方策等を講じることが、ボランティア行動の好循環に結びつくものと考えられる。

研究1から研究7までは、ボランティア行動の生起メカニズムの解明をしてきたが、研究8では、ボランティア行動の生起した後の再行動・継続メカニズムの解明を試みた。この研究8の結果は、ボランティア活動の推進の観点からみると、ボランティア行動の生起から再行動・継続への好循環に繋がる実践的な示唆が得られたものと考えられる。

第3部 総括

第7章 本論文のまとめ

第1節 本論文の結果のまとめ

本論文は、大学生のボランティア活動の推進や教育課程でのボランティア教育のあり方に繋がる知見を得ることを目的とした。そのために、ボランティア行動も人間の一つの行動であることから（妻鹿 2006）、先行研究の課題を踏まえながら、8つの実証的研究によって大学生のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因を明らかにしたうえ、その行動を引き起こす内的心理メカニズムを解明することを試みた。本論文の研究1～研究8までの実証的研究で得られた知見を以下にまとめる。

研究1では、大学生のボランティア活動への参加行動・不参加行動を引き起こす参加志向動機および不参加志向動機の構成要因を明らかにすることを試みた。その結果、参加志向動機では、内発的な「体験志向」・「社会貢献志向」・「興味対象志向」と外発的な「他者同調志向」・「社会従属志向」の5因子が見出された。大学生の参加志向動機は、本来の主体的・自発的な内発的要因に留まらず、外発的な要因も大きいことが明らかとなった。一方、不参加志向動機では、ボランティア活動に対してネガティブな意識としての「利己優先志向」・「活動否定」と環境原因としての「情報不足」の3因子が見出された。

ボランティア活動の普及・推進の観点からは、参加志向動機の「体験志向」や「興味対象志向」を満たす活動内容となる工夫をすること、参加実践者からの参加呼びかけや仲間同士での参加を働きかけることなどが効果的であることが示唆された。また、ボランティア活動の主催者・推進側の啓蒙・情宣活動の一層の工夫と努力次第では、「情報不足」による不参加志向動機は、まだまだ解消・改善の余地があると考えられ、より多くの大学生を代表とする若者に対してボランティア活動の参加を促せられる可能性が示唆された。

研究2では、大学生が抱くボランティア活動に対するイメージの構成要因を

明らかにし、研究1で明らかにした参加志向動機および不参加志向動機に及ぼす影響を検討した。その結果、ボランティア活動イメージでは、ポジティブな「自己実現」・本来的な「親和援助」・ネガティブな「否定」・「強制無責任」・その他の「具体的活動」の3因子が明らかとなった。そして、大学生のボランティア活動において、イメージと参加志向動機および不参加志向動機との密接な関係性が読み取れた。このことから、ボランティア活動イメージは、ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する重要な先行要因であることが明らかとなった。

ボランティア活動の普及・推進の観点からは、ボランティア活動への参加志向動機を高めるには、「自己実現」イメージの醸成と「否定」イメージの低減や「親和援助」・「具体的活動」の肯定的イメージの形成を図ることが効果的であり、各段階の学校教育でのボランティア教育において、ボランティア活動に対するイメージへ訴求する工夫も必要であることが示唆された。

研究3では、援助成果尺度（妹尾・高木 2003）を用いて、大学生のボランティア活動に対する参加成果（援助成果）を明らかにしたうえで、研究1の参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を検討した。その結果、先行研究では、援助成果（参加成果）は、複数の因子構造であったが、本研究では、単数の因子構造であった。この構造の差異から援助成果（妹尾・高木 2003）では、大学生の参加成果を必ずしも十分に捉えていない可能性が課題として示唆された。しかしながら、参加成果と参加志向動機および不参加志向動機との密接な関係性が読み取れた。このことから、参加成果は、ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する重要な先行要因であることが明らかとなった。

研究4では、研究3で見えた課題を踏まえて、大学生が抱く参加成果志向（参加成果への期待）の構成要因を新たに明らかにし、研究1の参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を改めて検討した。その結果、参加成果志向では、「自己成長」・「キャリア開発」・「精神的高揚」・「ヘルス承認」・「評価承認」の5因子が見出された。そして、大学生のボランティア活動において、参加成果志向と参加志向動機および不参加志向動機との密接な関係性が改めて確認された。

ボランティア活動の推進・普及の観点からは、大学生のボランティア活動か

ら得たい参加成果として、「自己成長」・「精神的高揚」への期待に応え得る活動内容を提示・提供することが効果的であることが示唆された。そして、参加成果の期待と実際の活動内容とのミスマッチを防ぐため、ボランティア活動を通じて得たい参加成果への期待を的確に捉え、その期待に対して適切に応える方策をとる必要があることが示唆された。

研究5では、身近なボランティア経験者の存在が、研究1の参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響を検討した。その結果、身近な経験者の存在が、参加志向動機の醸成に繋がり、ネガティブな不参加志向動機の形成を抑制することが確かめられた。このことから、環境要因として身近なボランティア経験者の存在もボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する重要な要因であることが明らかとなった。

ボランティア活動の推進・普及の観点からは、身近な参加経験者からの積極的な参加への働き掛けや体験談などの発信の機会を増やしたり、家族ぐるみでの参加や身近な人と一緒に参加できる形態などを工夫することも、もっと検討して良いと考えられる。

研究6では、大学生に関して、日常の他人への援助行動を行った経験（援助行動経験）と他人から援助行動を受けた経験（被援助行動経験）が研究1の参加志向動機および不参加志向動機に及ぼす影響を検討した。その結果、援助者の立場での日常の援助行動経験と、被援助者の立場での日常の被援助行動経験は、他者との間において自己強化的に循環する援助行動の一環として、大学生のボランティア活動への参加志向動機を促すことが明らかとなった。

研究7では、心理的欲求尺度（大久保・加藤 2005）を用いて、大学生に関して、彼らの基本的な心理欲求が研究1の参加志向動機・不参加志向動機ならびに研究4の参加成果志向に及ぼす影響を検討した。その結果、大学生において、心理的欲求の「関係性への欲求」が高いほど、参加志向動機および参加成果志向を促し、心理的欲求の「コンピテンスへの欲求」が高いほど、参加成果志向の「自己成長」・「評価承認」を促すことが明らかとなった。これらのことから、大学生において、ボランティア活動は、彼らの心理的欲求に応え得る有効な活動であることが示唆された。

研究8では、大学生のボランティア活動経験の質が、その後の参加意欲に及ぼす影響を検討した。また、ボランティア活動経験からの新たな参加成果志向（実感・期待）が、その後の参加意欲に及ぼす影響を検討した。その結果、授業の一環でのボランティア活動でも、ボランティア活動経験の質としての「活動参加の満足」が得られれば、その後の参加意欲に結びつくことが明らかとなった。一方、自発的なボランティア活動では、ボランティア活動経験の質としての「社会的効果の実感」・「参加成果の充足」・「活動参加の満足」が高いほど、即ち、参加経験の主観的な質が高いほど、その後の参加意欲が促進されることが明らかとなった。また、ボランティア活動経験からの新たな参加成果志向としての「自己成長」・「精神的高揚」が高くなるほど、その後の参加意欲を促すことが明らかとなった。

ボランティア活動の推進には、教育課程を含めてボランティア活動の経験者が、その後もボランティアとして定着するという循環が不可欠である。そのためには、ボランティア活動から自己成長・精神的高揚を実感できること、そして、全体的な活動参加の満足感が得られることが鍵となることが示唆された。教育課程を含めボランティア活動から得たい参加成果の期待と参加成果の実感のギャップが生じさせず、全体的な活動参加の満足感を高めるためには、ボランティアの募集形態・参加形態や活動内容となるように、きめ細かく・的確な対応が必要であると考えられる。

第2節 ボランティア行動への生起・促進モデルの提案

研究1から研究8までの8つの実証的研究によって、統合理論の枠組みが成立することが確認できたことから、一連の研究の統合理論として、今後の実践的なボランティア研究に繋がる大学生の「ボランティア行動への生起・促進モデル」を提案する。

1. ボランティア行動への生起・促進モデル

本論文では、第1に、参加行動・不参加行動を引き起こす動因として「参加志向動機」と「不参加志向動機」に対して、先行要因として大学生が抱くボランティア活動に対する「ボランティア活動イメージ」および大学生がボランティア活動を通じて得たい参加成果の期待である「参加成果志向」が影響を及ぼすこと、第2に、環境要因として「身近なボランティア経験者」の存在および相互要因として個人における「援助行動」と「被援助行動」の経験が「参加志向動機」と「不参加志向動機」に対して影響を及ぼすこと、第3に、大学生の潜在的な要因として「心理的欲求」（満たされない欲求）が「参加志向動機」と「参加成果志向」に対して影響を及ぼすことが明らかとなった。そして、時間的連続性の視点から事後要因として新たな「参加成果志向」（実感）などの「ボランティア活動経験の質」がその後の「参加行動」に対して影響を及ぼすことが明らかとなった。

即ち、環境要因の「身近な経験者」・相互要因の「援助・被援助行動経験」・先行要因の「イメージ」・潜在要因の「心理的欲求（満たされない欲求）」・「参加成果志向（期待）」が、動機づけの動因としての「参加志向動機」・「不参加志向動機」に対して影響を与え、ボランティア参加の機会に遭遇したり、外部からの情報等で誘発・触発されると、そこで認知判断が行われ、ボランティア活動への「参加行動」または「不参加行動」が生起されると想定される。ボランティア活動の経験の実感として、事後要因の「参加成果志向（実感）」などの「参加経験の質（実感）」が高ければ（欲求・期待が充足されれば）、「今後の参加意欲」として「参加志向動機」が促進され、生起過程と同様に認知判断を経て、現在のボランティア活動への継続や新たなボランティア活動へのチャレンジなど、今後のボランティア活動への参加行動の循環に

繋がる想定される。

これらのことの概略的な枠組みを大学生の「ボランティア行動への生起・促進モデル」として図式化したものがFigure7-1である。

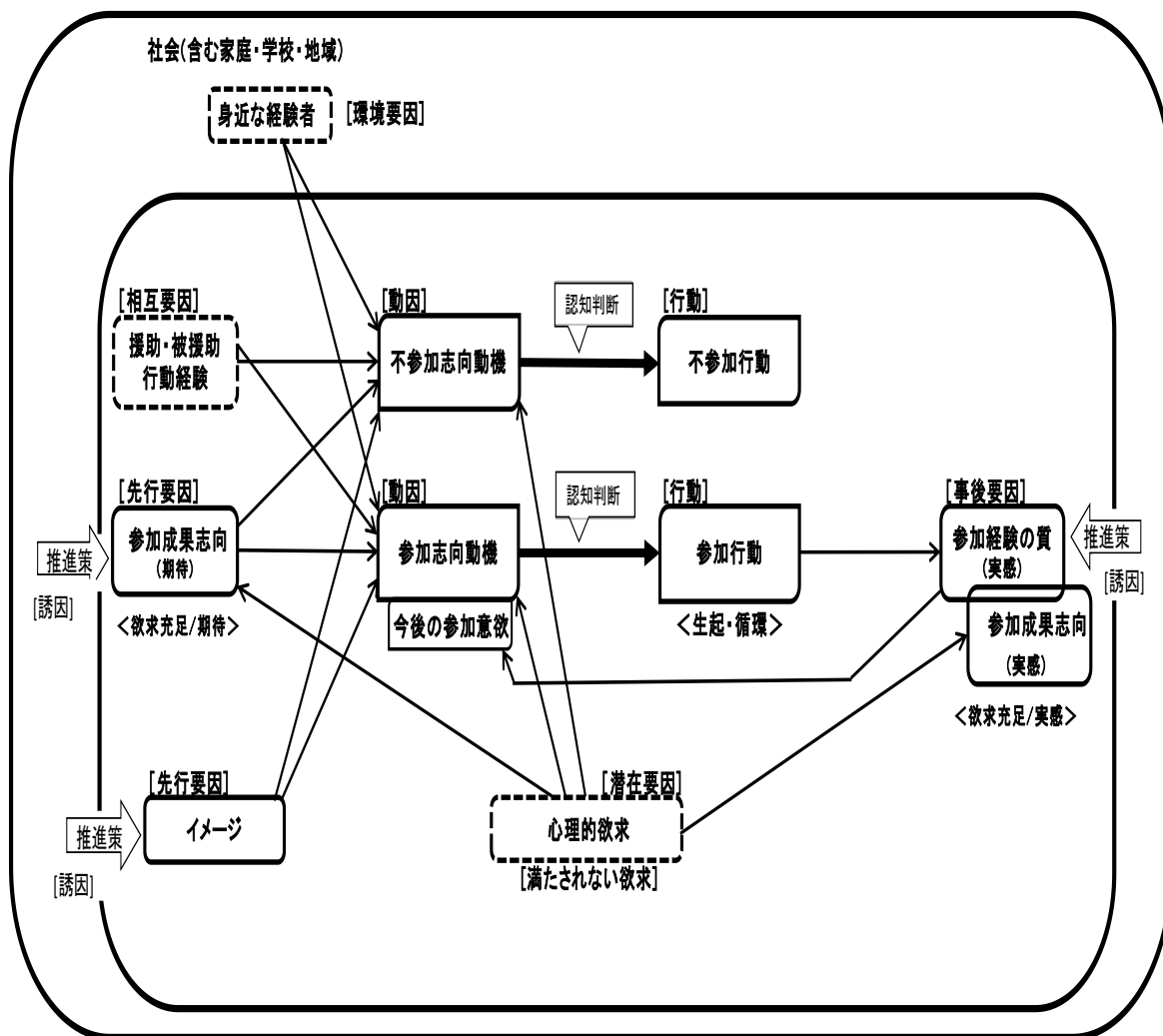


Figure7-1 ボランティア行動の生起・促進モデル

ボランティア活動の推進モデル

「ボランティア行動への生起・促進モデル」は、参加行動・不参加行動を引き起こす「参加志向動機」と「不参加志向動機」の各構成要因に対して、「ボランティア活動イメージ」・「参加成果志向」・「ボランティア活動経験の質」

の各構成要因が及ぼす影響に着目すると、大学生のボランティア活動の推進・普及に向けたいわば「ボランティア活動の推進モデル」ともいえる。

即ち、ボランティア活動組織や大学等の教育機関などにおいて、「参加志向動機」を促進する先行要因と事後要因、「不参加志向動機」を抑制する先行要因への働き掛け、即ち「ボランティア活動へ参加したいと思わせる」誘因へ働き掛けをする推進策を講じることができれば、大学生のボランティア活動の推進に繋がると考えられるからである。

2. ボランティア活動の推進方策等のポイント

本論文から得られた知見から、ボランティア組織や大学等の教育機関などがボランティア活動を推進するうえでの推進方策等のポイントを提示する。具体的には、「ボランティア活動の推進モデル」に基づいて、ボランティアマネジメントの側面から捉えた推進方策等のポイント3点を挙げる。なお、これらのポイントは本論文の一連の研究で明らかとなったとおり、それぞれが密接に関連していることから、ボランティア活動を推進するには、総合的なボランティアマネジメントが大事であると考えられる。また、これらのポイントは、大学でのアクティブ・ラーニングの実効性を高めるうえでも有効なポイントになるのではないかと思料される。

第1は、大学生のボランティア行動を規定する参加志向動機が多様であることを理解することである。

ボランティア募集には、参加志向動機・不参加志向動機および参加成果志向の多様な構成要因へ働きかける方策を講じることが重要であろう。例えば、参加志向動機では、本来の主体的・自発的な内発的要因に留まらず、外発的要因も大きいことが明らかとなったことから、友人・知人や身近な経験者からの参加呼び掛けや仲間同士・家族ぐるみでの参加を働き掛けることなども有効な方策であると考えられる。外発的動機づけからボランティア行動を始め、参加成果の充足や活動参加の満足を感じて内発的動機に転化していくことも、ボランティアの拡大・定着に繋がると考えられる。このことは、デシとライアンが動機づけ理論での自己決定理論 (DECI & RYAN 1985, 1991, 2002) によって外発的な

動機づけから価値の内在化が進んで自律的な内発的な動機づけによる行動へ連続的に変化していく状態を示していることに通じる。特に、ボランティア未経験者の参加志望者では、実際の参加行動に向かうには少なからず心理的ハードルがあると考えられ、何か外発的に背中を押してもらうことで、この心理的ハードルを乗り越える切っ掛けとなるのではないか。その意味では、教育過程でのボランティア体験学習も、外発的な役割としても大いに期待できるのである。内発的要因に関しても、ボランティア活動の本来的な利他動機の「社会貢献志向」だけでなく、利己的な「体験志向」「興味対象志向」を満たす活動内容となる工夫をすることが効果的であると示唆される。また、研究者のなかには、ボランティア活動へ参加する経路には、ボランティアの動機との何らかの関係があるとする意見もみられる（桜井 2007）ことから、桜井（2007）もボランティアマネジメントの課題として挙げているように、ボランティア参加志向動機とボランティアの募集方法（経路）の関係を検討することも必要ではないかと考えられる。

第2は、ボランティア活動イメージや実際の活動内容に関して、広範なPR活動・啓蒙活動の一層の注力と戦略的工夫を講じることである。

大学生の参加志向動機を高めるためには、ボランティア活動に対する「自己実現」イメージの醸成と「否定」イメージの低減や「親和援助」イメージ・「具体的活動」イメージの肯定的イメージへの形成を図ることが効果的であることが明らかとなったことから、ボランティア組織・大学等の教育機関においては、ボランティア活動に対するイメージへ訴求する工夫も必要である。また、大学生のボランティア活動から得たい参加成果への期待（参加成果志向）も様々であることから、実際のボランティア活動がもつ多様な要素をPRすることは大事であろう。そして、大学生の不参加志向動機には、環境要因として「情報不足」もあることから、ボランティア組織・大学等の教育機関においては、ボランティア活動の内容に関するPR活動・啓蒙活動の一層の工夫と努力が求められる。ボランティア組織の規模・予算や活動内容に応じて、企業の若者向けメディア戦略も参考になるのではないか。大学生のボランティア活動の情報源としては、「友人・口コミ」・「インターネット等の情報網」が多い（文部科学省 2015）ことから、口コミ・WEBサイト・SNS・メールでの情報発

信に一層努めることが効果的であると考えられる。

そして、不参加志向動機の「利己優先」に対しては、ボランティア活動は、「人のためになる」という側面だけではなく、実際には「自分のためになる」という側面を、例えば、同世代のボランティア体験者からメディアを問わず率直に語ってもらうなど、建前ではなく本音での情報発信が必要ではないかと考える。

アクティブ・ラーニングでは、ボランティア活動へ参加した学生から、生きた学びの実感を体験談として語ってもらうことは、参加した学生自身の振り返りという教育的な意味ばかりではなく、後輩へ活動を引き継ぐ情報発信としての効果も大きいと考える。

第3には、各ボランティア志望者のニーズと実際のボランティア活動との間をきめ細かく的確にコーディネートすることである。

大学生のボランティア活動が定着せず伸び悩んでいる理由のひとつとして、参加成果の期待と参加成果の実感とのギャップが生じている可能性が考えられる。ボランティア行動後のボランティア行動の継続・定着には、参加成果の充足度が高いことがひとつのポイントとなることが明らかとなったことから、参加成果の期待と実際の活動内容とのミスマッチを防ぐことが大事だと考えられる。そのためには、各ボランティア志望者の参加成果の期待を的確に捉え、その期待に応え得るボランティア活動をきめ細かく的確にコーディネートすることが必要であると言える。また、ボランティア行動の継続・定着には、参加志向動機を始めとして参加成果志向や心理欲求の充足など、トータルとしての活動参加満足度が高いことが重要であることから、ボランティア組織や大学等には、コーディネート機能の一層の強化が求められる。そして、ボランティア組織や大学等におけるコーディネーターには「企画力・戦略」が必要（守本2013）となると考えられる。

第3節 本論文の意義

まず、本論文の学術的意義・社会的意義を記す。

第1は、ボランティア行動を取り扱った研究の歴史は浅く、研究蓄積はまだまだ少ない中、ボランティア活動の未経験者を含め全般領域に亘るボランティア活動に関して、ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因を実証的研究によって明らかにできたことは、今後のボランティア活動の推進および教育課程でのボランティア教育のあり方において有用な多くの知見が得られたものとする。

第2は、ボランティア行動も人間の行動のひとつと捉え、新たなアプローチとして動機づけの観点からその行動を引き起こす内的メカニズムの構造的な解明を図ることができたことは、ボランティア研究および動機づけ研究にとって新たなアプローチとして意義あるものであり、また、今後のボランティア行動のさらなる解明に繋がるものとする。

第3は、今後、ボランティア活動の社会的役割や教育的意義が益々高まる中、ボランティア活動の推進の観点から統合理論モデルとして、次世代を担う大学生の「ボランティア行動への生起・促進モデル」が提案されたこと、さらに具体的な推進方策等のポイントが提唱されたことは、今後の教育課程を含めてボランティア活動のさらなる推進・普及を図るうえで有意義なものであるとする。

そして、本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

第1は、人間が直面している様々な問題（谷川 2016）の中から、本論文では、今日の我が国において、既存の社会システムの限界や少子高齢化の進行への対応という課題への方策のひとつとして、ボランティア活動を取り上げ、社会的役割に留まらず、教育的意義にも視点を置きながら、人間科学の持つ学問的意義の実践として、その課題解決に向けて一定の研究成果を挙げたことがある。

第2は、本論文では、ボランティア行動を規定する要因は多様であることを解き明かし、複数の実証的研究から導き出された知見から統合理論モデルとして「ボランティア行動への生起・促進モデル」を提案したこと。さらに具体的な推進方策等のポイントを提唱したこと。これらのことは、研究と実践をつなぐ研究成果であり、ボランティア活動を対象にして人間に関する「多様性」「総合性」「実践性」を追求するという方向性をもちながら、学問と社会をつなぐ思考の上に成立（谷川 2016）するという人間科学としての研究成果を挙げたことに他ならない。

第3は、ボランティア活動に関する研究は、社会学に限らず、心理学、経済学、政治学、哲学などさまざまな学問分野での研究対象となっている（三谷 2016）。しかし、本論文では、心理学・教育学を中心として人間科学から総合的に取り組み、ボランティア行動を規定する要因を解き明かした。このことは、ボランティア活動という社会的現象がもつ多層的な現代的意義を研究するうえで、人間科学とは、多くの慣習的・伝統的な学問分類にまたがる（加藤 2015）ものであり、多様な学問を持って総合的に取り組む（谷川 2016）という人間科学からのアプローチが有効な研究アプローチであることを実証したといえる。

第4節 今後の課題と展望

本論文全体を通じた今後の課題と展望を記す。

第1は、研究の対象者の問題が挙げられる。本論文では、若者として現役の大学生を分析対象として研究を行った。確かに、ボランティア活動における若い世代の主な担い手は、現役の大学生であることから、研究の対象者の選択には妥当性がある。しかしながら、若い世代でのボランティア活動の推進・普及を考えた場合、今後、現役の大学生に留まらず、例えば、10代の高校生・20代の社会人にも研究の対象を広げることは、本論文の実践的意義を高めるうえで重要なことだと考える。

第2は、説明要因の問題が挙げられる。本論文では、ボランティア行動も人の行動の一つと捉え、その行動を引き起こす内的メカニズムを解明するため、主に心理学で研究されてきた主観的要因として「参加志向動機・不参加志向動機」・「イメージ」・「参加成果志向」を主な説明要因として研究を行った。また、ボランティア行動に影響を与える要因は、主に社会学で研究されてきた客観的要因もあることから、客観的要因と主観的要因の双方の影響として、「身近なボランティア経験者の有無」・「被援助行動経験・援助行動経験」にも着目して研究を行った。しかしながら、本論文で取り上げた要因の他にも、ボランティア行動に影響を与える要因はあると考えられる。例えば、主観的要因と客観的要因の影響を同時に考慮する領域横断的な視座（三谷 2016）からのアプローチは、今後の若者のボランティア活動の推進や教育課程でのボランティア教育のあり方に繋がるさらなる知見が得られる可能性があると考えられる。即ち、今後、本論で取り上げた要因に限定せずに、本論文で得られた知見をもとに、様々な説明要因に焦点をあて、さらに詳細な検討を行うことも意義あるものとする。例えば、客観的要因としての地域社会や教育環境と主観的要因との関係を探っていくことも必要であろう。

第3は、要因の形成過程の問題が挙げられる。本論文では、若者のボランティア行動を規定する要因の形成過程には未だ十分に至っていない。彼らの教育課程を含めた具体的な体験分野・参加形態や様々なボランティア情報源と「参

加志向動機・不参加志向動機」・「活動イメージ」・「参加成果志向」との関連を検討することも必要であろう。これらのことは、今後の説明要因へ働き掛ける有効な方策を検討するうえでも、ボランティア体験学習等が所期の目的を達成しているのか否かの検証にも繋がると考える。

第4は、調査方法の問題が挙げられる。本論文では、ボランティア活動全般の統合理論として、ボランティア行動への生起・促進のモデル化を図ることを目標としたため、質問紙調査法に基づく計量的アプローチという調査手法を用いた。しかしながら、インタビュー調査法等の質的アプローチという異なる調査手法を用いて、個々のボランティア行動を引き起こす内的メカニズムの解明に迫ることは、本論文で提案したモデルの実践的適応の検証に繋がるものと考ええる。さらに、質的アプローチを用いることで、ボランティア活動の推進・普及に繋がる新たな知見が得られる可能性もあるものと考ええる。

謝辞

本論文をまとめるにあたっては、多くの方々のご支援・ご助言を賜りました。

青柳肇先生（早稲田大学）には、学部ゼミ以来長きにわたり、心理学の初歩から研究に取り組む姿勢などまで、実に様々なご助言・ご指導を賜りました。青柳先生から常に温かい励ましのお言葉をいただけたからこそ、今日まで研究を何とか続けることができました。野嶋栄一郎先生（早稲田大学）には、物事の本質を探究する姿勢と研究と実践をつなぐことの大切さなど、数々のご指導を賜りました。野嶋先生からご助言と励ましを頂いたお蔭で、いままでの研究の集大成として何とか博士論文にまとめることができました。そして、西村昭治先生（早稲田大学）には、野嶋先生のご退職後に、研究指導教員を引き受けていただき懇切丁寧に直前まで数々のご助言とご指導を賜りました。また、尾澤重知先生（早稲田大学）には、副査を引き受けいただき貴重なご助言を賜りました。先生方には、心より感謝申し上げます。

また、研究室での皆さん、ソーシャル・モチベーション研究会の皆様から多大なご助力・ご助言を頂き、心からの感謝の気持ちで一杯です。ソーシャル・モチベーション研究会では、黒石憲洋先生には、不勉強な私の初歩的な質問にいつも懇切丁寧に答えていただきました。また、寺澤美彦先生、名取洋典先生には、アンケート調査に、多大なご協力をいただきました。博士課程の研究室では、鶴田利郎さんには、論文投稿や博士論文に関して親身なご助言をいただきました。そして、早坂昌子さん、守一介さん、鈴木淳子さんをはじめ、それぞれ様々な形で研究の道を志す方々からは、数多くの刺激を得ただけではなく精神的な支えとなっていました。

そして、アンケート調査にご協力していただきました多くの学生の皆様にも心から御礼申し上げます。その他にも、ご芳名は省かせていただきますが、お世話になったすべての方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

引用文献

- 阿部志郎 (2008) 福祉の哲学 [改訂版]. 誠信書房, 東京, pp.99-100
- 安藤香織, 広瀬幸雄 (1999) 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因. 社会心理学研究, **15**(2) : 90-99
- 青山美智代, 西川正之, 秋山学, 中迫勝 (2000) 老人福祉施設における介護ボランティア活動の継続要因に関する研究. 大阪教育大学紀要・第IV部門 : 教育科学, **48** : 343-358
- 新垣円 (2009) ボランティア体験学習の質が高校生に与える心理社会的影響. サイバー大学紀要, **1** : 107-128
- 荒川裕美子, 保住芳美, 吉田浩子 (2006) 小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連. 川崎医療福祉学会誌, **16**(1) : 133-139
- 荒川裕美子, 吉田浩子, 保住芳美 (2008) 大学生の「ボランティア」に対する認識 : 医療福祉を学ぶ大学生を対象とした調査から. 川崎医療福祉学会誌, **18**(1) : 203-211
- 新崎国広 (2005) ボランティア活動とは. 守本友美, 河内昌彦, 立石宏昭 (編) ボランティアのすすめ, ミネルヴァ書房, 京都, pp.27
- 渥美公秀 (2002) ボランティア活動研究の現状と今後の理論的課題-社会心理学とグループ・ダイナミックス-. ボランティア活動研究, **11** : 29-37
- BOULDING, K. E (1956) *THE IMAGE : Knowledge in Life and Society*, The University of Michigan Press, MI. (大川信明 (訳) 1979 ザ・イメージ : 生活の知恵・社会の知恵 誠信書房, 東京, pp.4)
- 中央教育審議会 (1996) 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について. 文部科学省
- 中央教育審議会 (2002) 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について. 文部科学省
- 中央教育審議会 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換について. 文部科学省
- 中央大学 (2017) ホームページ
www.chuo-u.ac.jp/aboutus/efforts/fd/educational_power/2012_03/
(参照日 2017.03.21)
- CLARY, E. G., SNYDER, M., RIDGE, R. D., COPELAND, J., STUKAS, A. A., HAUGEN, J., & MIENE, P. (1998) Understanding and assessing the motivations of volunteers : A functional approach. *Journal of Personality and Psychology*, **74**(6) : 1516-1530
- CNAAN, R. A., & GOLDBERG-GLEN, R. S (1991) Measuring motivation to volunteer in human services. *Journal of Applied Behavioral Science*, **27**, 269-284.
- DECI, E. L., & RYAN, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*, New York: Plenum.

- DECI, E. L., & RYAN, R. M. (1991) *A motivational approach to self: Integration in personality*. In R. Dienstbier (Ed.), Nebraska symposium on motivation: Vol. 38, Perspectives on motivation. Lincoln: University of Nebraska Press, pp. 237-288.
- DECI, E. L., & RYAN, R. M. (2000) The "what" and "why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, **11** : 227-268.
- DECI, E. L., & RYAN, R. M. (Eds.) . (2002) *Handbook of self-determination research*, Rochester, NY: University of Rochester Press.
- FLASHMAN, R., & QUICK, S. (1985) *Altruism is not dead: A specific analysis of volunteer motivation*, In Moore, Larry F (Ed.), Motivating volunteers: How the rewards of unpaid work can meet people's needs. Vancouver: Vancouver Volunteer Centre, pp. 155-168
- 原田正樹 (2010) ボランティアと現代社会. 柴田謙治, 原田正樹, 名賀 亨 (編) ボランティア論, みらい, 岐阜, pp. 31
- HARRISON, A. D. (1995) Volunteer motivation and attendance decisions: Competitive theory testing in multiple samples from a homeless shelter. *Journal of Applied Psychology*, **80** : 371-385.
- 広瀬幸雄 (1993) 環境問題へのアクション・リサーチ: リサイクルのボランティア・グループの形成発展のプロセス. 心理学評論, **36** : 373-397
- 市川伸一 (2016) 体験活動とアクティブ・ラーニング. 教育課程研究会 (編) 「アクティブ・ラーニング」を考える, 東洋館出版社, 東京, pp. 94-97
- 池田幸也 (2006) 学校教育とボランティア活動のディレンマ. ボランティア学研究, **7** : 5-23
- 石野由香里 (2015) 演劇的手法を用いたボランティア活動の省察と変容的学習に関する研究～アクティブ・ラーニング, サービス・ラーニング等への適用に向けて～. ボランティア学習研究, **16** : 25-33
- 伊藤一統 (2002) 青少年のボランティアに関するイメージと経験についての調査研究. 中国四国教育学会 教育学研究紀要, **48**(1) : 336-341
- 伊藤順子 (2004) 向社会性についての認知はいかに行動に影響を与えるか: 価値観・効力感の観点から. 発達心理学研究, **15**(2) : 162-171
- 伊藤忠弘 (2011) ボランティア活動の動機の検討. 学習院大学文学部研究年報, **58** : 35-55
- 岩田京子 (2016) サービスラーニングの実施準備に関する一考察—本学科への適応を視野に入れて. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, **48** : 241-246
- 加藤茂生 (2015) 人間科学の歴史的パースペクティブ. 人間科学研究, **28**(2) : 169-172
- 河内清彦 (1999) 視覚障害学生および交流対象とした「キャンパス内交流自己効力尺度 (CISES)」の作成. 教育心理学研究, **47** : 471-479
- 敬和学園大学 (2017) ホームページ
<https://www.keiwa-c.ac.jp/department/activelearn/>
 (参照日 2017.03.21)

- 菊池章夫 (1998) 思いやりを科学する-向社会的行動の心理とスキル-, 川嶋書店, 東京
- 金城学院大学 (2017)
www.kinjo-gakuin.jp/document/dignity18/hotnews.pdf
(参照日 2017.03.21)
- 興梠寛 (2003) 希望へのカー地球市民社会の「ボランティア学」. 光生館, 東京都, pp61
- 厚生労働省 (2007) ボランティアについて.
www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf
(参照日 2017.03.21)
- 工藤真由美 (2012) PISA と今日の日本の教育における課題. 四条畷学園短期大学紀要, **45** : 1-5
- 倉掛比呂美, 大谷直史 (2004) 大学生にとってのボランティア活動の意味. 鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学, **5**(2) : 209-227
- LATANÉ, B. & DARLEY, J. M. (1970) *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?*. Appleton-Century-Crofts, New York (竹村研一・杉崎和子 (訳) 1997 冷淡な傍観者-思いやりの社会心理学-ブレーン出版, 東京)
- 前林清和 (2009) Win-Win の社会をめざして-社会貢献の多面的考察-. 晃洋書房, 京都, pp. 3-53
- 松川リツ, 津野良子 (1998) ホスピスボランティアの継続的活動に影響する要因の分析. 日本難病看護学会誌, **3**(1) : 73-81
- MASLOW, A. H. (1954) *Motivation and personality*. New York:Harper
- 松岡宏高, 小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学, **52** : 277-284.
- 松浦均 (2006) 援助行動発動時における社会的スキル, 共感経験, 援助行動の影響について. 応用心理学研究, **31**(2) : 76-88
- 妻鹿ふみ子 (2006) ヒトはなぜボランティアをするのか. 岡本榮一, 菅井直也, 妻鹿ふみ子(編) 学生のためのボランティア論, NPC コーポレーション, 大阪, pp. 38-51
- 三谷はるよ (2016) ボランティアを生みだすもの: 利他の計量社会学. 有斐閣, 東京
- 水野邦夫, 加藤登志郎 (2007) ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか?: ボランティア活動経験とパーソナリティ特性, 社会スキル, 充実感, ボランティア活動観の関連性からみた一考察. 聖泉論叢, **15** : 141-156
- 文部科学省 (1998a) 小学校学習指導要領. 東京書籍, 東京, pp. 111
- 文部科学省 (1998b) 中学校学習指導要領. 東山書房, 京都, pp. 117
- 文部科学省 (1999) 高等学校学習指導要領. 東山書房, 京都, pp. 352
- 文部科学省 (2004) ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書
www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/kekka/04071601/all.pdf
(参照日 2017.01.18)

- 文部科学省（2015）社会教育行政と多様なボランティア推進主体との連携モデルの開発に関する調査研究報告書
https://www.nier.go.jp/jissen/chosa/rejime/2015/volunteer_honbun.pdf（参照日 2016.03.15）
- 森井利夫（1994）ボランティア：これまでとこれから．森井利夫（編）ボランティア，現代のエスプリ 321，至文堂，東京
- 守本友美（2013）個人の生活課題とボランティア．守本友美，吉田忠彦（編）ボランティアの今を考える，ミネルヴァ書房，京都，pp25
- MURNIGHN, K., KIM, J. W., & METZGER, R. A. (1993) The volunteer dilemma. *Administrative Science Quarterly*, **38** : 515-538.
- 長沼豊（2008）新しいボランティア学習の創造．ミネルヴァ書房，京都，pp. 137
- 長沼豊（2010）実践に役立つボランティア学習の基礎理論．大学図書出版，東京
- 長沼豊（2014）人が集まるボランティア組織をどうつくるのか-「双方向の学び」を活かしたマネジメント．ミネルヴァ書房，京都，pp. 4
- 名古屋商科大学（2017）ホームページ
www.nucba.ac.jp/active-learning（参照日 2017.03.21）
- 内閣府（2008）平成 20 年度版国民生活白書
http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h20/01_honpen/html/08sh010203.html#123003（参照日 2015.3.10）
- 内閣府（2009）第 8 回世界青年意識調査
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>
（参照日 2015.12.01）
- 内閣府（2013）平成 25 年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html
（参照日 2016.11.29）
- 内藤正和（2009）地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究：依頼型のボランティアに着目して．愛知学院大学心身科学部紀要，**5** : 7-15
- 日本学生支援機構（2006）学生ボランティア活動に関する調査報告書．日本学生支援機構，東京，pp. 14-37
- 日本学生支援機構（2009）大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査 www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/volunteer/index.html
（参照日 2016.11.29）
- 新出昌明，重藤隆志，川崎登志喜（1998）長野オリンピックにおけるボランティアのイメージ分析：スポーツ経営学的視点から．東海大学紀要．体育学部，**28** : 21-30

- 仁部智子 (2006) 若年者のボランティア活動とキャリア開発の関係
<http://www.i.hosei.ac.jp/~hpsci/intro/pdf/WP2006-01>.
 (参照日 2015. 3. 10)
- 西川正之 (1997) 主婦の日常生活における援助行動の研究. 社会心理学研究, **13** : 13-22
- 西川正之 (2000) 援助とサポートの社会心理学. 西川正之 (編) , 援助とサポートの社会心理学, 北大路書房, 京都, pp. 1-7
- 西浦功 (1999) ボランティア活動観に関する実証的研究. 現代社会学研究, **12** : 71-87
- 岡田涼, 時岡晴美, 大久保智生, 岡鼻千尋 (2014) 学校支援地域本部事業における学校支援ボランティアの動機づけに影響する要因の検討. 香川大学教育実践総合研究, **29** : 39-47
- 岡鼻千尋 (2013) ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響. 心理科学, **34**(2) : 68-76
- 岡本栄一 (2005) ボランティア活動の土台. 岡本栄一 (監修) 守本友美, 河内昌彦, 立石宏昭 (編) ボランティアのすすめ:基礎から実践まで, ミネルヴァ書房, 京都, pp. 1-12
- 大久保智生, 加藤弘道 (2005) 青年期における個人-環境の適合の良さ仮説の検証-学校環境における心理的欲求と適応感との関連. 教育心理学研究, **53** : 368-380
- 奥山みき子, 中北裕子, 日比野直子, 山路由実子, 伊藤薫, 伊藤孝治 (2010) 三重県立看護大学生のボランティア活動に関する調査報告, 三重県立看護大学紀要, **14**:59-67
- 大嶺和歌子 (2000) 援助とサポートの心理学. 西川正之(編)ボランティア活動の動機と成果, 北大路書房, 京都, pp. 82-93
- 大東貢生, 柴田和子, 湯川宗紀 (2004) ボランティア・イメージと活動経験の連関性. 龍谷大学国際社会文化研究所紀要, **6** : 146-156
- 小澤亘 (2001) 「ボランティア」の文化社会学. 世界思想社, 京都, pp. i -iii
- PUFFER, S.M. (1990) Career professionals who volunteer: Should their motives be accepted or managed. *Nonprofit Management & Leadership*, **2** : 107-123
- 立命館大学 (2017) www.ritsumei.ac.jp (参照日 2017. 03. 21)
- RYAN, R.M., & DECI, E.L. (2000) Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 齋藤ゆか (2010) 大学でボランティア活動を促進する教育的意義と展望: 見えない力をどう育むか. 大学と学生, **78** : 7-13
- 坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫 (2002) 大学生における Volunteer Function Inventory の交差妥当性の検討. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, **9** : 24-31
- 桜井政成 (2002) 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析: 京都市域のボランティアを対象とした調査より. ノンプロフィット・レビュー, **2**(2) : 111-122

- 桜井政成 (2003) ボランティアの組織行動とボランティア・マネジメント:参加動機と活動継続要因への注目. 立命館大学
- 桜井政成 (2007) ボランティアマネジメント, 自発的行為の組織化戦略. ミネルヴァ書房, 京都
- 佐々木正道 (2003) 大学生のボランティア活動と受入施設・団体の対応に関する意識と実態. 佐々木正道 (編) 大学生とボランティア活動に関する実証的研究. ミネルヴァ書房, 京都, pp. 221-298
- 佐藤慶幸 (1999) ボランティアリズムとボランティア・アソシエーション. 現代社会学講義, 有斐閣, 東京. pp. 166
- 佐藤翠 (2009) ボランティア活動から得る満足感とニーズに合った活動内容の関連: 活動継続に及ぼす影響. 人間科学研究, 22:43
- 妹尾香織 (2001) 援助行動における援助者の心理的効果: 研究の社会的背景と理論的枠組み. 関西大学大学院人間科学: 社会学・心理学研究, 55: 181-194
- 妹尾香織 (2005) 援助行動経験が果たす心理・社会的機能に関する研究. 関西大学
- 妹尾香織 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 16: 35-42
- 妹尾香織, 高木修 (2003) 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果. 社会心理学研究, 18: 106-118
- 柴田謙治 (2010) ボランティアとは何か. 柴田謙治, 原田正樹, 名賀亨 (編) ボランティア論, みらい, 岐阜, pp. 2
- 柴崎あい (1997) ボランティア観とボランティア活動の関連性についての調査研究. 中国四国教育学会 教育学研究紀要, 43(第1部): 279-284
- 生涯学習審議会 (1992) 今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について. 文部科学省 www.mext.go.jp (参照日 2016. 11. 29)
- SMITH, D. H. (1994) Determinants of voluntary association participation and volunteering: A literature review. *Nonprofit and voluntary sector quarterly*, 23: 243-264.
- 総務省 (1994) 青少年とボランティア活動: 青少年のボランティア活動に関する報告書. 大蔵省印刷局, 東京, pp. 133
- 総務省 (2011) 平成 23 年社会生活基本調査
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/> (参照日 2015. 12. 01)
- STORY, D. C. (1992) Volunteerism: The "self-regarding" and "other-regarding" aspects of the human spirit. *Nonprofit and voluntary sector quarterly*, 21: 3-17
- 杉浦淳吉, 大沼進, 野波寛, 広瀬幸雄 (1998) 環境ボランティアの活動が地域住民のリサイクルに関する認知・行動に及ぼす効果. 社会心理学研究, 13: 143-151
- 高木修 (1997) 援助行動の生起過程に関するモデルの提案. 関西大学社会学部紀要, 29(1): 1-21

- 高木修 (1998) 人を助ける心-援助行動の社会心理学. セレクション社会心理学 7, サイエンス社, 東京
- 高木修, 玉木和歌子 (1996) 阪神・淡路大震災におけるボランティア:災害ボランティアの活動とその経験の影響. 関西大学社会学部紀要, **28**(1): 1-62
- 田中雅文 (2011) ボランティア活動とおとなの学び-自己と社会の循環的發展. 日本女子大学叢書 11, 学文社, 東京
- 田中雅文, 廣瀬隆人 (2013) はじめに. 田中雅文・廣瀬隆人 (編) ボランティア活動をデザインする, 学文社, 東京, pp i - ii
- 田中尚輝 (1998) ボランティアの時代-NPO が社会を変える. 岩波書店, 東京
- 谷川章雄 (2016) 私と人間科学. 人間科学研究, **29**(2): 137-141
- 谷田勇人 (2001) 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析. 社会福祉学, **41**(2):83-93
- 東京福祉大学 (2017) ホームページ
www.tokyo-fukushi.ac.jp/jukennavi/about/education.html
(参照日 2017.03.21)
- 筒井のり子 (2002) ボランティア活動の理論について. ボランティア活動研究, **11**: 2-4
- TRUDEAU, K. J., & DEVLIN, A. S. (1996) College students and community service: Who, with whom, and what?. *Journal of Applied Social Psychology*, **26**: 1867-1888.
- 上淵寿 (2012) 感情とパーソナリティ. 上淵寿(編), キーワード動機づけ心理学. 金子書房, 東京, pp. 41-42
- 海野和之 (2014) 社会参加とボランティア. 八千代出版, 東京
- 内海成治 (2000) 『ボランティア学研究』発刊にあたって. ボランティア学研究, **1**: 1-2
- 内海成治 (2014) はしがき. 内海成治・中村安秀 (編) 新ボランティア学のすすめ-支援する/されるフィールドで何を学ぶか-, 昭和堂, 東京
- 渡邊昌行 (2010) ボランティア活動の現状と課題. 柴田謙治, 原田正樹, 名賀亨 (編) ボランティア論, みらい, 岐阜, pp. 14-27
- 八木啓, 梶山純, 田之内厚三 (2003) 大学生のボランティア活動における援助の効果認識と援助成果の因子構造. 麻布大学雑誌, **7/8**:92
- 山本陽一 (2011) ボランティア活動を行う中高生の心理過程. 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集: 125
- 全国社会福祉協議会 (2010) 全国ボランティア活動実態調査報告書
www.shakyo.or.jp/research/20140808_09volunteer.pdf
(参照日 2016.11.29)
- 全国社会福祉協議会 (2015) 全国社会福祉協議会が把握するボランティア数
<https://www.zcwvc.net/> (参照日 2015.3.10)